
双六で人生を変えられた男

晃甫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双六で人生を変えられた男

【Zコード】

Z2621Y

【作者名】

晃甫

【あらすじ】

神様の遊戯によつて勝手に転生させられてしまった主人公。一応もらつたチートじみた能力を引っさげ転生した『T.S』の世界での苗字はなんと『更識』だつた。主人公は千冬、束と同世代。妹を溺愛する重度のシスコン。

#1 転生はやの時点でのフリケ（前書き）

どうもはじめまして晃甫といいます。
ISの一次小説読んでたらドップリはまり衝動的に書いてしまいました……

#1 転生はやの時^{ホノトキ}でフリケ

『すまなんだ』

『……は？』

『すまなんだ』

『ちょっと待て誰だアンタ』

突然田の前に現れたおっさんがただでさえ禿げかけた額を地面に密着させてなにやら謝つてきた。

うん、早い話が

D O G E Z A

『なんか分からんけど、とりあえず顔上げるよおつむ』

言われておっさんは顔を上げる。うわ、でこ真つ赤じやん。

『で？ なんで俺に謝つてんだ？』

『……お主覚えどりんのか？』

『……何を』

『いや……、覚えていないのなら無理に想い出す必要もなかい』

なんだよ氣になるじゃねーか。

『それでなんじゃが……』

『なにやらおひさんか人差し指同士をつとつさせながらジモジモ
だした。やめてくれ吐き飛んだ。』

『お主、転生してみぬか?』

『……はい?』

『転生? それって小説とかでよくあるパターンのやつやべ。
……あれ、待てことは俺つてまさか。』

『俺、死んでんの?』

『……つむ』

……〇へN

まじかよ。

『……なんで?』

『それがのう……神様同士で双六をやつとつたんじゃが、その止ま
つたマスに人を一人転生させる、といつものが……ちょ、待つのじ
や!! 思いつきり拳を振り上げるでない!!』

『本気で殺つてしまおうかと思つたよ。つーかなんだそのふざけた
双六は。 そんなん俺殺されて転生させられるのかよ!!』

『そんなんふざけたもん俺は理不直に殺されたと』

『いや、あのほんとすいませんでした』

再びあの上^ヒ下^シ座スタイルで謝るおつさん。……え？　てことは

『イツ神様？

『わうじゅ』

心を勝手に読むな。

『話戻すけど、転生つて具体的には？』

『「ひむ、お主にほんとすいません」の世界に行つてもういたいのじゅ』

『小説じゅねーか』

『仕方ないのじゅ。くじを引いたらこれだつたんじゅから』

くじ引きつて。

つーかH^ヒつてあの女尊男卑を体現したみたいな世界だろ？。やだよそんなあからさまに嫌な思いするつて分かつてる世界は。

『心配無用。テンプレは弁えておるわ。お主には何か能力を授けよう。そうすれば向こうの機械とも戦えるじゅ』

おこそれ俺生身つてことじゅねーか！

……ん？　あれならいいんじゅないか？

『じゃあ、とあるの一方通行^{アクセラレータ}の能力をくれ』

『ベクトル操作か。いいぞい』

よつしゅー！

あれならまずエリに負けることはないだろ？
反射してしまえば大抵の敵は倒せるし。
なんか楽しくなつてきただぞ。

『性別の希望はあるかの？』

『男に決まつてんだる』

『承知した。ではこれから主を転生させるぞ』

おっさんが言つた途端、後ろに大きな扉がなんの前触れもなしに現れた。

これをくぐればいいつて訳か。

『じゃあなあつさん』

『うむ。ほんとすまなんだ』

『もうこことよ。もう会つともねえだらうしな』

そうして意氣揚々と扉へ向かつて歩き出やつとした瞬間。

足元に大きな穴が開いた。

『……へ?』

『達者でのね』

『IJPちかよクソジジイニイレツ……』

そして俺の意識は闇の中へと沈んで行つた。

というのが俺が五年前に体験した出来事だ。

五年後、つまり現在五歳の俺はしつかりとIJSの世界に転生する
ことに成功していた。しかも何やら金持ちの家計らしく家も中々に
豪奢なんだ。

ん? IJSの世界に転生できたのかがどうして分かるのかって?

ハハハ、そんなこと簡単だよ。

「形無。こんなところにいたのか

「あ、父さん」

田の前に現れた親父（呼び名は今のところ父さん）が部屋を抜け出した俺を見つけ出した。

「戻りなさい」

「はーい」

あ、そつそつ話の続きだつたな。なんで「」が『EIS』の世界だと分かるのかつていうと。

俺の名前で一発でした。

俺の名前、
俺の苗字、
更識かたなし
わいしき

あの（・・）更識家に長男として生まれてた。

……それなんてフラグ。onz

#1 転生はその時点でのフラグ（後書き）

ちなみに主人公はこのあと生まれる妹を溺愛しますww

#2 原作キャラとの遭遇はやの時点ではアラケ（記書き）

基本的に亀更新です。

さて、俺こと更識形無は無事に五歳になり、明日は幼稚園の入園式だ。

生まれてからこれまでのことは余り話したくない。前世で二十歳だった俺が零歳児からやり直して母親のおっぱいしゃぶるなんて羞恥プレイ以外の何物でもなかつたしな。

いや実際転生してみて思つたけど、この家すぐね？ 完全に首相官邸かとおもつたわ。

俺がそんなことを思つてると、唐突に俺の部屋の襖が開いた（ちなみに俺の部屋は十一畳）。

「形無。勉強は済んだのか」

「終わった」

俺に宛がわれた部屋に入ってきたのは俺の親父、更識楯無。

暗部に対向するための対暗部組織『更識』の十六代目。つまり現当主だ。

「明日からお前は幼稚園に通うわけだが、」

「見とても厳しそうに見える」の親父だが。

「大丈夫か！？ 苛められたりしたらすぐ父さんと言つんだが！？」

とんでもない親バカだつたりする。

「大丈夫だつて。何も心配いらないから」

「本當か！？ いや心配だ。明日の入園式、やはり俺も

そんな親バカっぷりを遺憾無く發揮する親父だが、その言葉を遮るよう部屋に入ってきた女性が親父の頬を思いつきビンタした。

おい今のビンタなんか破裂音したぞ。

「あら楯無さん。明日は大事なお仕事があるのでしきょう？ 入園式には私が行きますから」

「み、瑞穂！？ しかしだな……ツ！」

「タ テ ナ シ サン」

ゾクゾクッ！ と背筋に何か得体の知れない悪寒が走る。
こえーよ、瞳から完全に光が消えてるよ。親父も完全に硬直してしまっている。

紹介が遅れたが、この大和撫子みたいな美人は俺の母親、
穗^{すば} ちなみに二三歳。

この更識家に十七で嫁いで十八で俺を生んだ若奥様だ。

「わ、わかった。形無の入園式はお前に任せる……」

「はい。任せてください楯無さん」

がつくりと肩を落とす親父。なんか哀愁漂つてんなあ。

そんなこんなで入園式。

俺はなにやら幼稚園の制服らしい紺色のブレザーに同色の帽子を被され、少し広めのホールの席に座っている。

どうやらこの幼稚園なかなかレベルが高い私立の幼稚園らしく、入園試験なるものまでやらされ合格したのがここに集まっている園児たちのようだ。

ん？ 俺は試験余裕だったよ？ だって精神的にはもういい年だぜ。イラスト見てなんの動物か答えるとか簡単すぎるわ。

「形無。緊張していない？」

「ん、大丈夫」

つーか隣に座ってる母さんの方が緊張してんな。まあまだ二三だし美人だから回りからちょー見られてるし仕方ないんだうけど。

「母さんね」

「？」

「実は今緊張してるわ」

「知ってるよ！」

この人実はとんでもない天然だから困る。料理とか家事とかは完璧なんだけどな。

あ、なんか始まるっぽい。禿げたおっさんってきた。

「えー本日は

割愛。

式が終わりました。

あんな長つたらしいおっさんの話誰も興味無いだろ(?)し、もし書いたら軽く五万字は行くだろうからカットで。

そんなわけで現在俺は幼稚園のクラス分け、早い話が“バラ組”というクラスにやつて来た。ちなみに教室の後方には親さん方が横並びしている。

クラスは全体で二十人という少人数制でそれが『ばら』、『きく』、『ひまわり』、『ふじ』の四クラス計八十人の構成になっている。

……なんか幼稚園児に混ざって座るのって恥ずかしいな。

俺の席はクラスの「じゅうじ」真ん中あたり。名前順で座席を決められるから『た』だと「じゅうじ」の辺りになる。

先生もまだ来ないみたいだから暇なので辺りをキョロキョロと見回してみる。
やっぱみんな幼いなあ。

ん？

おかしいな。

俺の見間違いか？

俺は「じゅうじ」と何度も目を擦つてみた。

……見間違いじゃない。

俺はその子のほうをジッと見つめてみた。

「……何なのかな」

するとムスッと不貞腐れたようにその子がこちらを睨んでそう言った。

腰まで伸びた髪、なにやらカタカタとノーパソを叩くその仕草。

ああ、これは間違いない。
アイツだよ。

俺の座席の左隣に座るこの少女。
左隣ということは名前順で既に必然的に『を行』になるわけだ。
そしてその少女の左胸の位置に付けられた可愛らしいバラをモチーフにした名札に書かれていた名。

しのの たばね

……。

え？ いきなり原作キャラとH・ンカウントとかこれ完全にフラグ
建てちゃ（トト）

#3 むかしからなるのせんの壁やツバケ（前編）

たつた一日でマークが1000を超えた……だと……？
お気に入り登録してくださった皆さんありがとうございます……。
流石INS人気と謂われるを得ない。

#3 お兄ちゅうになるのせんの壁紙でフリゲ

前回のあらすじ
何故か原作キャラとHンカウントしました。

「なんなかなジロジロ」ち見て。鬱陶しいから束さん視界に入らないでくれる?」

……。ん。

流石は『天災』だとか言われるだけあって俺らみたいな凡人は眼中にないらしい。

どうでもいいけどまだこの頃はあのウサ耳(簾ちゃんレーダーだとか言つてたやつ)付けてないんだな。

あ、当たり前か。

まだ簾とか生まれてすらいねーんだった。

「ああ、悪かつたな。綺麗な髪してたから見とれてた」

うん、あながち間違つてはいない。確かに束の髪の毛は絹みたいにサラサラしてたんだから。

「……ふん」

その言葉を聞いた東は俺を無視して再びパソコンのキー ボードを叩き始めた。

……この年で何をやるつとしだらうつな？ またかも「H」の基礎とか考えてんのか？

とかなんとか考えてたら「J」のばら組の担任らしい幼稚園の先生が入ってきた。肩までのショートカットと黄色いエプロンがよく似合う先生だ。

「はーい、今日からみんなの担任になりました。館加耶です、よろしくね」

館 加耶？

やかた かや

やかたかや

……おここの人やまやの一番煎じ感がふんふん漂つてんぞ。

あれ時系列的には「J」が先になるからあつちが一番煎じなのか？ 分からん……。

「じゃあみんな自分の名前を他のみんなに教えてあげよつねー」

というわけで名前順に自己紹介が始まった。みんなたどたどしくもしっかりと自己紹介をこなしていく。名前だけでいいって先生が言つてたのに何やら詳細な自己紹介を始める奴まで居たし。

「……は、はい。次の人に」

見る余りにも詳しそぎて先生若干引いてるじゃねーか。

お、次の子が立つて自己紹介を始めるみたいだ。

「お、織斑千冬です。よろしくお願ひします」

……。

……聞き間違いだよきっと。うん、俺耳悪いんだきっとやうだ。

織斑なんて珍しい名字じゃないし。前の奴も名字は織斑だったし。あ、字が違うわ。あいつは織村だったな。

……完全に主人公の姉さんじゃねえか！！

いや違うと言いたいけどあの髪型と雰囲気は間違いなく将来『ブリュンヒルデ』とか呼ばれる織斑千冬だ。

なんなんこのクラス。原作キャラとのHンカウント率高すぎだろ。とゆうか俺完全になんかのフラグ建てちゃってるよ。主に死亡フラグとか。

「はい、次の入～」

俺が沈んでいることなど露知らず、担任の館加耶……やかや（今

命名)は自己紹介を進めていく。

「篠ノ之束」

「…………」

俺と先生はそれだけ言って再びパソコンに向き合い始めた束に固まってしまった。この子ほんとに他人に興味ないんだな……。

なんとか先生が困りながらも自己紹介を続け出した。うん、頑張れよ先生。

あ、次俺の番だ。

「更識形無です。よろしくお願ひします」

我ながら無難で面白みのない自己紹介だと思うが仕方ないだろつ。人前で話すのとか苦手なんだよ俺。

「…………ん?」

自己紹介を終えて席についたところで気が付いた。

……何だこの視線の数は(主に女子)。

周りの子からの視線が半端ないんだけどなんでだ。俺変な自己紹介しない筈だぞ?

主人公は例に漏れずそつち方面において鈍感野郎です。殴つて下

れこ。

その後恙無く血口紹介は終了し、簡単な説明と明日からの日程が伝えられてその日は解散となつた。

原作キャラであるあの二人とは、一言も会話をすることなくそそくさと幼稚園を出た。

だつて今関わつたら間違いなく厄介事に巻き込まれるだろ。少なくとも中学生くらいまでは平穏に過ごしたいんだよ俺は。

入園式も終わり徒步で血口へと帰つてきた。やつぱ更識家つてデカイな。裏工作する暗部組織の対暗部組織とか言われてたからひつそりと暮らしてるとか一瞬でも考えた俺がバカだと思えるくらいにデカイ。

母ちゃんと手を繋いで家の敷地内に入る。完全に日本風のこの家は門を潜ると庭園が広がつてゐる。なんというか、ビックのヤクザ者の組長の屋敷みたいだ。

「ただいまー」

「形無つ！！」

帰つてきた途端に座敷から親父が飛んできた。どんだけ心配してんだよ。

「大丈夫かッ！？ 苛められたりとかしなかつたか！？」

「大丈夫だよ。そんなに心配すんなつて父さん」

「本当か！？ どうなんだ瑞穂！！」

相当心配しているのか俺が大丈夫だと言つてゐるのにも関わらず母さんに確認を取つてゐる。いや大丈夫だから肩を掴んでガクガク揺さぶらないでくれ。

「大丈夫ですよ櫛無さん。苛められるどころかみんなの注目の的だつたの。ねえ？」

「……？」

注目の的？ ああ、あの自己紹介の後になぜかバシバシと視線を集めたあれか。どういうわけかあのあと多数の女子が席に集まつてきて大変だったんだよな。

「あらあら。形無は分かつてないのね」

にこやかに微笑む母さん。できることならどうにかとか説明して欲しいが、どうせ教えてくれないんだろうな。

「注目？ それは一体どういふことだ？」

「親父……、俺は信じてたよ。親父も俺と仲間だつてな……！ あ、母さんが呆れて信じられないくらい大きな溜息をついてる。それより樋無さん。今日は大切なお仕事があつたんじゃないですか？」

そう。こんなにも親ばかな親父が何故俺の幼稚園の入園式に来れなかつたのかというと、『更識』としての仕事があつたからだ。詳しくは知らないが相当大きな捕物であるらしく、三日は家に帰つて来れないと言つていた筈なのだが。

つまり、我が母が一体何を言いたいのかといつと。

「……何で此処に居るんですか。タ テ ナ シ サン？」

いつの間にか地面に正座させられていた親父の身体はガタガタと震えていた。

これが更識の十六代目当主の姿とは到底思えない。完全に尻に敷かれてるよ親父。

「ぬ？」

「ぬ？」

「ぬけできちやつた」

テヘツと可愛らしく（実際はおつさんがやつているので全く可笑くはないが）舌を出してコツンと頭を叩く親父。

その後母さんからの連絡を受けた部下が親父を連れ戻しに来たの

はいつまでもない。

「あ、そりだ形無」

「なに?」

腰に出した、ヒドモハツムヒリササを呂こてぬれんせ。

「形無。あなたお兄ちゃんになるのよ」

「……………乃君？」

とんでもない爆弾を投下しやがった。

更識形無、五歳。
じつやら兄貴になるみたいで
す。

#3 お兄ちゃんになるのせんの壁紙やフレグ（後書き）

というわけで主人公千冬とも同じクラス&…兄貴になる。
もちろん妹で生まれてくるのは後の生徒会長ですよ。

長つたらしへて紹介をしたといつ園児もでてきます。〃

#4 原作キャラとの絡みはその時点でフリグ（前書き）

#4 原作キャラとの絡みはその時点でのフレグ

前回のあらすじ

我が母がとんでもない爆弾を投下しました。

母さんの爆弾発言から一夜明け、今日から幼稚園児としての生活が始まる。前世を計算に入れれば幼稚園に通うのはこれが一回目になるわけなのだが、転生したからか原作キャラと遭遇したからなのか既視感みたいなものはなく、寧ろ新鮮な気持ちで俺は幼稚園の門をくぐった。

基本的には送迎バスが毎朝出ているのだが、あの親バカ（親父）のせいで俺は母さんと一人で通園することに。親バカもここまでくると尊敬に値するよほんと。

一体何の危険性が通園バスにあるってんだ。

「おはようつばさりこまわ」

「おはようつばさりこまわ」

幼稚園の門をくぐり『ばら組』と書かれたプレートの教室へ向かうと、入口には黄色いHプロン姿のやかやが立っていた。

「早いのね更識くん」

「俺母さんと来たから」

「あら通園バスを使ってないの？」

「……うん」

まあ悪いことじやないんだけど毎朝歩いて通園は園児の体力的に
はキツイんだよ。

今日は初めての通常日程ということ最初クラスのみんなで外に
出て遊ぶことになった。

やはり幼いと順応性が半端ではないらしくほぼ初対面だというの
にすぐに打ち解けて遊びだした。

子供つてす「」。

みんなで鬼ごっこをしたり砂場で城を作ったりと楽しく遊んでい
るが、ただ一人。その輪に混ざっていない子たちがいた。

言つまでもない。

織斑千冬に篠ノ之束という原作キャラのお一人である。

千冬に関してはみんなに混じって遊びたいみたいだが、生まれも
つてのその雰囲気のせいなのか中々馴染めず、束に至っては広場の
日陰になつてているところでノーパソをカタカタと叩いていた。

千冬はともかく束はなんかもう色々と規格外すぎるだろ。屋外で
パソコンとかアウトドアなのかインドアなのかわからん。

はあ、と俺は小さく溜め息をつく。

前にも言つたが俺はあまり厄介事に巻き込まれるのは御免だ。た

だでさえあのクソジジイに勝手に殺され転生させられ、平穀などとは程遠い人生を送ることになってしまったのだ。

生まれてきて自分の名字が『更識』だったときはなんかもう色々と絶望したが、今は仕方ないと割りきつて生活している。別に更識家に不満があるわけじゃないし。

この幼稚園で原作キャラと遭遇したのは流石に予想外だったが、それはそれでいいかとも思う。関わらなければそれまでだからだ。

だが今の状況を見ると何だか切なくなつてくる。

精神年齢が高いせいでも千冬も束も手のかかる子供にしか見えないせいもあるのだろうが、なんかこう保護欲を掻き立てられるのだ。特に輪に入れずに涙目になつていい千冬。

こんな子供をほつとけるほど、前世で俺は悪い教育をされた覚えはない。

といつて。

俺は先ず織斑千冬を何とかするべく現在進行形で泣きそつになつている彼女のもとへと歩き出した。

うわ、間近で見たら涙腺が決壊寸前だよ。これ間一髪だよ。

「織斑……さん？」

どういふわけかさん付けで呼んではしまつたが仕方ないんだ。やつぱり『ブリュンヒルデ』だよ、気安く呼び捨てできない雰囲気醸し

出している。

「え……？」

いきなり見知らぬ少年に声を掛けられたせいで涙目だった千冬はキヨトンだ。うん、可愛らしいです。

「えーと……」

「更識形無。おんなじクラスの」

どうやら彼前が出てこなかつたらしいので自己紹介をしておくことに。

「更識くん……」

「そ。一緒に遊ぼうよ

「つ、うん……」

言つた途端にパアツと千冬の顔が晴れやかになつた。やはりまだ子供、遊びたい時期なんだろう。

そうして笑顔になつた千冬と俺は一人して近くの砂場に向かう。砂場には既に何人かの先客がいたが砂場自体が幼稚園児には余りあるサイズなので別に問題はない。

だが一応、子供社会の掟に従つて。

「ねえ、ここ使っていい？」

と如何にも子供っぽく先客である園児に尋ねた。子供は純粋であるが故に残酷だ。一度嫌われてしまえばクラス内からの孤立は必至。

「これは平和的に行かねば。

「いいよー」

幸いにも先客の園児は友好的で、すぐに了承をくれだ。それどころか『一緒にお城つくれうよ』と鶴の一聲によつて、俺と千冬はその園児たちの集団に混ざることが出来たのだ。

「やはや子供つてすい」と、一度仲良くなればすぐに打ち解けてしまつのだ。

大人にも「うススキルが必要だよ、全く。

さて、千冬が無事に輪の中に入ることが出来たといつでもう一人の問題児のところへ行きますか。

俺は砂場を一時離れ、大きな木の下でパソコンを膝に抱えている束のもとに向かつた。

あ、気付いた。

……案の定、めちゃめちゃ嫌そな表情していらっしゃる。

「よつ」

「……（カタカタ）」

え、sh-i ka to?

「なあ」

「……（カタカタカタ）」

やばい、Jの子まじで俺のJと眼中JのJが存在すらないJとJされてるよ。

「篠ノ井」

JJさんはさん付けしなくても呼ぶことが出来た。呼ばれた本人は本当に不愉快そう顔をしているが。

「……気安く私の名前を呼ばないで近付かないで話しかけないで」

……やつと反応してくれたと思つたらなにこの罵倒。どつかの標語みたいにきれいに罵倒されたのはこれまでの人生で初めてだ。

言つて再びパソコンを叩き出した束は私に構つたオーラを全開にしているが、生憎そんなぐらいで引き下がるほど俺はチキンハートではない。

「どれどれ」

「つーーー」

束の所持しているノーパソの画面を覗き込む。液晶に映つていたのはやはり幼稚園児には到底理解出来ないような難解な数式やら理論やらで、何をしているのか知らないがこれがISに繋がるんだろ

うなとは何となく分かつた。

「勝手に見ないで」

「お前難しい数式やつてんない」

「……解るの？」

「まあ多少はな」

言つていなかつたが前世の俺は現役バリバリの大学生だ。詳しく言えば工学部。数式や工学には少なからずの自信がある。

とは言つても、今パソコンに表示されている」との半分しか理解は出来ないが。

ほんとどんな頭脳してんだこの天才は。まあ一人でIISの基礎理論やら開発やらをやってしまう程の人物なんだから俺みたいな凡人が敵うわけがないというのは分かつてるけどさ。流石に幼稚園児に負けてるという現実を突きつけられると凹むわ。

「……、頑いいの？」

「篠ノ之には負けるけどな」

どうやら束は少しだけだが話をする気になつたらしい。

「じゃあ、これどう思つ?」

言つて束はおずおずとパソコンの画面を見せてきた。ふむ、これつて何かの設計図か? ……いやいや、これどう考へてもIISの設

計図じやねーか。下の方にコアがどうとか書いてあるし。ほんとに五歳児かこいつ。俺みたいに転生者ですとかいうオチじゃないよな? だがあやはり根本的には幼稚園児だ。幾つか欠陥のよつたものを見つけることが出来た。

「IJの二行目の項目とその下、あと二つも。理論としかりやあ間違つちやいないが現実的じゃないな。それだと燃費が悪すぎる」

「……ほんとに頭良いね。束さんもそう思つてたところなんだよ」

いや俺大学生ですから。なんてことを言つわけにもいかないのでその場は愛想笑いで誤魔化すことにした。ちょっと喋り過ぎたかな。こいつ頭いいからもしかしたら俺の正体バレるかもしれん。

「……名前は?」

「は?」

「名前だよ君の。君、他の奴とは何か違つみたいだし名前くらいは覚えてあげてもいいよ」

「……そりや Bieber。更識形無だ。よろしくな」

「更識形無。私は篠ノ之束だよ」

俺が頭が良いというのが好印象だったのかは知らんが、無視されるといつことはなくなつたみたいだ。

結局のところ、こいつは自分のレベルについて来ることのできる話相手が欲しかつたんぢやないだろうか。もしそうだとしたら俺はお角違ひだなあ……。既についてくのがいつぱいいつぱいだつての

にこれから東は天才、いや天災と称されるほどの人間になっていくんだ。まず間違いなく俺なんかじゃついていけん。

はあ、またなんかいらんフラグを建ててしまつた気がする。
まあ今回のは自分で動いた結果だから文句を垂れたりはしないが、
それでもなんだかあ。

せめて中学生までは平穏に過ごしたいとか言つてた昨日の俺をぶ
ん殴つてやりたい気分だ。

よお。俺だよ俺。
え？ 知らない？
しきょうがねえなあ教えてやるよ。

俺の名前は織村一華。
おりむら いちか

所謂転生者つてやつだ。なんでこの俺がこんな小説の世界に転生
したのかつてーと、神とか言う奴の話によれば神様同士で双六やつ
てて止まつたマスに人間を一人転生させるつて書いてあつたからら
しい。その話を聞いた時俺はすごぶる興奮したね。だつて転生とか
つて明らかに主人公フラグだろ？ 俺はそれに選ばれたつて訳だ！

つまり俺は選ばれた人種、これが興奮せずにいられるかってんだ。
そしてテンプレ通りに神から能力も貰つてこの『IS』の世界に転生してきたんだ。

そしてこっちの世界に生まれ、すくすくと成長した俺はつい昨日幼稚園の入園式を行なつた。そこで運命の出会いを果たすわけだよ。そう、この小説のメインキャラであり俺の嫁候補、織斑千冬と篠ノ之束だ！！

でもそこで俺はある間違いに気付いた。名前だよ。

俺でつきり転生したら主人公の一夏になつてると思つてたんだ。いや何か字に違和感あるかなとは思つてたがまさか違つてたとは思ひもしなかつた。

だがここで頭の良い俺は思い至つた。もしも千冬と家族だつたら、合法的に結婚ができないじゃないかと。

流石は神様だ。このことまで計算に入れて俺をこつやつて転生させ、幼稚園で運命の出会いを果たしたわけだな。

というわけで先ずは彼女たちと親交を深めねば。そこで俺は自己紹介で彼女たちに自分のことをとても詳しく教えてあげた。実家がどれだけ金持ちで俺がどれだけ頭が良くて……（その他もろもろ時間にしてざつと十分）。これで彼女たちは俺に興味を持つてこのあと俺のところにやつて来るだろうと確信していた。ついでに他の女子たちも。

ところがどうだ。他の女の子たちはどこの馬の骨とも解らない男のもとへと駆け寄り、嫁候補の一人は俺に何の挨拶もなくそそくさと帰つてしまつた。

翌日に当たる今日にしてもそうだ。

クラスのみんなで遊ぶことになつたため俺は真っ先に一人を誘おうとした。しかし、一人はそれぞれ一人きりで過ごしており、それを邪魔するのは野暮だろうという気遣いによって俺は大人しく彼女たちを見守つていた。

ところが、ところがだ。

現れたあの馬野郎（おそらく形無のことです）は彼女たちの思いなど無視してズカズカと踏み込んでいきやがつた！！ 嫌がつている千冬を無理やり砂場に連れてていき、遊びたくないのにも関わらず他の子供たちと城を作らせた。

束だつて一人がよかつたのに、強引に会話しようとしてパソコンを奪い取つてやがつた。

許せん。許せんぞ！！

俺の嫁候補たちに手を出しやがつて。いずれ痛い目に合わせてやる。

「んー？」

何やら得体の知れない悪寒が全身を駆け巡った。なんだ、誰かから殺意を感じるんだが。

幼稚園から帰宅した俺は現在、更識家の中で一番広い広間に集まっていた。ちなみに親父に母さん、祖父に祖母、更識の部下総勢五十名が一同に介している。

こんな更識家が勢揃いして一体何をしているのかといつと。

「では多数決を取るーー！」

一際大きな声で親父が何やら半紙程度の紙を両手に持つて叫ぶ。

「『海為』と『雪洞』と『姫無』、どれがいいーー！」

生まれてくるのが娘、俺から言えば妹であるといふことが検査で分かつたため、どんな名前にするのかを話し合っていたのである。それだけのためにこんな大袈裟にやるのかと思うかもしれないが、母から聞いたところによると今回はこれでも規模も名前の案も少ないらしい。

俺のときは名前の案は一百を超えて、最終的に十九の候補が残っていたというのだから驚きだ。なかには『玉無』なんて案まであつたらしい。

いやそれ男の俺につけたらダメだろ？

途中で眠くなつた俺は母とともに退席したが、白熱する名前会議は、結局朝まで続いたらしい。

#4 原作キャラとの絡みはその時点では隠れ（後書き）

ということで一人目のかよひと残念な転生者が登場。
妹の名前はもづかしあとで発表される予定。

#5 お前にの小物はその時点でフラグ（前書き）

田間ランキング……2位……だと?

驚きを超えて恐怖してます（汗）

あとで指摘いただいたんですが主人公と千冬の年齢と樋無の年齢に矛盾が生じてしまったのは完全にミスです。すみませんでした。

#5 お揃いの小物はその時点でフラグ

前回のあらすじ

原作キャラたちと絡んだら、得体の知れない悪寒が走りました。

一ヶ月後。

え？ 飛んだろつて？

そこはあれだ。気いたら負けつてやつだ。

あの日以降、幼稚園では何かとあの原作キャラ一人と過ごすようになつた。

俺が驚いたのは、原作では小学校から仲良くなる筈の千冬と束が僅か一週間で打ち解け、既に親友というレベルにまで親しくなつていたことだ。彼女たちに俺を足した三人は所謂『いつメン』というものになつたらしく、つい先日その証として三人でお揃いのミサンガを付けることになつた。

あ、そのミサンガは俺の母さんの手作りだ。最初は千冬が作ると豪語していたんだが、僅か一日で挫折したため母さんにその役を頼んだというわけだ。

天然というただ一点を除けば容姿、性格、技術もうもうパーフェクトな母さんは、たつた数十分で三つのミサンガを作り上げてしまつた。

それを知った千冬が項垂れていたがそこは置いておいて、三人お

揃いの赤いミサンガを俺は右手に、千冬と束は左手に付けてそれから毎日幼稚園に通っている。

さて。

今日は日曜日。

つまり幼稚園は休みなわけだ。時刻はまだ早朝だが、この時間帯になれば更識家ではそれぞれの一日が始まる。親父を始めとする男衆は朝の鍛錬を始め、母さんたち女衆は全員分の朝食を準備するために大忙しだ。

じゃあ、俺は？

俺はまだ幼稚園児だ。朝食の手伝いくらい出来るのかもしないが母さんたちのあの手際のよさを見ていると邪魔にしかならないんじゃないかと思う。

父さんたちの鍛錬に参加しようとした時もあつたが、メニューの最初にあつた町内一周ランニングを見た瞬間に心が折れた。前世で別段体力に自信があつたわけでもない俺にとつてあのメニューに付いていくのは不可能だ。

だって親父の部下たちメニュー終えたら所構わず大の字で寝てるんだぞ？

朝食食べる元気すら失つてんだぞ？

ということでやることが全くと言つていいほどない日曜日の朝。俺が一体何をしているのかと云つと。

「うーん、どうやって能力使つんだ？」

あの理不尽な神様から貰つた一方通行の能力、『ベクトル操作』をマスターすべく頭を悩ませていた。

いや能力を使うのに演算つてのが必要なことは理解できるんだよ。でもさ、まず演算で何するんだ。

この能力を貰つた時点でも（おれらが）一方通行のこの能力が使える演算処理能力は俺の脳にある筈なんだが、如何せん発動させるまでも解らない。

「何を考えればいいんだ……」

頭を使うイメージで真似てみても、一向に使える気配はない。結局、この朝は能力を使用することは出来ず、まずは理論立てをしつかりしないといけないことを学んだ。

何だよテンプレ的に能力貰つたんだから簡単に能力使えると思つたら違うのかよ！――

最近、わたしは幼稚園に行くのがとても楽しい。入園したばかりのころはみんなと一緒に遊べないことが悲しかったけれど、そんな私を助けるみたいに一人の男の子が話しかけてくれた。

男の子の名前は更識形無。

その日からよく形無と同じくして仲良くなつた束の三人で遊ぶようになつた。最初は束は嫌がつていたような素振りも見せていたけど、今じゃ三人でお揃いのミサンガを付けるくらいに仲良しだ。

私、織斑千冬は形無たちと友達になれて本当によかつた。

だからこそ、今日が日曜日であることが嫌だ。普通の子なら休みだとはしゃぐんだろうけど、私にとつて日曜日は幼稚園に行けない退屈な日なんだ。

自分の腕に付けられた赤いミサンガを見ながら、私は思つ。

「はやく明日にならないかなあ……」

などと思つてつる。

「ちーちやーん！…」

家の外から私を呼ぶなんとも聞き覚えのある声が聞こえてきた。誰だと思つまでもない、最近仲良くなつた、あの女の子だ。

私は二階の部屋の窓をガラツと開いて。

「なんだ東——！！！」

「おまけ、まだ朝の七時だぞ！！」

「束さんには時間という概念は通用しないんだよ」！！

「わたしをお前と一緒にするな」！！！」

全く、朝の七時から遊ぶなんてどれだけ元気なんだ。などと思い
つつもわたしの身体は部屋を出て階段を降り、しつかり外へと向か
っている。

そして伸ばした手は家の扉を開き。

「まあとりあえず、入って」

我が友達を家へと招き入れた。

わたしはとても迷惑でしたながら、田畠田が一瞬で馬鹿なしくも楽しいものへと変わった。

あそぶ

玄関に上がりた東が思ひこしたよひに声を上げる。

「どうした？」

「えへへー、あのね」

その内容を聞いたわたしは、すぐに靴を履いて外に出た。

「……で？」

俺は今驚きを通り越して半ば呆れていた。時刻はまだ七時半。日曜日の七時半といえば、俺みたいな特殊な幼稚園児でなければ間違いないまだ夢の中の時間帯だ。

しかし。

「おはようつ形無」

「おはようがーくんっ！－！」

……何故、この一人の幼稚園児は俺の家の門の前に立ってるんだ？

そもそも俺はこの一人に実家の場所を教えた記憶などない。何れは教えるつもりだけど、一ヶ月やそこらで実家まで行くことなど

なかつたからだ。

「何しに来たんだお前ら」

「遊ぼうよかーくん……」

「今日は日曜日だぞ？ それにまだこんな時間だし」

「束さん的にはかーくん家を探検したいな……」

「うんまず人の話を聞こつか」

最初の頃の『私に近寄るなオーラ』は俺に対しても全くと言つていいほど無くなつたけれど、やつしたら次はこんな風に向こいつから絡んでくるようになつた。

いや自分が招いた結果なのは分かつてゐよ、分かつてゐけどいつも対応が違うとビッククリするじょうが。

「『めん。迷惑だつたか……？』

「……いや、やつこつわけじやないけど

頼むからそんな潤んだ瞳でこいつを見ないで。罪悪感に磨り潰されそつになるから。

俺は幼稚園児らしからぬ溜め息をついて、

「ちよつと待つて。母さんに聞いてみる」

そう言つて座敷のほうへと走つていぐ。

いや、あの天然母のことだダメと言つわけないのは判つきついて、が、形式上勝手にといつのもマズイだう。

俺は朝食の準備を終えた母さんのといひに言つて友達が一人來たといひ旨を伝えた。

俺は『いいわよ遊んでらつしゃい』か『どんな子たちなの?』みたいな反応を予想していたんだが、流石は天然というか、我が母はそれを上回る発言をしやがつた。

「あら、なら一緒に朝食にしましょうか

「……え?」

「形無朝食まだでしょ?」

「いやそうだけど……」

「大勢で食べたほうが楽しいじゃない

「まあ……」

「呼んできなさい」

との事で一人を招き入れ、更識家の食卓につくことに。

千冬は見た目ヤクザみたいな更識家の男衆にビクビクしていたが、束は俺の隣で「口ニ口とかまぼこ」を頬張つていた。

朝食後は束がどうしてもといつので俺の部屋に案内し、仕掛けよ

うとしていた小型カメラを見つけ出して壊し束を一喝。

どうやらこの家に辿り着いたのも束が俺に仕掛けたGPSのおかげだつたらしい。

幼稚園児がオリジナルでそんなもん作んなよ。

その後も似たような流れを繰り返し、結果として幼稚園児は日曜日も遊びたい盛りとすることを痛感する一日となつた。

あと束の作る機器は危険。ほんとプライバシーとか丸裸にされるから。

#5 お揃いの小物はその時点でフラグ（後書き）

この時既に呼び方は「千冬」、「束」。
彼女たちは「形無」、「かーくん」になっています。

そして次はさらに時間が飛ぶ予定（汗

6 神様の能力で悩むのはその時点でフラグ（前書き）

お気に入りはあつとこつ間に500件を突破しました。ありがとうございます。

あと幼稚園のこりの席順が間違っていました。更識なので篠ノ之前にこなればいけませんでした。すいませんでした；

あとあとがきにアンケートみたいなのあります。よろしければ意見を聞かせてください。

#6 神様の能力で悩むのはその時点でフランク

前回のあらすじ

もう一度ト束を俺の部屋にあげないと誓つた。

突然ですが、小学生になりました。何故こんなにも時間をすつ飛ばしたのか、理由を言えば、特にこれといったこともなかつたからだ。

あれから千冬やト束とは完全に親友のような関係になり、今も手に付けている赤いミサンガが何よりの証だ。

このミサンガでの出来事と言えば、千冬のミサンガが切れた時のことと思い出す。ミサンガとは本来願い事をし、それが切れると願いが叶うという一種のおまじないみたいなものだ。だからミサンガが切れたなら願いが叶うと喜ぶ場面なんだが。

千冬の場合、何故かこれまでにないくらい大泣きしてしまった。

理由を聞けば、自分のミサンガだけ切れて友達ではなくなつてしまつと勘違いしていたらしい。確かに普通なら不吉だとか思うかもしれないが、これミサンガだぞ？

未来の『ブリュンヒルデ』もやはり今は幼稚園児だつてことか。ちなみにミサンガはすぐに母さんが新しいのを用意してくれたので千冬の泣き顔はすぐに晴れやかなものに変わつた。

あ、これといった出来事あった。

「あーう」

母さんの腕に抱かれてこすりこすりと視線を向けてくる赤ん坊。

我が妹、更識姫無。

ヤクザみたいな更識家の部下も黙る一歳児である。

最近言葉のようなものが聞こえ始めた。

彼女の名前は親父の部下による多数決の結果、『姫無』に決定した。親バカであるあの親父はどうしても女の子っぽい姫という字を入れたかったみたいだ。

それに対してまたバカな部下が今度は『棟無』むねなしなんて名前を候補に上げたもんだからその時の親父のキレッぷりはそれはもう凄かったらしい。

……俺のとこ『玉無』とかぶざけた名前出した奴の仲間だろそいつ。

「まーう」

いつの間にか母さんの腕から脱出を果たした姫無がハイハイで俺

の田の前までやつてきていった。流石にまだ立つて歩くことはできないが、ハイハイが出来るようになつてからは姫無の行動範囲が一気に広がり、忽然と姿を消すこともしそば。

そんな時役に立つのが。

……本当に毎々ここに役に立つのがあの束が制作したGPSだ。

これを姫無の服につけておいても常に把握することができる。

流石に小さなものを使うのはこの時期だけだが、やはりあまり気は進まない。

うん、やっぱプライバシーって大事だよ。

歩けるようになつたらGPS付けるのは止めてあげよう。……あれ。そしたら居なくなつたら見つけようがないな。その時はその時だな。

「よつと」

「やめははめ」

俺は近付いてきた姫無の身体を抱き抱えてやる。小学生の身体で赤ん坊を抱っこするのは乐じやないが。

こんな満面の笑みを向けられたらそんな小さなひとせりふでもよくなつてくる。

うん、妹万歳。

こんな可愛い妹は存在しているだけで正義に違いない。 そうなの
だ、異論を唱える奴には『玉無』の案を出した部下と同じ運命を辿
つてもいい。

ああ可愛いなあ。

こんな可愛い子が成長して『人たらし』になるなんて全く想像が
出来ない。 いや、想像したくないがどんな妹であれ俺は妹を（家族
として）愛します。

姫無に近付く奴がもしも現れたら更識の全勢力を持つて排除する
つもりだ。

……いやまず親父が黙つてないだろうな。 あの親バカの代名詞の
ような人間だ。 下手したら街が消し飛ぶかもしけん。 いや[冗談抜き
で。

「…………」

姫無を再び母さんに預けた俺は自室に戻り座禅のよつたスタイルで畠を閉じてこる。

何をしているのか。

超能力者を使うための特訓に決まつてるじゃないか。

幼稚園時代に初めて演算をしようと思つても全く出来なかつたのはまだ記憶に新しい。あれから一年以上経つたのだから、多少なりとも進歩があつていいはず。

……なんだが。

「……何か起きる気配はなし、か……」

あれから一ミリも前進していなかつたりする。いや、頑張つてはいるんだよ。小学校に上がってからは殆ど毎日パソコンして集中して取り組んでいる。

だがまるで俺のやる気と反比例しているかのよつて一向に兆しは見えてこない。

……俺、才能無いんじゃないかな……。

なんてことまで最近思つよつになつてしまつていてしまつていたんだが、

「……」で俺はふと気付いた。

俺がまだちつちつやいからダメなんじゃね？

よくよく考えてみれば、俺はまだ学園都市第一位の超能力を使うための演算を行う脳の大きさに至っていないから能力が使えないんじゃないだろうか。

一方通行ってどう考へても小学生じゃないし。もしこれが正しいとしたら俺は中学生、最悪高校生くらいになれば神から貰つたこの能力を使えるようになるかも知れない。

……でもこれが正しいなら俺はそれまで超能力が使えないんだよなあ。

『ベクトル操作』はあの時咄嗟に出たものだったが、いざとなつて考へてみるとこれなんてチート状態だと気付いた。やがて束が開発するだろう『IIS』。女性しか動かせないと言うのだから俺にそんなものを動かせる才能はないだろう。動かせるのは主人公である一夏くらいだ。

だとするなら、もしも。極力避けたいが万が一IISと戦わなくてはいけないような場面になつた時、この能力が使えなければバッドエンドまっしぐらだ。

つまり今現在俺には死亡フラグが立つてることになる。まるでどつかの未来のことが分かる日記にバッドエンド表示が出た時みた

いな。神様がくれたんだから使えない、なんてことはない（と信じたい）だろうが、使えないから……よそ、なんかほんとに現実になりそうで想像したくもない。

「はあ……」

まあでも、と俺は思考を切り替える。

「そこまで焦る必要もないのか……？ 束がEISを開発するのってもつと先の話だし」

それにこりからばかり気を取られるわけにもいかないのだ。
何故なら。

「形無。いるか？」

「こりゆ

「直に時間だ。準備しておけよ」

「はーい」

裸の向こうから親父の声が聞こえてきたが、気を取られるわけにはいかないといった理由がこれだ。

小学校に上がった年から、更識家としての対暗部用の教育が始めたのだ。

対暗部というくらいなのだから、俺はてっきり情報戦みたいなのを勝手に想像してたんだが、実際はそんな生易しいもんじゃなかつ

た。

先ずは体力があつてこそ、ということでひたすら体力づくり。小学校低学年の子供がいきなりフルマラソンは無理だよ親父……。

それが終わつてからは更識家が発祥だといつ柔術、『更識流』の特訓だ。

柔術とは日本古来の徒手、あるいは短い武器による攻防の技法を中心とした武術だが、『更識流』はどちらかと言えばその中でも合氣道に近い。相手を殺傷せずに捕らえたり、身を守つたりすることを第一とする柔術に加え、関節技や投げを取り入れているのだ。

その理由としては女でも体得するためには相手の力を利用することが必須、という考え方と対暗部ということもあり如何に迅速に任務を遂行するかを突き詰めた結果、相手に情報を吐かせることが最速かつ的確という結論にたどり着いたかららしい。

まあ、そんな風に相手の戦意を喪失させて口を割らせるには高レベルの話術が必要になるんだけどな。

あ、やべ。時間過ぎてた。

俺は急いで部屋を出て廊敷の隣に用意されている道場に向かつた。

「遅いぞ形無。一分三八秒の遅刻だ」

「いや父さん時計もつてないじゃん」

道場内にも時計はない。

「腹時計だ」

「なんてアナログな

「いいから。ほら昨日の続きをからやるぞ」

「一の型からだっけ？」

「復習のために一の型からだ」

言われて俺は軽く呼吸を整えて、ゆっくりと瞼を下ろす。
小学生の俺にはまだまだ腕力なんてついたやいないが、この一の型は相手の力を利用するものだ。多分瞼を開いたら親父の右ストレートが飛んできてるんだろうなあ……。

覚悟を決めて、俺は目を見開いた。

「更識流一の型

一・一

ふんふんふんふーん。

私は上機嫌でノートパソコンのキーを叩いていた。

何故私、篠ノ之東がここまで上機嫌なのか。それは今年、かーくんと同じクラスになれたからだ。去年のクラス発表で私だけが違うクラスになったときは本気で学校中の精密機器に凶悪なウイルスをぶち込んでやろうと考えたが（それは形無によつて阻止されました）、今年は一緒にクラスになれたんだから過去のことはまあ水に流してやううではないか。

へつへー。今度はちーちゃんがひとりぼっちだあ。

あ、でもちーちゃん寂しがつてないかなあ。来年は三人一緒になれるようにしておこうと。

「さてと」

私はいつの間にか止まっていた自分の指を再び動かし、ウィンドウに表示された設計図に目を向ける。

「ふむふむ。これじゃまだ完成には程遠いなあ

かーくんにも意見もらわなくちゃ。そう思うと自然と口元が緩む。かーくんは他の人間と違つて頭が良い。それは私に付いてこられる時点でも明らかだ。同じレベルで話ができるのがこんなに楽しいなんて、私は知らなかつた。

できることなら、一人でこれを完成させてちーちゃんに使ってもらいたいなあ。

「よーし、束さん頑張っちゃうぞーーー！」

#6 神様の能力で幽むのはなのはな(壁紙)でフリゲ(後書き)

ヒロインなんですが、千尋、束の他に誰がいいでしょうか。

- ・やまあ
- ・一夏ハーレム要員(やの中の誰か)
- ・いや、わづこじりこじり
- ・その他

#7 原作と違つたものや特徴で「フラグ」（前書き）

アンケートにご協力してくださった読者様、ありがとうございます。
す。

その中でも多数あつたのが、

- ・姫無、簪
- ・のほほん
- ・ナターシャ、クラリッサ
- ・もういらないよ

でした。

まだまだアンケートは受け付けているのによろしくお願いします
!!

#7 原作と違つのはやの時点でのフラグ

前回のあらすじ

妹は正義！！

異論は認めない。

さて。俺こと更識形無は小学校一年生に進級した。これは前回も話したんだが、去年は俺と千冬が同じクラスで束が大暴走し、（本気で）学校が使い物にならなくなるところだった。

なんだパソコンのデータを完膚なきまでに破壊し尽くすウイルスつて。しかも無差別。

そんなもんを何処にでもあるような小学校でばら蒔かれてはリアル警察沙汰だ。

……いや、束のことだから足がつかないよつに何重にも細工してるんだろうな。

取り敢えずそんなことになつてはマズイので束の頭にチョップをかまし、そのウイルスを破壊させて一先ずは解決となつた。

いや本気であればダメだろ。ウイルスに侵されたパソコンは完全に束の支配下に置かれ暴走し、一度と使い物にならないどころか破壊される前にそのデータは例外なく流出するらしい。

よかつたそんなことにならなくて。

今年は束と同じクラスになつたことで、あんなことは起らなかった安心していた。

……安心していたんだ。

しかし俺の安堵はクラス分けの張り紙を見た千冬の反応を見た瞬間に消し飛ぶこととなつた。

『……だ』

『へ?』

『形無と違つクラスなんて、いやだ!』

とんでもない駄々をこね始めた。

『いや千冬。小学校なんだからこいつらのは当たり前……』

『いやなんだ!…』

うん、人の話を聞かないパターンのやつですねわかります。

がつくりと頑垂れている千冬の隣では、同じクラスになつた束がピョンピョン跳び跳ねていたが即座に千冬に蹴り飛ばされた。

つうむ。まさか千冬まで束みたいな駄々をこねるとは思つていなかつた。

いや束の無差別テロみたいなのと比べれば全く持つて可愛いレベルなんだが。

だけれどになると中々千冬は頑固なんだよなあ……。ミサンガが千切れたときに束が付けていたミサンガを寄越せと言つたときのことを思い出すよ。

束からしたら『何その理不尽』 てきな感じだったんだろうが千冬は必死だったからなあ。結局大泣きしてしまつたが。

あの時は母さんが直ぐ様新しいミサンガを作つてくれたおかげで事なきを得たが、今回ばかりはどうしようもない。

『つう……』

ガックリと膝を折つて踞る千冬。やまい、泣き出しそうな気がする。

『……はあ

俺は小さく溜め息をついて。

『千冬』

『形無い……』

あ、尻に涙が溜まつてゐる。

『別に授業を別々に受けるだけだ。登下校だって一緒に出来るし、授業が終われば一緒に遊べる』

『そりだよひーちゃん。私たち三人は『いつメン』なんだから『

『つ、束にもこの気持ちわかるだりうー?』

『ふつふー。束さんはあの地獄のような一年をこれで乗りきつたんだよ』

これ? 一体何のことだと思っていると、束はポケットから一枚の紙切れを取り出した。あれは、写真?

『束さん秘蔵のかーくん湯上がりブロマ.....』

『なにしてんだお前』

即座に没収。

おかしいな更識家に仕掛けられてた小型カメラや盗聴器は俺が全部処分した筈なんだが。

『つたぐ.....、あれ?』

気付けば没収した筈の俺の写真が手から無くなっていた。
あ、犯人はアイツか。

『千冬.....』

『いー、これがあれば一年耐えられるーー』

『んなもん無くても大丈夫だらうが』

『いや、絶対必要だ！！』

『返せ』

そして直ぐに焼却処分だ。ついでにもう一度屋敷内のカメラ類を洗いざらい探し出して壊しとかないとな。

『頼むー。』

『…………』

そんな泣きそうな顔をしないでくれ。

俺が知ってる千冬はこんなすぐ泣くような女じゃなかつた筈なんだが、これから変わっていくんだろうか。

『はあ。分かつたよ…………』

これで千冬がいいと誓つんだから、ここは俺が退かないといけないみたいだ。

でもいつかあの『真は回収するけどな。

ところどがった四月当初から早一ヶ月。この頃になるとクラス内に友達もできるようになり、休み時間にもなるとドッジボールやサッカーをしこグラウンドへと駆け出していく。

元気だなあ、なんて思う俺はもう思考がおじいちゃん化してしまつているのかも知れないが、実際否定できない俺がいる。

今は給食が終わったあの昼休み。元気なクラスのみんなは挙つてグラウンドへと駆け出し、それ以外の生徒は図書室へ行つたり教室で一息ついたりと思い思いの時間を過ごしている。

そんな中、俺はと黙つと。

「ねえねえかーくん。」「んと」のパートつて変えた方がいいかな？」

「そんなこと俺に聞かれたも解んねえつて

「嘘、ばつかり。ねえどう思つ?」

「……変えると他のパートと喧嘩して駆動率が下がるからオススメはしない」

「やつぱりねー。束さんもおんなじ」と考えてたよ

……なら俺に聞かなくてもよかつたんじゃね? ところ疑問は抱いても口に出さない。こんな風なやり取りは一度や一度ではないから、いい加減慣れてきてしまつていて。

束は俺の意見を聞いて満足そうに頷いた後、再びパソコンの画面に視線を戻す。

最早言つまでもないかもしだれないが、現在進行形で束が完成させようとしているのは『IS』だ。しかも既に基盤は半分ほどが完成し、理論な構造も纏まり始めている。

俺の知識の中では確か完成はもつと後のはずだったんだが、このスピードのまま順調に製作が進行すれば中学生あたりで完成してしまいそうだ。

これは俺にとつてはとてもなく都合が悪い。

なにせ俺が神様からもらった一方通行のベクトル操作はおそらくだが脳が成長しないと使えない。最低でも中学生くらいにまでは成長しなくては。こんな状態で束がISを完成させ、巻き込まれるようなことになつたら間違いなく俺は死ぬ。

いやまじで。

そんな死亡フラグは御免な俺だから、一応毎日能力を発動させようと意識を集中させてはいるものの、やはり一向に成果は見られない。

もうなんかバッドエンドしか見てこない。いつぞ未来のことが分かる日記とかあればそれも回避できるのになあ。

と、そんなバッドな俺に、この後更にバッドなことが発生してしまう。

昼休みも終わつたため次の授業の準備をしているときのことだ。

教室に入つてきた担任の先生、駒田真子が何やら大量の書類を教

じまだ
まこと

卓の上に置いて一言。

「えー、来週の授業参観についてですが……」

……あ？

#7 原作と違うのはやの時点でのフラグ（後書き）

そんなわけで更識家の（いろんな意味で）すうじい両親が小学校襲来（笑）

#8 親バカな父はその時点でフラグ（前書き）

アンケート途中経過。

ナターシャ、クラリッサ、のほほんが強い……！
特にクラリッサ。なんでこんな人気なんだ……。

アンケート11月15日まで受け付けてます。

8 親バカな父はその時点でフリケ

前回のあらすじ
最悪の行事、襲来。

担任の駒田真子、通称「こまこ」の言つた言葉が一瞬理解出来なかつた俺は、もう一度よく脳内で彼女が言つた言葉を反芻する。

『来週の授業参観についてですが……』

授業参観。
ジュギョウサンカン。

それはつまりアレか。

我が子が一体どんな授業をどんな風にどんな子たちと受けているのかという学校生活の実態を知るために設けられた特別授業。

教室の後ろに親が並んで授業を観覧する、あれ。

ということは当然ながら、一人ともとは限らないが親が来るということになるわけだ。

呼びたくねええええええええツーーー

断言してもいいが、もしも俺の両親が来た場合、絶対に碌なことにならない。

親父が来たらあのウザイ程の親バカつぶりを所構わず遺憾無く発揮するだろうし、母さんはあの天然つぶりで教室を（別の意味で）支配下に置くだろう。一人揃つての襲来なんて論外だ。

これはマズイ。

授業参観当日休む。

「どうかこの事を親父たちは知っているんだろうか。知らなかつたのなら九死に一生を得た思いだが、既に知つていたなら俺はもう

頼むから授業参観があることを知らないでいてくれ。

そんなことを切実に思ひながら、下校を終えて更識家の門をくぐると。

「おう形無！ 来週授業参観があるんだからー！？」 父さん仕事なんかすっぽかして行くからなー！！

……知つていやがつた。

親父よ、仕事はすっぽかしちゃいかんだらう。せめて片付けてとか言えよ。

残念なことに、本当に残念なことに既に授業参観があるところにとを知つていたので俺はもう諦めるしかない。

……なんて言うと思つたか！－

俺は諦めない。平凡な小学校生活を維持するためにも、ここで母さんや、まして親父を学校に来させるわけにはいかない。どうにかして親父に用事を作らせないと……。

あ。

「父ちゃん」

「ん？ どうした形無」

庭で何やら筋トレに励む親父に向けて、俺は口を開く。

「姫無がその日、遊園地かどこかに行きたって言つてたけど

一歳児がこんなこと言つ訳もないし普通の人間なら信じる訳もないんだが、俺の親父は折り紙つきの親ばかだ。それはつまりどうこうことかといふと。

「んなにこいつー？」

「ひつこいつだ。」

ほんと、親父が馬鹿でよかつた。

俺はとりあえず親父が学校に来る」ことはなくなつたと思い安堵していると。

「いりこちゃん おれんッ！ 今からすぐに遊園地に行こー！」

」？<」

今なんておつしゃいましたかこのバカは。

「何してゐ形無。すぐ姫無を呼んではいい！」

いや、待ちと待つて。そんないきなり……

「毎わんせ無理だろ？ お腹の子の」ともある」

いせんねじりひこりがせ

「
故復
？」

「ん?
なんだ気づいてなかつたのか、母さん妊娠してるんだぞ?」

「セーラー服」とは早く言えよクソ親父ッ――！」

いやマジで知らなかつたよ。時期的にはそろそろかなあとは思つてたけどまさかこんな形で知られるとは夢にも思わなかつた。となるとまたあの更識冢勢ぞりいで名前会議が開かれるのか。今回は変な案出ないといいけど、出るんだろうなあ……。

「早くしろ形無。口が暮れてしまつ」

「本氣で今から遊園地行く氣なのかよ……」

「姫無が行きたいと言つてゐるんだら、な、なら行くしかないじゃないか……！」

（もうダメだこの親ばかは……）

結局、午後三時から俺と親父、姫無は近くにあるテーマパークへと向かうことに。元気なことになるなあんな事を言わなきゃよかったです。

ああ、神よ。何故俺はこんなにも慈悲深いのだろう。
本来ならハつ裂きにされるべきあの馬野郎（形無のことです）と同じクラスになつたこともそうだが、束に執拗に付き纏う馬野郎をまだ一度もタタ殴りにしていないのだかい。

俺も我慢の限界なんだが、必死に我慢している束を見ていると彼女の意志を尊重しなければ、と思うのだ。

だがもしもこの俺、幼稚園来からの幼馴染であるこの織村一華に
彼女が助けを求めてくるのなら、俺は迷わずその手を取つてアイツ
をボコボコにするつもりだ。

俺が負けることは有り得ない。

何故なら俺は神に選ばれた存在。神が見方についているんだ。負

ける道理が見つからないだろう。

それに神より賜つた能力だつてある。これを使えばただの一般人
である凡人なんて俺の敵じやねえ。

そう、この俺の超能力、『ダーツマダ未元物質』は最強だ！！

俺はこのチカラで、この世界の頂点に立つ！！

そして、ついに来る授業参観当日。

俺にとつてはまさに地獄と言えるこの日は、俺の心とは正反対に

快晴だ。

結局両親一人とも授業参観を知つており、そのためこわざわざ仕事を前倒しにしていたり楽しみにしていた両親に来るなと言える筈もなく、何も言えないままこの口が来てしました。

「なあなあ瑞穂。やつぱり男らしい感じのステッジのほうがいいかなあ！？」

「あらあら樋無さん。それはステッジやなくてツナギですよ」

「あ、いけね（テヘッ」

こんな光景を田の前で繰り広げられて拳を握り締めてしまつ俺は間違つていなければだ。

いやまじでもうアラサーのオッサンがテヘペロしても殺意しか湧いてこないからな。可憐さんなんてマイナス値もいいところだ。姫無の満面の笑みでようやく相殺できるようなんどんでもないものだから。

「いやあ瑞穂似合つてるよ」

「ありがとうございます」

いやいや母さん。確かに似合つてるけどもそんな真っ赤なドレス着て舞踏会にでも行く気ですかあなた。そんな恰好で行つたら間違いなく他の親父たちを落として帰つてくるよ。頼むからもつちゃんと常識つてものを弁えてください。だいたい妊婦なんだろうが。大人し田の服選んでお願ひ。

「ん？ どうした形無そんな浮かない顔して。あ、もしかして緊張してるのかあ？」

何を勘違いしたのかイイ笑顔で俺を見る親父。俺がこんな顔して
る原因はあんたらが原因なんだぞ……。

「はあ……、もおつ学校行つてへる」

「おひ。千冬ちゃんと東ちゃんたちと仲良くな

本気で学校行きたくない。

授業参観の時間だけ保健室行こうかな。まあ、そんなことする度
胸は俺にはないんだけどな。

「ひなればもう腹を括るしかない。

「よし……、

更識家の門を出て学校への道を歩きだした俺は決心した。

「絶つ対、授業参観中に後ろは振り向かない……！」

「ひして授業参観といつ名の生き地獄が待つ一日が幕を開けた。

#8 親バカな父はその時点でフラグ（後書き）

次回

最強（それはもういろんな意味の）な形無の両親、小学校襲来。

新世紀カタナシゲリオン

第九話

瞬間、心、折れて

#9 平穂とこの山葉をめぐる話題（前書き）

アンケート途中経過。

- ・ナターシャ 4票
- ・クラリッサ 4票
- ・姫無ど簫 8票
- ・やまや 2票
- ・のほほん 2票
- ・一夏ハーレム 4票（シャル1、ラウラ2）
- ・いらない 6票

見事に票が割れています：

前回のあらすじ
親バカが授業参観に来ることは子供にとって脅威以外の何物でもない。

ついにこの日、この時間がやつて来てしまった。
いやまじで来てほしくないんだけど残念ながらあの両親は間違つたスタイル（前話参照）で来る気満々だったし。はあ……、憂鬱だ。

「どうしたんだ形無。そをな腑抜けた溜め息をはいて

「千冬か……」

教室に入つて自分の机に突っ伏していたら既に登校していた千冬がこちらにやってきてそう言った。

つーかお前クラス違うのに毎朝うちのクラス来るよな。だったらあの~~写~~真いらないだろ。

「いや、今日授業参観あるだろ……」

「なんだそんなことか。形無の両親はもうひる来るんだろう?」

「……ああ

「いいじゃないか。うちは仕事の都合で一人とも来れないんだ、羨ましいぞ」

「……出来ることなら代わってほしいよ」

... ?

千冬は俺の両親のことは知っているが親父をなんかすごい鍛えてる人、母さんを何でも出来る完璧超人という認識でしかない。つまり知らないんだ。あの一人の本性と言うべきものを。

一体どうして親がこんなにも授業参観にこだわるのかが俺には理解できない。だって小学校の授業だぞ？ そんなの後ろで、しかも立つて聞いて一体何が面白いってんだ。子供が学校でどんな風に過ごしてるかなんて家庭で子供から聞いておけばいいじゃないか。

「ねせねいかーくらーひやん」

俺が再度『はあ、』と溜め息をついたのとほぼ同時に束が教室に入ってきた。

「ああーー！ かーくん東さんが教室に入ってきた途端に溜め息ついたつーー！」

……もう束の性格がめんどくさい感じでいる俺は悪くない筈だ。朝からこんなワーウー誤解して言われたら本当にいつか束見て溜め息つく日が来るかもしね。

「束、もひゅうとテンション上げてくれ……」

「溜め息つかれた上にジト目であからさまにイヤな顔されたつ……」

がーん…！ なんて擬音がまさにピッタリな表情で衝撃を受けて崩れ落ちる束はまあのままにしておいて、俺は本題である授業参観の対策を立てることに。

先ず、授業参観は給食、昼休みを終えた後の五時間目。科目は算数だ。別に授業自体に問題はない。前世で工学を専攻していたくらいだから数学は得意だし、それ以前に今やっているのは掛け算だ。常識として出来なければ人間失格と言われても反論できない。

……問題は俺の席の位置だ。まだ席替えしていないため、あいとうえお順で座っているわけだが俺は『さ』、位置は窓側から三番目の一一番前だ。つまり、教卓のど真ん前。

いや普通なら嫌がる所なんだろうけど位置的には後ろに並ぶ親たちから最も離れているので俺にとつては好都合だ。

じゃあ一体何が問題なんだと言いたくなるだろうが、まあ最後まで言わせててくれ。

それは。

「かーくんかーくん…！ 授業参観だつてさーーー！」

……俺の右隣の席が、束だということだ。

どういわけか『やらしき』と『しのの』の間には田中やら篠田などの苗字が勢ぞろいしておりこうこう構図になつたわけだが、ぶつちやけ束の隣は苦労が絶えない。こんなにも気さくに話しかけ

てくる彼女だが、やはり他人には興味などないらしく会話をしようともしないのだ。しかも頭脳は既にそちらにいる教師など置き去りにしてしまつほどのもので、教師陣も束に強く言えない状態なのだ。

そんな他人に全くの無関心である束が唯一、会話をしているのが俺。

あとは言わなくても解るだろつ。俺は教師と束とのパイプ役にされているのだ。

たかだか小学一年生の少女に頭が上がらないといつのもおかしな話だが、実際にそうなのだから仕方ない。

そんなわけで俺はよく先生たちに束への伝言などを預かつたり、伝えてと言われたりするんだよ。

たとえそれが授業中であつても。

これが俺が問題だといつ点だ。

俺の席はさつきも言つたが一番前。しかも教卓に最も近い席だ。

当然、先生との距離も最も近くなるわけで。そうすると授業の内容を理解できているかどうかを束に聞くよつに俺に言つてくるわけで。

そうなると俺は束は余裕で理解していると分かつていても形式上聞いておかないとけないんだ。

するとどうだ。教室の一番前で先生と生徒が授業中であるにも関わらず話し合つていて構図が出来上がつてしまつ。

うん。間違いなく田立つ。

親さんたちの好奇の目に晒される」とになる。

そんな田立つのは避けたい俺は、どうにかして授業参観に欠席できないものかと考えたりもしたんだが。

「はい皆さん席についてください」

無情にも時は流れ五時間目。授業、算数の開始を告げる「いま」の声が教室内に響いた。

朝の宣言通り、俺は後ろを振り向いていない。もし親父たちが居て、もし田線が合いでもしたらあの馬鹿は親バカっぷりを発動させるに決まっている。

ざわざわと教室内が落ち着きがないことから相応の数の両親が来ているんだろうなということは予想できる。

始まってしまった以上はもう受け入れて早くこの授業が終わるのを祈るばかりだ。

頼むから、なにも起こらずに終わってくれ……！

しかし。やはり俺はそんなフラグをいつの間にか建ててしまつていたんだろうか。

授業開始早々、よく聞きなれた、だが今は最も聴きたくない声が教室内に轟いた。

「『』が形無がいる教室かあ、小学校なんて何年ぶりだろ？なあ！

！」

.....。

「あらあら樋無さん。あまり大きな声を出すと授業の邪魔になってしまいますよ」

.....。

「おひと。すまんすまん」

俺はこんな声知らないシラナイ。え？ 誰の声？

心無しか後ろで小さなどよめきが起つた気がする。大体、予想はつくけど。

だが振り向かないぞ。この時間を無事に終えるためには、あの親バカとは関わっちゃダメなんだ！！

「お、形無！ 来たぞーーー！」

無視。

「形無、じつちだじつち

聞じえない聞こえない。そしてあの言葉に返答、またはツッコミは厳禁だ。

「形……誰だお前」

「誰に話しかけてたんだてめえツ……」

そいつ俺とは似ても似つかねえ。ポツチャリ君じやねえか。そんなのと俺を間違えるとか眼球腐つてんじやねえのか。取り替えてやろうか？

「あ、そつちにいたのか形無」

「どう間違えれば俺とそいつが同一人物に見えるんだよつ……」

「いやー、今日慌ててたからコンタクト付けるの忘れてきちゃつてなあ」

「帰れ……」

俺の無事に授業参観を過ごすという目標は、ものの五分で親父にぶつ壊された。しかも思いつきり振り向くちやつたし。他の親さんからの視線がハンパないんだけこれ。

……見ちやつたからもう開き直るけどや、親父たち絶対その格好は間違ってる。

ツナギがダメなら普通はスーツとか来てくるだろ。なんで親父は袴穿いてんだよ。どこの武士あんた。

母さんも母さんで、ドレスは止めてって言つたけどなんで真っ赤な着物着て来てんだ。

二人そろつたら完全にそつち系の人じやん。俺もそうだと思われちゃうじやん……

しかもやっぱ母さん他の父親の視線釘付けにしてるし。

「……はあ」

俺は親父にシッコンだのを思に出し、自己嫌悪に陥りながら授業を受けること。」

案の定俺は注目を浴びちまつたし、親父も親父で立つてゐるし、母さんも視線を集めまくつてゐる。ほんとに授業どころじゃないんだよ……。

だから呼びたくなかったんだよ、いつなることが分かつてたから。

平穏つて、なんですか。

俺には一生、縁のないものなんですか。

「じゃあこの問題わかる人〜」

「「「はーーー」」

「形無、手を上げるんだーー 答えはま64だぞーーー。」

「違ひますわだよ」

掛け算間違えるってどんだけだよ親父。

「更識さん授業中はお静かに……」

「あ、すこません」

もうほんと勘弁してくれ。

これ以上親父に授業を引っ張り回されるのは御免だ。

そんな堂々と間違いを述べた親父を見てクラスの生徒や親御さんたちはクスクス笑ってるが、親父の隣の人物だけは全く笑っていなかつた。

「タ テ ナ シ サン? 授業中は静かにと、言つたでしょ?...
...?」

和やかだった教室の空気が、一瞬にして絶対零度に。

親父がカタカタ震えているのはこの寒さのせいなのかそれとも...。

「ちよつと、出ましょうか」

「みみみ瑞穂! ? なんでそんな怖い顔して.....」

「櫛無さんのせいですよ.....?」

どうやら母さんの逆鱗に触れてしまつたらしい親父は、襟首を掴まれ引きずられるようにしてズルズルと教室の外に連れて行かれた。ピシャンッ、と閉まつた教室のドアの先は、怖くて誰も覗けなかつた。

「.....もほんと、勘弁してくれ.....」

結局この後何事もなかつたかのように授業参観は終了したが、俺の両親はクラス内で一躍有名人となつてしまつた。そしてそれは俺も例外ではなく、散々質問責めにあうことになつた。

……もう絶対に親は学校に呼ばない。そう心に誓つた小学一年生の春だった。

9 平穂とこの山樂をめのひの山樂でつか（後書き）

毎日投稿しようと毎日投稿しても短いし、長くしてみるとある
時間がかかる…

べつにちがいんだ…！

#10 天才に想われるのはその時点でフランク（前書き）

アンケート途中経過

- ・姫無、簪 13票
- ・いらない 8票
- ・ナターシャ 4票
- ・クラリッサ 4票
- ・のほほん 3票
- ・やまや 2票
- ・一夏ハーレム 6票（シャルリ、ラウラ）
- ・虚 1票

11月15日まで受け付けるのとまだまだ意見を聞かせてください。

#10 天才に想われるのほその時点でフランク

前回のあらすじ

授業参観なんて済えて無くなればいいんだ。

さて、あの授業参観からさうに月日が流れ（ツツコンだら負け）、桜は散り、緑の葉は赤や黄に染まり始めた今日この頃、我が更識家に新たな家族が加わった。

さらしきあんざし
更識簪。

つひの部下を黙らせる姫無をも黙らせる最強の〇歳児だ。

うん。いやもうね。

姫無も可愛いけど簪もヤヴァアイ。可愛さが留まるところを知らないとは正にこのことか。

そして簪が生まれる少し前、例の如く家族総出の名前会議が開かれた。俺こと形無、姫無と『～無』という字が付いているから今回もそういう名前になるのかと思いきや、そういう類の名前候補は驚くほど少なかった。

ただ、前回の姫無の時に却下されたことが諦められなかつたのか『棟無』が再び案の中に紛れ込んでいたが、親父が即刻削除した。ついでここに案を出した部下は一ヶ月間絶食の刑に処された。

というわけで最終的には『簪』、『小鳥遊』、『轍』などが残つたが、多数決の結果最も多かつた『簪』に決定したというわけだ。

「あうあう」

まるでオットセイかなにかのような声を上げている簪を、姫無があやしている。姫無も簪も祖母の血を濃く受け継いだのか透き通るような水色の髪色をしている。俺はそんな明白な水色じゃないがやはり少しばら祖母の血が流れているのか、紺色の髪の毛だ。まあそれは置いておいて、姫無ももう一歳だ。言葉も話せるようになつてきて、一緒に居る時間も増えた。

立派に育つて兄さん嬉しいよ。……一歳じゃまだなんとも言えんか。

家族がまた増えたことと、親父の最早病氣とも言える親バカっぷりは更に加速。更識家の十六代目だつてのに今やその威儀は俺の中から消し去られようとしている。

仕事っぽり出して娘と遊ぼうとする父親なんか尊敬出来るわけねえだろ。

まあそんな体ならくつぶりを見せられて、我が更識家最強との呼び声も高い母さんが黙つているはずも無く、授業参観の時のように襟首ひつつかまれてオハナシされることもしばしばだ。

そんな光景も、もう見慣れたもので『またかよ』くらいたしか思わなくなつてきている自分が居る。慣れつて怖い。

……そう、本当に慣れつて怖い。

だつて、おっさん神様から貰つたアクセラレータ一方通行の超能力、使えない期間が長すぎてなんかもうこのままでもいいやあ（ヤケクソ）的考えに至つてしまつているのだから。

いや超能力、使いたいよ？ つーか使えなかつたら俺この世界で生きていけないし。こんな束やら国家間の謀略のせいで死亡フラグ建ちまくる世界で丸腰じや殺してくださこいつて言つてるようなもんだ。

もちろん俺はそんな自殺志願者ではない。故に今も毎日かかさず演算を試みてはいるものの、やはりというかなんといつか、うんともすんとも反応しない。

これじゃ間違いなく能力が開花するより先に俺の心が折れる。
というか既に折れ掛けだ。

だから演算をしようとするときも『どうせ今日も無理なんだろうなあ、』的諦めが思考の何処かに少なからず存在している。

これじゃお先真つ暗だよ。妹達の花嫁姿を見る頃には俺遺影になつてるよ。

と、こつちがこんなお先真つ暗（比喩でもなんでもなくリアルに）状態だから、必然的に更識流のほうの修行には力が入るわけで。小学一年生ながら親父の部下の下のほうになら勝てるくらいにまで成長している。こつちが案外順調だから、能力のほうもなんとか諦めずにやつていられるんだ。だつていくら一方通行の『ベクトル操作』があるとは言つてもまだ使えないし、なによりも能力に依存しそぎてあんなひょろひょろモヤシにはなりたくない。どうせならしつか

りと筋肉つけたいじゃないか。

「形無」

「父さん」

「今日は四の型を教えてやる。道場にここ」

普段はダメ親父全開な我が父だが、こいつときはなにやら精悍だ。仕事してる時もそうだが、いつもこのくらい真面目なら母ちゃんのオハナシも受けなくて済むのに。

俺はそんなことを思いつつも、足早に親父の後を追いかけた。

……何故だ。

必要な条件は全てクリアしている筈だ。

転生者って時点でもう既にフラグは建つてるはずだし（主にハーレム）、名前だってこの世界で重要な意味を持つ名前だった。

幼稚園も原作キャラ一人と同じでもうこれは運命だと思ったし、なんと俺の家の近所にはあの五反田家の食堂まであった。

小学校に上がつても千冬、束とは同じクラスになつたし、これはもつ間違いなく俺は彼女たちにフラグを建ててゐると思つた。

……思つてたのに…！

クソ、今思い出しても腹が立つ。あれは小学校に入学して千冬、束と同じクラスになり、一人でなにか話していた所へこれからもよろしくなと話しかけに行つた時のことだ。

『よつ

『『……』』

『小学校でも同じクラスになつたな。また一年間よろしくな。千冬、束』

『またお前か……』

『束さんには話しかけないでくれるかな。馬鹿と残念なのが感染つたらヤだし』

『おじおじ一人ともシンデレだな。ま、すぐにデレてくれるとは思つが。

『そんなつれないこと言つなよ。俺たちの仲だりつ~』

『お前と友達のなつた記憶はない』

『……（がん無視

ガラツ

『はー、今日から小学生があ』

『形無…』

『おはようかーくん… ちよつと今から束さんとかーくんを別々のクラスにしたこの学校に特製のウイルスをぶちまけてくるから…』

『千冬、どりあえずソイツ押されて』

『わかった』

『離してちーちゃん…! 』んなの横暴だよ、不公平だよ…』

『何が横暴だよ…。クラス分けなんて運みたいなものだろ』

『きつとかーくんと束さんを引き離すために学校側がなにか巨大な陰謀を』

『あるわけないでしょうが』

なんて楽しそうにこの俺を差し置いて嫁たちと会話してやがるのは馬野郎。千冬たちにたかるハエみたいな奴だ。

つーかこいつ…! こいつが俺の計画を台無しにしてやがるんだ…!

本当なら幼稚園の時点で一人から、

『私、大きくなつたら一華くんのお嫁さんになる…』

みたいなイベントを発生させてラブラブになる筈だったのに、二人の近くにはいつもアイツがいて俺の邪魔をしやがる！！いつもいつもいつもだ！！ もう能力使ってアイツぶつ飛ばそとかと思ったよ。まあ、まだ使えないんだけどな。

そんなアイツはどうやったのか束にゴマをすつて近づき、パソコンを見ながら時々アドバイスしているが、お前何様のつもりだよと言いたい。

お前が偉そうにアドバイスしてる相手はのちの天才科学者、篠ノ之束なんだぞ？ お前なんかが気安く話していい相手じゃねえんだ。千冬だって『ブリュンヒルデ』と称されることになる最強のIS操縦者だ。本来ならお前なんか同じフィールドにすら立てない人間たちなんだ。

ま、俺は彼女たちと同類、所謂天才ってやつだからいいんだけど。

更識形無。

ここまで俺をムカつかせたのはお前が初めてだ。いいだろう、認めてやるよ。お前が俺にとつての障害であるってことを。

俺はそんな怒りを込めて、自宅の部屋で口を開く。

「更識形無。ムカついた、テメエじゃ俺の足元にも及ばねえってこと教えてやるよ」

某常識が通用しない人のセリフを言つて、俺は不敵に笑う。ぶつ倒す。……能力が使えるようになつたらな。

「んー?」

ゾワゾワッと悪寒が全身を駆け抜ける感覚に俺は身震いした。なんだ、なんか前にもこんなのがあった気がするぞ。

誰かに恨まれてんのか?

そんなことした記憶はないんだけどな。

「どうした形無。集中力が乱れているぞ」

「あ、ごめん」

「まあ続きだ」

俺は息を取り直して再び親父の前に構える。

しかし今は一体なんだつたんだ?

「ふむふむ。かーくんはこんな修行してるのかあ。なんか漫画の主人公みたいなことしてるねえ」

かーくんの家にこっそり仕掛けた（大部分は形無によつて処分された）超小型カメラによつて撮影されているかーくんの修行を見て私は素直にそう思った。

しかもあれはどう見ても私と同じ小学校二年生の少年がやるのうな修行じやないよかーくん。普通の子供がやつたらソックローで病院送りだよ。

「ふふ。やっぱりかーくんは面白いなあ

こんな厳しい修行もこなして、私と同等、もしかしたらそれ以上の頭脳を持つていて。そしてなによりも、優しい。

むりやり家に押し掛けても意見を求めて、最後は結局了承してくれるのだ。これを他の子にもやってるのは納得いかないけど、それもかーくんだし、とつてしまえばそれで納得できてしまう。

「また明日、かーくんにコレのアドバイスもらおうと

田の前にあるノートパソコンに表示された設計図のようなものに視線を移し、彼との会話を想像して頬が緩むのを自分でも自覚する。

「~~~~~、明日まで我慢できない。今からかーくん家に行こう~」

！」

即断即決が心情の私はノーザンを小脇に抱えて外へ飛び出した。
彼の家の門で困惑する少年は、結局話を聞いてくれるのだろう。
それを考えると、どうしようもなく私は嬉しくなるんだ。

#10 天才に想われるのはその時点でフラグ（後書き）

多分次から中学生……；

早くIIS発表させないと話進まないし（汗

キャラ設定&おまけ（前書き）

昨日は更新出来ず申し訳ありませんでした；
今回はキャラ設定とおまけです。若干これからのネタバレが混ざります。

あと前々から言っていた形無と姫無たちとの年齢の矛盾ですが、
この強引に直しました……。すいませんでした；

そしてアンケートですが、大勢の読者様ご協力ありがとうございました！

最終的な結果として

- ・姫無＆簪 14票
- ・必要ない 9票
- ・クラリツサ 6票
- ・ナターシャ 5票
- ・のほほん 4票
- ・やまや 2票
- ・虚 1票
- ・一夏ハーレム要員 7票（シャル2、ラウラ3）

という結果でした。

わざわざアンケートご協力してくださった読者の方々の意見は
本当に全て採用したいところですが、今回はこの中で多かったの
を採用、または少し変えて採用させていただきます。

ありがとうございました。

キャラ設定&おまけ

更識形無

- ・身長 167cm（中学生現在）
- ・体重 52kg（同）
- ・容姿 中の上／上の下

神様たちのお戯れ、双六の出マスに書かれた『人間を転生させる』という理不尽な理由によつて『エリ』の世界に転生させられてしまつた今作品の主人公。

紛れもない日本人だが、外人である祖母の血も若干ではあるが流れしておりその影響か紺色の髪色をしている。

裏工作を実行する暗部組織に対抗するための対暗部組織『更識』を要する更識家の長男として生を受けた。

幼稚園入園時に原作キャラである織斑千冬、篠ノ之束と出会い数日その後友達となる。以来『いつメン』とまで呼ばれるようになり、お揃いの赤いミサンガをそれぞれ腕に付けている。中学生になった今でも一日の大半はこの二人と過ごすことが多い。

性格は基本的におおらか。死亡フラグやその他もうもうのフラグ満載のこの世界を生き残るためにと決意し転生したが、生まれてきたのが『更識』の家であつた時点で挫

折した。そして幼稚園で千冬、束と知り合ったことが止めとなり、原作とは関わらずに生きていくという選択肢は切り捨て、今はいかにして女尊男卑になる世界を生き抜くかを田下模索中。

神様からもらつた超能力、一方通行の『ベクトル操作』は脳がまだその段階まで至つていなか使える気配が全くて言つていいほどない。

そのせいか父から指導を受ける『更識流』の柔術に力を入れるようになり、小学校低学年の時点で父の部下の下のほうの人間ならば倒せるほどの成長を見せる。

本人曰く、

『能力に依存しすぎて一方通行のようなヒヨロモヤシにはなりたくない』とのこと。

姫無や簪には更識家に代々仕える布仏家の専属メイドがつくようになる（小学校に上がる）が、形無は自分のことは自分で出来るとメイドを拒否したため専属の付き添い人はいない。

……ところは建前で、自分の身の回りの世話をしてもらうのが恥ずかしいところのが本当の理由だつたりもする。

小学校を卒業後、千冬、束とともに近くの中学校へと入学する。

重度のシスコン。

というか妹は正義といつよくわからない理屈を持っており、二人の妹のためなら素手で戦車と闘つくりに愛している（家族として）

更識楯無

34歳。

更識家の16代目。

つまり現当主。形無、姫無、簪の父であり更識家の大黒柱的な存在である。更識家の部下として実に百数十人を従え、裏工作をする暗部組織に対抗するため仕事に出ていることが多い。

しかし、最早病氣以外の何物でもない親バカであり、我が子の為なら例え国の未来が掛かっていたとしてもすっぽかして子供を取るほどの救いようのない親バカ。

それ故に妻である瑞穂からのお話（といつ名の折檻）は日常茶飯事となつている。

だが部下からの信頼は厚く、また妻である瑞穂も仕事に対しての心配はしていない様子。

更識瑞穂

31歳。

17歳といつもこの更識家に嫁いできた若奥様。大和撫子のように長く美しい黒髪とどう考えても20代前半にしか見えない美貌を併せ持ち、炊事洗濯なんでもござれの完璧美人。パーフェクトウーマン

しかしただ一点。

彼女自体がとてつもない天然といふことだけが形無の悩みの種になつてゐる。

更識家の全家事を一任しており、樋無の部下からは『姉さん』と呼ばれている。

織村一華

形無と同じく、神様たちのお戯れである双六の出マス『人間を一人転生させる』が理由でE.Sの世界に転生させられた（一華を転生させたのは形無を転生させた神様とは別人）。

通称、残念君。

転生という二次小説にありがちな展開が実際に起こつたことにより自分を主人公だと思っている。故にどこぞの主人公が所持しているフラグ体質やチート性能など備わつていると信じて疑わず、これまで生きてきた。

転生、というのはやはりフラグなのか容姿はそれほど悪くはない。本当の一夏くらいの長さの茶髪をワックスで立たせている。だがその容姿をもつしても、残念な性格を補えてはいないようだ。

幼稚園入園時に千冬、束と同じクラスになつたことでフラグが建つと考えていたが、形無の存在によりその妄想は呆気なく破壊された。

以来形無をなにかと敵視するようになり、事ある「」とて黒野郎と罵つてゐる。

小学校を卒業後、千冬たちを追つて同じ中学校に入学する「」。
転生する時に神様から『未元物質』^{ダーダマタマタ}の能力を授かるが、どうにもまだ使えないようだ。

五反田食堂の近くに家があり、親父さんとは顔見知り。弾とも馴染みである。

おまけ

「お兄ちゃん」

「ん？ どした簪」

自分の部屋で自由な時間を過ごしていると、ノックもせずに簪がトコトコと部屋に入ってきた。これが親父なら締め出すところだが、簪なら話は別だ。むしろ歓迎する。

明日から簪は幼稚園児だ。よほど楽しみなのか既に制服を着て黄色い帽子をかぶつてゐる。

うん。可愛い。

「……似合つ?」

その場でクルツと一回転しておずおずと訪ねてくる簪。思わず抱きしめたくなる衝動に駆られたがなんとか我慢して俺は満面の笑みで答える。

「よく似合つてるよ

「へへ……そつかあ……」

よほど嬉しかったのか満面の笑顔でそう言つ簪。やばい、俺の『抱きしめたくなる症候群』が再発してきた。いかんいかん。

「兄さ……」

俺が必死で自分を鎮めていると、今度は姫無が部屋に入ってきた。例の如く、ノックをせずに。

なんなんだ一体。この子らは俺の部屋に入り慣れてるのか。そんな感じのはいり方だぞ。

「おう姫無。どした?」

「……兄さんに教えてもらいたい所があつて(簪も来てたのね)」

「お、いこや。ビレだ?」

「INのルートの計算なんだけど」

.....。

あれ、おかしいな。姫無はまだ明日小学校に行くよつくなるんだ
けどな。なんでもう数学勉強してんだ？

まあ俺は教えることはできるが普通の中学生には無理だぞ。

とうわけで俺はこの部屋で姫無に数学を教えることに。

「.....む

そんな光景を見て面白くないのか簪はその小さな頬を膨らませて
いる。

(お姉ちゃん).....お兄ちゃん、取られた.....)

始めは些細な嫉妬から。

それがやがて、とある感情へと変わっていくなんて、このときは
まだ思いもしない二人。

更識形無。14歳。
更識姫無。6歳。
更識 簪。5歳。

更識家は今日も平和だ。

キャラ設定&おまけ（後書き）

次回はもう中2の主人公と体育祭です。（あくまで予定です）

#1-1 学校行事はその時点でフラグ（前書き）

お気に入り1200件突破ありがとうございますー！

皆様に頂いたアンケートの結果、姫無簪の妹コースと余計なヒロインは増やさないという方向にすることにしました。
人気の高かつたクラリッサ、ナターシャは出しますがフラグは建たない……予定です。

#1-1 学校行事はその時点でのリラク

「……ん、」

瞼をゆっくりと持ち上げて、自分が目覚めたということを知覚する。ベッドの上でまだ余韻にひたりたいところだが、それをすると一度寝てしまいそうなので睡魔を捩じ伏せて身体を起こす。

「ふあ～あ……」

ぐいっと腕を持ち上げ、背筋を伸ばす。凝り固まった筋肉がほぐれていく感覚が何とも心地よい。

「朝か……」

更識形無。

十四歳になりました。

……いや、分かつてる。言いたいことは分かつてるよ。なんでいきなり小一から中一までとんでもんだよサボつてんじゃねえってことだろ？

……大して原作に絡むようなことが無かつたんだよ。

普通に千冬、束と学校でつるんで家じや更識流と超能力が使えるようになるための修行。あとは愛すべき妹たちとの触れ合い。そんな毎日を過ごしてたらいつの間にか中一になつてた。

1Jの六年で俺は身長も伸び、体格も「ヨシくはないがそれなりの筋

肉がついて男らしくなった。

更識流の修行も大分進み、今じゃ親父ともいい勝負が出来るくらいには成長している。まあ、まだ勝つたことは一度もないけど。

「……ん、」

布団から出よひと身体を動かした瞬間、何かが俺の腰辺りに触れた。

……。

嫌な予感がしてならない。ようやく覚醒してきた意識を自らの布団に向けると、明らかに自分以上の体積のふくらみがある。

「……」

ガバッ、ヒ。

俺は無言で自分の布団をひつペがした。

「……すう、」

視線の先には、丸まつたまま気持ち良さそうな寝息を立てて眠る
我が妹。

更識姫無、六歳である。

「またかよ……」

「……」最近、とこつかまば毎日。形無の布団にのりして姫無は潜り込んでくる。

というのも、姫無が幼稚園半ばまでは形無と一緒に寝ていたといふことが関係している。小学校に上がる前に姫無には自室が与えられ、身の回りのことは自分でするよつと言っていたのだが、なぜ自室で一人寝るのは慣れないらしく、結果こうなっているところわけだ。

まあ、何だ。

慕つてくれているとこのは兄として非常に喜ばしいことなんだが、寝るくらい一人で出来ないと心配になる。小学一年だし、これから直していくことは思つが。

「ほり姫無、起きりー朝だぞー」

「…………」

「…………」

はつ……

いかんいかん。寝顔が余りにも可愛いんで思わず食い入るよつと見つめてしまった。ここは兄としてしつかり妹に自分の部屋で寝るよつて言わねば。

……少し寂しそうな氣もするけど。

「姫無。ひーめーなーしー」

「んん……、あ、兄さんおはよう

まだ眠いのか眼をこすりながらゆっくり起き上かる姫無。

ぐせつ！！

いかん、なんだこの可愛い生き物。抱き締めたくなつてしまひじや
ないか。

「……つたく。自分の部屋で寝てくれっていつも言つてるだらう?」

必死に平静を裝つてそう言つ俺に、姫無は笑つて

「兄さんと一緒に寝られないんだもん」

「そんなんだと将来困るぞ？」

「 いしもん、元さんか一緒に居てくれるから」

決定事項ですか

このやり取り、最早毎日の恒例になってしまっている。

はあ
取り敢えず居間は行くぞ
母さんか朝食作って待ってる」

一
う
ん
こ

そう返事をした姫無はベッドを降り、俺の隣を歩いて居間へと向かう。これもまた、習慣化しつつあつたりするのだ。

居間へと足を踏み入れる。

「おはよっ
「ねむる

「おひ形無。姫無。なんだお前らまた一緒に寝てたのか

「あらあら。姫無は本当にお兄ちゃんが好きなのねえ

「うるー」

「……（本物は困つてると好きと言われて悪い気はしないので何も
言えなこ）」

「お姉ちゃん…… めた……」

既に食卓についていた簪が頬を膨らませてひきを見ている。
……なんだ、その俺が悪いみたいな田は。

「ふふんっ」

姫無は姫無で血腫で壁の隣に座っている。

「お姉ちゃんばっかり…… ずるこ……」

「悔しかつたら簪も兄さんの部屋で寝ればいいじゃない

「……まだ、無理だもん……」

簪はいつも下を向いてしまつた。何故無理なのかといつと、
それは我が父親に原因がある。

俺の目の前で味噌汁を啜るこの親父は、周知の通り病気レベルの

親バカだ。それはもう、夜子供と一緒に寝ないと不眠症になるくらい。

故にこれまで親父と母さん、姫無に簪の四人が一部屋に集まつて床についていたんだが、つい最近姫無が自立（とは言つてもあの有り様だが）し、三人で寝るよつになつたのだ。

そんな状態で簪までもが一人部屋に移つてしまつたらきっと親父は寂しさで死ぬ。ウサギみたいに。いや全く可愛くはないけどな。そんなわけで簪はそつちの部屋を抜け出せないのだ。いや簪まで来られたら俺の寝るスペースなくなるから。……イヤではないけど。

「ほりー一人とも早く食べろよ

「「はーい」」

言われて姫無たちは箸を取り食事を始めた。俺も黙々と食事を続ける。食事の最中は誰も喋らないし、テレビも消してある。更識家の家訓の一つだが、食事中は静かに、というものがある。

命に感謝し、口に運ぶことに話し声は無用というのが理由らしい。喋つていいのは『いただきます』と『しゃべり止』だけだ。

「「うとうとうわあ」」

俺は箸を置き、手を合わせる。食器を下げて居間を出た俺は浴室へと戻つた。

現在時刻は午前七時四十分過ぎ。丁度いい頃合いだらう。

部屋へと戻つた俺はクローゼットから学生服を引っ張り出して袖を通す。真っ黒な学ランは流石に五月半ばのこの時期になると少々

暑くなつてくる。

「もう五月も半ばかあ

壁に掛けてあるカレンダーに視線を移しそう溢す。早いものだ、新しいクラスになつてからもう一ヶ月以上経つのだ。

一年生に進級し新しくなつたクラスにも慣れ、友達も大勢できた。これはとても喜ばしいことだ。充実した学校生活が送れているという実感もあるし、これと言つた不平不満もない。

……あるとすればむしろ『ピンポン…』……もうそんな時間か。

思いつきり和風な屋敷のこの更識家に鳴り響いたインターホンの音を聞き、俺は大して教科書も入つていない薄つぺらな学生鞄を手に取つて自室を後にしてた。

「親父、母さん行つてくる」

「おう形無。気をつけな

「行つてらつしゃー」

親父たちにやつて、俺は玄関を出て門をくぐつた。

「おはよう形無」

「おっすかーくんーー」

そこに居たのは中学校の学生服に身を包んだ美少女と言つても過

言ではない一人。

織斑千冬。
篠ノ之束。

『いつメン』と呼ばれるメンバーだ。

彼女たちも中学生だ。小学校の頃とは比べものにならないくらい成長している。特にあの双丘。千冬も束も立派に成長中のようだ。特に束。あれはもう中学生といつレベルを完全に逸脱している。凶器だ。

「おはよっ」

まあ、そんなことは決して口には出さないけどな。

彼女たちとは幼稚園からの知り合いだからかれこれ十年近くの付き合いになる。早いものだ。最初はなるべくフラグを建てないよう原作キャラとは関わらずひつそりと生きていこうと心に決めていたのに、それを一瞬にして破壊したのが何を隠そうこの一人だ。

幼小中と同じ学校に通う俺たち三人は中学でも有名になりつつある。

千冬は剣道部の二年生エースという肩書きとそのクールビューティさで同性からの支持が多く。

束については言つまでもないがその頭の良さで、中学では自他共に認める天才だ。

そして俺なんだが……正直有名な理由がイマイチ解らん。勉強は前世の記憶があるから並よりは出来るが束には遠く及ばないし、運動も更に修行しているからこれも並よりは出来るが千冬ほど

センスはない。

形無は周りにいる連中が凄すぎて若干ハードルが高くなっています。

それに見た目だってこの一人に比べたら見劣りしまくる。

「…………」

なんか千冬たちがジト目でいつも見てくるんだけど。向こは怖い。

「…………形無」

「はい？」

「お前今間違つたこと考えていいなかつたか？」

「いや、別に」

「…………まあいい。それよりも、形無はどれに出るか決めたのか？」

「はい？」

「…………まさか忘れていたわけじゃないだろ?」

「忘れる?」

「俺何か忘れてたか?」

「体育祭の競技のことだ。今日のH.Rで個人競技を決めるとき先生が

言つていただきわつへ。」

「あ」

「束さんも初耳だけだ」

「お前はパソコンずっと触つてたからだ」

体育祭。そう言えばそんなこと担任の先生が言つてたなあ。
因みに我がクラスの担任の教師の名前は中田加奈。なかた かなやまやの一番
煎じすぎる名前の持ち主だ。

「体育祭、かあ……」

いや別に体育祭は嫌いじゃないんだ。むしろ身体動かすの好きだ
し。むしろ授業潰してやつてくれるんだから願つたり叶つたりなん
だ。

……でもさ。

……ハハハ行事があると病気なオッサンが絶対来るんだよ。

「親父……来るなつて言つても絶対来るよなあ……」

親バカ日本代表、更識楯無。

あの親父が来ると碌なことにならない。

事実、去年の体育祭だってそうだったのだ。

子供と一緒に走りながらビデオカメラ回したり、最早騒音レベル
の応援したり。

最終的に変質者扱いされて職員室に連行されてたからね。母さんは完全に他人のフリしてたからね。

「お父さん……去年すごかつたな」

「……言つな」

千冬の同情がつらい。

「でも競技か。何に出るか全然考えてなかつたなあ」

「あ、じゃあさかーくんかーくん！ 束さんと一緒に一人三脚出ようよー！」

「却下」

「即答！？ 酷いよかーくんそれは横暴だ！！」

「束と二人三脚？」

「勝てる気がしない！！」

「あのな、束。去年の体育祭思い出してみる。お前プログラム一番のラジオ体操で日射病になつて保健室に運ばれたじゃねえか」

「う……」

束は外、もつと言えば太陽の下で動き回るのが致命的に苦手だ。故に体育の成績だけは他と比べて低い。

「う、今年は大丈夫だよー！」

「週末の最高気温三十度近くまで上がるらしいぞ」

「…………」

押し黙る束。どうやら無理だと悟つたみたいだ。

「な、なら形無。私とはどうだ?」

何やら鼻息荒くして聞いてくる千冬だが、コイツも大切なことを忘れている。

「確かに一人三脚のあとすぐに部活動対抗リレーだ。そっちに間に合わなくなる」

「う……」

しかし一人三脚か。

それが一番個人競技の中じやあ簡単そうかなあ。転ばなきやいいだけだし。

「ま、ペアは学校で探せばいいか」

そんな風に適当に考えつつ、俺たち三人は中学校へと通学路を歩いていった。

……まさかのペアに驚く」とになるのは、今から約八時間後のこ

とだ。

#1-1 学校行事はその時点でフラグ（後書き）

次回 新世紀カタナシゲリオン

アッシュ、襲来

#1-2 帰宅路でその運動神経はそのままつか（前書き）

体育祭が終わればそろそろ束が一月を完結させやうなので、やつ
と一月出せるかなあ……。

圧倒的に一月よりも妹たちのやつが出来事多ごだりつたど。

#1-2 帰宅部でその運動神経はその時点でフラグ

前回のあらすじ

体育祭って、完全に親父の暴走フラグやん。

そんなわけで現在六限のHR。俺は自分の教室の席に着き、教壇に立つて何やら力説を始めた体育祭実行委員の話を聞いていた。

「いいか！！ 我々赤組は今年こそ総合優勝を勝ち取る！！ その為には団体競技はもちろん、個人競技でも上位に入賞することが優勝のための必須条件だッ！！」

こんな風に如何にして優勝するかを熱く語っているのはクラスが新しくなって俺の初めて友達、相模さがみだ。サッカー部に所属している相模は当然のようにイケメンで、こういう人を纏める仕事は得意な人間だ。

こういう人の前に立つという点においては千冬も相模以上の素質があるんだが、彼女は現在部活動で行う体育祭の仕事の打ち合わせに招集されていてこの教室に姿は見られない。

本来なら部長を含めた三年生が招集されるんだが、どうやら千冬は一年生にしてその地位にいるようだ。

さて、相模の話に耳を傾けようか。俺は頬杖をついて、教壇のほうへと視線を移した。

「というわけで、俺たち体育祭実行委員のほうでどの個人種目に誰が出るかを決めさせてもらつた！！」

ざわつ、と教室全体がどよめいた。

無理もない。みんな仲の良い友達同士で参加しようとしていたのだ。それを向こうで勝手に決められたとあつては文句の一つも出でくるものだ。

「なんでだよー」

「私たちもう何に出来るか決めてたのに」

「」

「」

などなど様々な文句が発せられている。

まあ俺としても出来ることなら自分で出る競技を選びたかったが、あの親父が来る時点で俺の体育祭には暗雲しか立ち込めていない。どの競技に出ようが待っているのは羞恥のみだ。

だから別に俺としてはどれでもいいんだが。

「まずはポイントのでかい団対抗リレー。出るのは俺、更識、織斑に織村の四人だ」

なんだあれに出るのか。まあ走るだけならいいか。

「次に騎馬戦。これは男子全員参加な」

騎馬戦か。

まあ全員参加なら仕方ない。ケガしないように逃げ回れ。

「んで200m走。これは50m走のタイム上位二十人な」

俺のタイムは六秒前半。上位二十人どころか陸上部に混じってトップ三に入っている。

「んで二人三脚。これはもうペアをこっちで作ったから、この紙を見て出ることになってる奴は確認してくれ」

クラス全員に紙を配る相模。前の席の女子から回ってきたその紙には。

『更識形無・織村一華』

.....。

もしかしたら偶然かもしれないし、相模にも悪いかなあととか思つてここまで何も言わなかつたが、もう限界だ。

「相模」

俺は拳手して立ち上がる。

「ん？ どうした更識」

「ちょっと言いたい」とある

「なんだ」

「なんで俺全種目出ることになつてんだよッ！－お前ですら一人三脚はエントリーしてねえのに！－」

「お前の運動神經がいいからに決まってんだろ？が。帰宅部のくせになんだその『デタラメな運動能力』」

さらつと相模に返され、俺は言葉に詰まってしまった。

今相模が言つたが、俺は中学ではこれと言つた部活に所属していない。所謂帰宅部というやつだ。入学当初は千冬に熱心に剣道部に勧誘されたが、俺には更識柔術の修行もあるし、超能力を自分の中にするための訓練する時間も必要なのだ。部活に割ける時間は残念ながら無いに等しい。

「『デタラメとか言つな！』

「だからたまには学校にその運動能力で貢献しろってんだよ」

相模から折れることはなさそうだ。

結局、俺はこうこう押しといつか頼みみみたいなものには弱い。最近つづく思つが。

「……はあ、わかつたよ」

「よし。じゃあそんな感じで頼むわ」

相模が「う」言つて会を締め、「」の日は解散となつた。今日の授業はこれで終わりなので、机の横に掛けてあつた中身が入つていない学生鞄を抱ぎ、教室を後に

「あ、待つてよかーくん束さんを置いていかないでーー。」

しょりとした所で、天才（災？）科学者に捕まつた。

「いやあずつと熱心にウインドウ見てたから邪魔しちや悪いかなあと」

「うそだ。束さんの日は誤魔化せないよかーくん。絶対先に帰れつとしだでしょ」

「……、いや？」

「その間は絶対そつだつーー。」

いやだつてわつきの体育祭云々の話とかクラスでしてるときも全部無視してひたすら空間投影式のウインドウ開いてEISの開発してんだぞ。集中してるとこに声掛けるなんて野暮なことできるわけないじやないか。

因みに束のEIS開発だが、実際のところもうすぐ完成というところまで来ている。幾度となく質問や提案されてEISの設計に少なからず関わつてしまつたので分かることだが、下手したらこれ中学卒業までに完成してしまつかもしれない。

……原作つて高校生のときじやなかつたか？

「まあいいや。帰りうかーくん」

「おう」

？

何か今日はやけに上機嫌だな。何か良いことでもあったのか？

上機嫌で俺の腕に自分の腕を絡めてくる束を見てふと思ったが、聞くのもなんだか憚られたのでそれ以上は聞かず、そのまま俺たち二人は教室を後にした。

今、私はすぐ機嫌がいい。理由は簡単で、かーくんと二人っきりで帰れるからだ。

さつきかーくんにスルーされて帰られそうになつたときは本氣で泣きそうになつたけど、この後のことと思えば何てことはない。なんてつたつて今日はかーくんと二人“きり”で帰ることが出来るのだ。

いつもならかーくんとちーちゃんと三人で帰るんだけど、生憎今ちーちゃんは部活動の打ち合わせか何かで下校が遅れる。

これは思つてもみなかつたラッキーだ。

ちーちゃんには悪いけど、今日は束さんがかーくんを一人占めしちゃうね。

ぎゅっと絡めた腕の力を強めると、困った顔をしながらもかーくんは受け入れてくれる。それが私にはたまらなく嬉しいんだ。

「かーくん」

「ん?」

「束さん将来は女の子が欲しいなあ」

「ふはっ！？ いきなり何言い出すんだお前は……」

照れてるのか焦つてるのか、かーくんの顔は真っ赤だ。

でも気付いてる？

何気無く言つてみた私の顔だつて、かーくんに負けないくらいに真つ赤なんだよ。

憎い。

今の俺の心境を率直に述べるとこの一言に尽きる。

先程終わった体育祭の種目決め。俺は運動神経がいいから当然の
ごとく全種目出場だ。ま、俺がいれば総合優勝なんざ楽勝だよ。

だが。

同じクラスにいる馬野郎と二人三脚だけは願い下げだ！！

何で俺があんな帰宅部の陰キャラと一緒に走りにやなんらんのだ！！

しかもあんな奴のどこがいいのか、俺の嫁は馬野郎と腕を組んで
一人で帰りやがった！！

憎い！！

これが妻を寝取られた夫の心境つてやつなのか！！

……見てろよ。

俺がお前よりも優れてるつてことを、体育祭で思い知らせてやる。

嫉妬の炎を燃やし、俺は体育祭での活躍を誓った。

「じゃあバイバイかーくんーーー。」

「おう、また明日な」

束と別れた俺は家の門をぐぐり、玄関の戸を開く。

「ただいまー」

「あー。お帰り形無」

「ただいま母さん」

「今日も部屋で修行するの?」

「うん。集中したいから今日も誰も部屋に入れないよって頼むよ」

「分かったわ」

そんな会話の後、俺は自室へと向かいその戸を開く。学生鞄を適当に放り投げ、学生服を脱いで部屋着に着替えて母さんの『ひつ』修行の準備を始める。

この修行だが、言つてしまえば超能力を制御できるようになるための訓練だ。

小学校の六年間、全くと言つていいほど使えなかつた超能力。一

時期はほんとに才能ないんじゃねえかと挫折しそうになつたが、中学生に上がると同時に『一方通行』^{アクセラレータ}の『ベクトル操作』を行うための演算を脳が出来るよつになつたのだ。やはり脳の容量が足りなかつたみたいだ。

いやや。

自分であのオッサンにこの能力くれつてお願いしどこで言つのもなんだけど本当に『これなんてチート』状態だよ。

だつてデフォで反射に設定しあればほぼ殺されることはないんだぞ。この安心感は半端ない。一方通行が能力に依存しちまうのも無理ないな。

流石に常に能力を展開しておくれのはまだ厳しいので必要時のみだが、いやはや使えるようになつて良かつたよほんと。
これまで諦めずにやつてきたことが報われた。

このままでIIS完成してしまつたら万が一IISとの戦闘になつた時俺の前には死の一択しかなかつたろうし。

「さて、」

俺は脳に意識を向け、演算を開始する。
今日は何のベクトルを操作してみようか。

やっぱ男つてこいつのに憧れるよな。
マンガの主人公みたいだし。

そんなことを考えつつ、俺は意識を集中させていく。

『ベクトル操作』を完璧に使いこなせるようになる日も遠くはなさ

そうだ。

そして週末。

いよいよ、それぞれの欲望渦巻く体育祭開幕である。

#12 帰宅部でその運動神経はその時点でフラグ（後書き）

次回。

新世紀力タナシゲリオン

瞬間、心重ねられず

#1-3 騒々しいのせんの壁紙でハック（前書き）

体育祭開幕です。

#1-3 騒々しいのはその時点でフлага

前回のあらすじ
結局、俺は頼まれたら断れない。

体育祭当日。

どうせなら大雨でも降つて延期、もしくは中止になつてほしかつたが、そんな俺の切実な願いなど知るかとばかり上空には澄んだ青空が広がっていた。

天気、快晴。
体育祭、決行。

親父、始動。

いやいや。

親父、始動とか言つてゐるけど俺としてはホントに笑い事じゃないんだよ。まじで体育祭がカオスになる未来しか見えてこない。

「母さん！－！ [写真撮るなら最新の"デジカメか、昔ながらの一一眼レフかどっちがいいかな－？]

「あらあら。いいんじゃなこですか？……びつびつも」

「びつでも－？ 母さんは酷いカウンターだぞ－－」

「櫛無さんはずしゃあああです。子供よりもワクワクしてゐるじゃないですか」

「当たり前じゃないか！－ なんてつたつて年に一度の行事なんだぞ－－」

「ビリヤフクワクしゃああ前田一睡も出来ない親がいるんですか」

母さんが呆れたように親父に叫ぶ。母さんの叫ぶとおつ親父は一睡も出来なかつたのか畳の下に隠を作つてゐる。なのにこのハイテンションつぶりは一体何なんだ。睡眠をとらなかつたくらこじや今の親父は止められないことなのか……－

「ん、おお形無早こな！ わたしはワクワクし過ぎて寝れなかつたんだなあ？」

「アンタみてえなのと一緒にすんな

「酷い－－ 親に対してものの言い草、母さんどう思つて－？」

「自業自得です」

「母さんまで……」

……取り敢えず朝っぱらからカオス全開のこの親父が鬱陶しくて仕方がない。なんだここのテンション。遠足前日の小学生でもこんなワクワクしてないぞ。

「……はあ、取り敢えず落ち着けよ親父」

「体育祭だぞ、これが落ち着いていられ……」

「母さん」

「うん取り敢えず落ち着こい」

ガクガク震えながら即座に食卓につく親父。やはり今でも母さんがこの更識家で最強の座についている。そのオハナシはこれまで何度も親父の心をへし折つてきたかわからない。

先程までのハイテンションぶりが嘘のよつに大人しくなった親父はそのまま手を合わせ、食事を始めた。

さて。

「なあ姫無。いい加減俺の腕から離れてくれないか」

「いや

居間に入ってきたときから実はずっと腕にくついていた姫無に離れるよう進言するが即座に拒否されてしまった。

毎度の如く俺の布団に潜り込んでいた姫無をじうにか起こしてここまで来たはいいが腕にくついたまま離れる気配が微塵も感じられない。

いや嬉しいは嬉しいんだけどこれじゃ飯が食えない。今日は体育祭だからいつもより早く学校行かないといけないし、余り時間もないんだけど。

当然のようじくついて離れない姫無に母さんたちも何も言わないし、困ったなあと俺が思つていると。

ひしき

「…………」

空いていた腕のほうへ、もう一人の我が妹がしがみついてきた。

「…………簪？ 何をしてるんだ？」

「…………お姉ちゃんばっかり、ずるこ…………」

「いやずることかじやなくてな、飯が食べられないんだ」

「…………食べさせて……あげる…………」

顔を赤くしてやつぱり簪。うん、それは俺としてはとても嬉しい

提案なんだけどな。両腕でじがみつこつこむのじやひやせつて俺に食べさせりつていいんだ。

「む。何言つてゐる簪。それは私の役目よ

「……お姉ちやんばつかり……私だつて……」

俺を挟んで姉妹で口喧嘩みたいなのを初めてしまつた。頼む。誰か助けてくれ。

「姫無、簪。お兄ちやんが困つてゐるじよつへ。

「だつてお母せん、簪が……」

「お姉ちやんが……」

「そんなことしてると嫌われちゃうわよ?」

シユバツー!

一瞬にして俺の両隣から妹たちが居なくなり、黙々と食事を開始していた。なんつー速さだ。そして母さんグッジョブ。

「いただきまや」

そして俺もよつやく食事にありつべ。やつぱ日本人は白米と味噌汁だよなあ。何かこつ安心する味だ。

「……おつと」

「うわしありやいられない。何せ今日は登校してから割り当たられた

教室で体操服に着替えなければならないのだ。故にいつもよりも十五分は早く家を出なければならない。起床時間がいつもと変わらない俺は、必然的に朝食の時間を削るしかないのだ。

俺は急いで食事を喉に通し、『おはよう』と告げて居間を後にす。部屋に戻つて制服に着替え鞄を手に取り家を出た。

「おはようかーくん」

「おはよう。今日も千冬はいないんだな」

「うそ。なんか剣道部とかの運動系部活は朝から機材とかの運び出しありでやれてるみたい。ちーちゃんまで行くことなかつたのに」

つまらなさすぎて隣を歩き出す束。昨日あんな爆弾発言をしてくれやがつたわりには全くもつて普通だ。まあ俺も冗談だとは分かってるから気にはしないが。

「あ、なあ束。今日のプログラムとか持つて……」

「ないよ」

「だよなー。」

言いで出でから気付いたけど完全に聞く相手間違えた。こいつがプログラムなんか持つてゐるわけない。なんせ去年は一日中保健室で過ごした奴だからな。ただでさえ出ないと言つて張つていた束を俺と千冬で説得し参加させたらあのザマだ。

「あ、でもかーくんの活躍はちゃんと見届けてあげるからね」

「あ、でもかーくんの活躍はちゃんと見届けてあげるからね」

嬉々として言つ束だが、『あ、』と思いついたかのよつてみるみるその表情を曇らせていく。

「でも一人三脚のペアがあいつなんて……」

眉間に皺を寄せながら本氣でイヤそうに言つ束。名前を言つのもイヤなのかアイツ呼ばわりだ。まあ、他人に興味を抱かない束にアイツとして覚えられているといつ頃においてはそれなりに興味の沸く人間なんだろうが。

「ああ織村か。アイツ何かと俺につつかかつてくるんだよなあ」

「ほんと鬱陶しーよアイツ。私にベタベタ触つてくるし、吐き氣する」

束にとってアイツ、織村一華は汚物か何かと同レベルの存在みたいだ。

確かに『織村一華』なんてちょっと出来すぎた名前だよなあ。千冬が弟と読みが同じだつて言つて本氣で嫌がつてたつけ。

……まさか俺みたいな転生者とかじゃないよな？

あるわけないか。まだ原作前だし原作まで生き残れなかつたモブキャラなんだろ？。

そんな残念なモブキャラである織村だが、実は幼稚園のころからずっと一緒だつたらしい（俺は記憶に全く残つていなかつたが千冬たちが覚えていた）。

初めて話をしたのは俺が中学に上がつてからだ。その時は『俺は

お前と違つて選ばれた人間なんだ。嫁は誰にも渡さん！！』とかなんとか言つていたが、何のことだか俺にはさっぱりわからん。

……と。

そんなことを考えていたら、一つの間にか学校の正門前までたどり着いていた。

グラウンドのほうを見てみれば幾つものテントがトラックを囲み、その上には世界各国の国旗が張り巡らされている。

「じゃあ、男子は更衣室で着替えだからまたあとでな

「え？ 束さんももうひんついて……」

束が言つて切るよりも早く、俺は彼女の頭に拳骨を降り下ろした。

「いたあ！！ かーくんそれは暴力だよー。」

「馬鹿者これは愛のムチだ」

「あ、ああ愛のー？」

ん？

何故そこで反応するんだ。取り敢えず気持ち悪いから頬に手を当ててくれくなすんのやめろ。

「形無ー。」

束がくねくねしていると前方から俺の名前を呼ぶ聞きなれた声が響く。

走つてじつに向かつてくる体操服姿の少女の名は。

「おー千冬」

「おはよう形無。……といひでの馬鹿はどうしたんだ？」

「あー、気にするな。病氣みたいなもんだ」

「？ そうか。所で、今日は頼むぞ形無。赤組が優勝出来るかどうかはお前の活躍次第なんだからな」

「そんな大袈裟な……」

「大袈裟なものか。形無が一番の主力なんだ。先ずは騎馬戦からだが頑張つてくれ」

それだけ言って千冬は本部のほうへと走り去つていった。
やれやれ、やつぱ剣道部だけあって千冬も生糸の体育会系だよな
あ。あんなやる気満々なの久しぶりに見たぞ。

「さて、」

俺は未だくねくねしていいる束を放置して、指定された更衣室へと向かつた。

『これをもちまして開会式を終わります。第一種目、男子による騎馬戦に出場される選手のかたは、至急入場ゲートにお集まり下さい』

開会式の司会を務めていた三年生の女子のアナウンスにより、現在俺は入場ゲート裏で競技の開始を待っている。

この騎馬戦はどこの学校でもやるような至つて普通のものだが、ただ一つ違うのは奪うのが頭に被つた帽子ではなく、タモさん風のサングラスだということだ。

どうやら帽子だとゴムを使つたり手で押さえたりといった反則行為も多く、また時間もかかるため時間短縮の狙いもあってこのサングラスを奪い合つというふうに決定が下されたようなのだが……。

なんでサングラス！？

もうほんとこの学校バカなんじやないかと思う。だいたい考えてもみる。三人に担がれている上半身裸の男子がサングラス装備つて、しかもそれが東西で何十人と腕組んで睨み合つてて、シユールすぎるだろうが。

なんか残念なアンダー　ン君みたいじゃねえかよ。

「……なあ相模」

「うん？」

現在俺を担いでいるうちの一一番前に位置する相模に俺は話し掛ける。

「「」のサングラス……取つていいか？」

「だめだ」

「だつて明らかにおかしいだろ？が！！　その上視界最悪だし！！！委員会もちつとましなもんチヨイスシリよッ！！！」

「そんなこと言つなよ。……似合つてゐぞ（フフッ）

「よしお前あとで殺すからな」

必死に笑いを堪えている相模に死刑を宣告して、俺は審判に指示され入場ゲートをぐぐって所定の位置につく。

あ、因みに赤組と白組、どっちがどっちかを判断する基準は騎馬を作っている男子の先頭が被っている帽子の色だ。

そこは帽子被るんかいッ！！

「はあ……、なんかもう帰りたくないなってきたよ」

「な」と囁ひなよ更識。堂々としていやいいんだよ。ほら、あいつ
みたい」「元

「ああ？」

溜め息をつく俺に相模は顎でとある人物のほうを指し示す。
そこに居たのは。

なんか誇らしげにサングラスかけて胸を張りながら腕を組むクラ
スメイト、織村一華の姿。

「……なんであこつはあんなにも誇らしげなんだ

「サングラス似合つてると思つてんじゃねえの？」

「あれで髪オールバックにしたら元壁タ リだぞ」

「確かに……つと。そろそろ始まるっぽいぜ更識

言われて正面に向き直ると、審判であるひつ女子が空砲のピストル
を今正に頭上に持ち上げようとしていた。

それを確認した男子たちの表情が引き締まる。鬪い前の血がスー
ツと引いていくような感覚を覚えながら、俺は空砲が鳴ると同時
に。

「形無いッ！ やつちまえええええッ！」

親父の喧しあざる応援にて、思わず落つこちやつになつた。

「……あんのクソ親父……」

「更識…… 来るが……」

今すぐにも親父に文句を言いに行きたいところだが、敵がそんな時間をくれる筈もなく、雪崩のようにこぢらに襲いかかってきた。

……だめだ緊迫した場面なんだらつけど皆が着けてるサングラスが全てを台無しにしている。

氣を取り直し、俺もその流れに乗つて白組たちが向かつてくる方へと走り出した。

狙うはサングラス。帽子よりは取りやすいだろうが如何せん視界がモノクロだ。下手に動いてサングラスを自ら落とす、なんて可能性もある以上下手に突つ込むのは愚策なんだが。

「つまおおおおおおッ……」

クラスメイトである織村一華は愚直なまでに真っ直ぐ白組の密集地帯へと突つ込んでいった。

あ、騎馬のスピードについてこれずに後ろの騎馬役やつてた相撲部のやつがコケた。それが影響して他の一人の騎馬もバランスを崩す。

大きく揺らぐ騎馬。
そして。

織村^{バカ}一華は顔面からグラウンドに激突した。

パリンッ、という何とも小気味のいいサングラスの割れる音が青空の下響き渡る。

「…………」

俺や相模だけでなく、観客含めた全員が言葉を失っている。
否、この場合何て言つたらいいのかわからない、というのが正しいのかも知れないが。

そんな状況の中、織村はゆっくりと立ち上がり、鼻を擦りながら

一言。

「…………、この俺のスピードに常人では付いてこれないか

「…………」

会場、絶句。

ひつして波乱の体育祭は幕を開けた。

#1-3 騒々しいのはその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀力タナシゲリオン

晴れ、逃げ出したい

#1-4 振動不審はその時点でフラグ（前書き）

昨日更新出来ず申し訳ありません；
プライベートが忙しくなつてきてこれから毎日更新、というのは
難しくなるかも…
なるべく早く更新できるように努力しますが。

そしてお気に入り登録1500件突破ありがとうー！

#14 挑動不審はその時点でフリケ

前回のあいすじ

体育祭が力オスの予感しかしない。

そんなこんなで始まってしまった体育祭。俺が出場する最初の競技でもある全学年男子参加の『騎馬戦』で、同じクラスである織村一華が自滅した。なんとも言えない雰囲気がグラウンドを支配しているが、そんなことは気にせず再びサングラスをかけた闘いが始また。

「形無右から来てるぞーーー！」

「了解ー！」

騎馬の先頭を務める相模の報告で俺は右前方から鼻息荒くしてやつてくるデカイ白組へと視線を向ける。

いや、まじでデカイな。

三年生か？ 下の騎馬今にも潰れそうになつてんだけど大丈夫か？

「グラサン寄越せやガキい……」

オイオイ俺の」とガキ呼ばわりですか。

「寄越すわけないでしょつ……が……」

俺は突き出された腕をいなし、逆に相手のサングラスへと腕を突き出す。

「うおー?」

まさかカウンターを食らうと思つていなかつたのかバランスを崩す三年生。それを俺が見逃す筈もなく。

「よいしょつと」

すかさずサングラスを奪い取つた。サングラスしてたら太つたエグイルのアシミたいだつたけどサングラス取つたらクロちゃんじやねえか。

「さすが更識。この調子で次行くぞ」

相模がそんなことを言つてはいるが、正直俺はあまり目立ちたくない。

何故かと言つとだ。

「おお形無ー! 見事な切り返しだあー! そのまま全滅させてしまえツー!」

……あのクソ親父が五月蠅くなるからだ。

頼むから身を乗り出して手をこしきに振らないでくれ。
と思われたくない。

「……はあ、」

既に暴走気味の親父に溜め息をもらしつつ、俺は次の騎馬からサングラスを奪うべく進んでいった。

結果から言えば、俺たち赤組は白組に勝利した。この騎馬戦は時間制限がないため相手の大将となる騎馬を倒した方が勝ちになるんだが（大将はサングラスの淵が金色）それを赤組が先に討ち取つたのだ。

俺は別段活躍する、というわけでもなく向かってくる相手を迎撃していたから余り目立つていない……だがあの親父のせいで全て台無しだ。周りからの視線が痛い。

ほんと、帰りたくなつてきた。

「お疲れ形無し」

「おひ千冬。サンキュー」

退場ゲートをぐぐると千冬がタオルを渡してくれた。今日は田中三十度近くまでになるつて言つてたが、既に暑い。俺の額にも大粒の汗が浮かんでいる。

「流石だな。最後まで脱落せずに相手の騎馬を十一も倒すなんて」

「数えてたのかよ。……それはいいんだがアレがなあ……」

「……やはり凄かつたな、楯無さん」

「もう勘弁してくれ……」

親父をじつじつ行事に連れてきたらダメだとじつじつを再認識する。次からは来ないようにならうか？

……ダメだなあ。親父のことだ何があつても来るだひつ。

あの親父は子供のためなら平氣で国の重要案件をすっぽかすような親バカだ。それこそ母さんが止めてもきつと止まらない。

結局、じつじつ結果になるつてわけかよ。

「あ、そろそろ私も行かなくては

「次は千冬が出るのか？」

「ああ。借り物競争だからな」

『またな』と言つて入場ゲートのまづくと走り去つていく千冬を見送つて、俺は指定されているクラスの待機場所へと歩いていく。

する。

「おー」

すたすたすた。

「おいつてば」

すたすたすた。

「待てよおー」

すたすたすた。

「待てつゝてんだらうが馬野郎ッ……」

……、馬野郎？

何だよその呼び名は。

よつやく足を止めた俺に満足したのか叫んだ少年、最早言つまでもないだらうが織村一華は得意げにこうひこに向かってきた。

「セツアモラシキーだったな

「……は？」

ラッキー？ 一体何の話をしているんだコイツは。などと考えてみると、更に織村の口から言葉が吐き出される。

「俺がアイツらの氣を引いたおかげで幾つかサングラス取れただろ

アイツらって、ああ。

白組のことを言つてんのか。いやいやアレは完全にお前のミスだ
アレのお陰でサングラスを奪えたなんて俺だけじゃなくさつと口
イツを除く赤組の全員が思つてると思つんだが。

「そんなMVP並に活躍した俺に何か言つことはないのか？」

……？

俺は織村の意味の分からぬ発言に思考がストップしそうになる。
言つことって『鼻痛くないか？』とかでいいのか？ アレは絶対に
痛いだろ！からな。

「…………」

「何があるだろ！？」

訳が分からず黙りこくれている俺にイライラしてきているのか足
の爪先を執拗に地面上にトントンと叩きながら織村が言つが。

「……悪い。何のことを言つてんのか俺にまざりわからんねえ

しうがないだろ。

分からぬものを言つて言われても言えるわけがない。
と、そんな俺の態度が気に食わなかつたらしい織村が再度噴火。
そして。

「千冬と束から手を引くつて言えよ……」

今度こそ、俺の思考が停止した。

「この際だから言わせてもらうが、いい加減に嫁達を解放してやれ……自由にさせてやれよ……」

「…………、」

アレなのか。

俺の周りにはまともな人間というのが一人としていないのか。

第一、俺は千冬や束に手を出した憶えなんてこれっぽっちもないし、ましてや縛り付けている事実などどこにも存在しない。

であるにも関わらずこんな根も葉も無いことを真剣に訴えてくる田の前の少年。

結論。

コイツはアブナイ人。

じついう人種とは関わらないのが一番、そう思い至つた俺は踵を返して再び待機場所へと向かつて歩き出す。

「あ、待てよ！！　自分の立場が悪くなつたからつて逃げんじゃねえ！！」

逃げてないし立場を悪くした憶えもない。

背後でざきやーざきやーと喚く織村を無視して、俺は待機場所へと戻つていった。

騎馬戦を終えた俺は、現在進行形で行われている借り物競争を各クラスに宛がわれたテントの下で相模と一人で観戦していた。

この借り物競争のルールはどここの学校でもやつていてるよつた普通の借り物競争と同じだ。

ただし。

借りてくるものがとんでもなくハードルが高いことで有名だ。

……ほんとにまともな競技が最初の準備体操くらいしかないのかこの学校は。

去年の例で言えばブルドッグ、ポケベル、自分と身長がミリ単位で同じ人などなど。中にはスキー板などそれ絶対学校にねえだろという物まで出題されていた。

「お、次に走るの織斑じやないか？」

「ん、ほんとだ」

スタート位置についていた千冬を相模が発見する。スタートの合図である空砲が響き、千冬を含めた六人が一斉に走り出す。やはりと言つべきか千冬がダントツに速い。他の五人みると、うちに差をつけていく。そいつらの男子なんかよつよつほど速い。

そつとして一番に紙を取つた千冬は

「……？」

何だかいきなり顔が赤くなつた。

一体何を出題されたんだと俺が思つていると。

「……え？」

何故か一目散に千冬がこつちに走つてきた。こつちに借り物があるってことなんだろう。俺は後ろを振り返つて近くに何があるのかを確認してみる。

しかし、背後はフェンスしかなくこれといった借り物のお題に出されそうな代物は見受けられない。

何がお題なんだ。

なんて安易に俺が思つていると。

ガシツ

「……え、」

「い、いくぞ」

千冬が俺の腕を掴んで強引に立たせる。

……今年の借り物競争つて個人名まで書かれてんのか？ それとも俺に関係するお題なのか？

尚も腕を引かれたまま走る俺は千冬とともにそのまま一着でゴール。親父が何か喚いてたけどどうせ碌でもないことだらうかスルーしておいた。

一着の旗を貰つて前方を歩く千冬。なんだかまだ顔が赤いようだが、一体何が書いてあつたんだろうか。つうむ、氣になる。

「なあ」

「ひゃいっー？」

軽く肩を叩くとビクッと上ずつた声を上げた。

「な、なな何だ形無ー!?

「その紙に何が書いてあつたんだ?」

右手に持つていた紙を見ようと俺がそれに手を伸ばすと。

サツ

「……、

避けられた。

スツ

サツ

「……なあ

「何でもない! 大したものではなかつたんだー!ー!」

いやいや、その拳動不審つぶりじやあ説得力〇だぞ千冬。

「そ、それよりももうすぐ徒競走じゃないかー!?

「いやそれまだ時間あるから

「アップは必要だーー タアタア、もつ行つたほうがいいぞーー？」

ダメだ。

じつなつたらトコでも千冬は動かないし譲らない。

「……はあ

小さく溜め息を吐いて俺は内容を諦めた。だつて今の千冬顔赤くして瞳潤んでんだもん。なんかこれ以上踏み込んだらヤバい気がしたんだ。

しうがないので、そのまま俺はクラスの待機場所へと戻ることにした。

しかし、一体何があの紙には何が書いてあつたんだ?
気になるなあ。

「ふう、」

形無が去つていったことを確認して、私は安堵の息を漏らした。

キツく握り締められた右手の中にあつた紙に視線を落とし、ゆつくつと折り畳まれたそれを開き。

そこに書かれていたのは。

『想い人』

カアツ、と顔が熱を帯びていくのを感じる。
こんなもの形無に見せられるわけがない。

見られたら最後、私は恥ずかしさで死ぬかもしれない。
少なくとも、今はまだ。

「全く、罪作りな男だ……」

ボ ツリと千冬の口から漏れたそれは、誰に聞かれる事もなく青空の中へと消えていった。

#14 挙動不審はその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀力タナシゲリオン

せめて、無事に終わって

#1-5 井野タイマの「一ノ瀬やの壁紙やハリカ」(墨書き)

やつと一夏、幕が登場。
一畠も疊りませんがわわ

#1-5 弁当タイムのあーんはその時点でフリゲ

前回のあいすじ

体育祭は荒れに荒れる

「ふう、」

徒競走を終えた俺は再びテントの中へと戻ってきていた。結果は一位。いやあやつは親父との修行で体力ついてんのかね、余裕だつた。

一位のバッジを胸につけて帰還すると既に走り終わっていた相模がスポーツドリンクを放り投げてきた。相模の胸にも一位のバッジが付けられている。流石サッカー部だな。

「お疲れさん」

「おう。流石だな相模」

「当たり前だろ。サッカー部がそこの奴に負けられるかよ

いや俺の隣走ってたのサッカー部だったけど。思いつきり帰宅部に負けてたけど。

あ、だから何か絶望した表情で一位のバッジ貰つたのか。
確かに帰宅部にサッカー部に負けたら立つ背が無いよな。

「お前に負けた中田めちゃくちゃ落ち込んでたぞ」

「いやそれを俺に言われても」

「まあ更識は帰宅部にカウントしちゃいけないよな。運動部にカウントしてもそのチートな運動神経なら間違いない上位だろ」

「買い被りすぎたつて」

「『ビ』の世界に一〇〇メートルを十秒フラッシュで走る帰宅部が居るんだよ」

え、此処にいますけど。

……やめろそんな『人外』のものを見るよつた眼で『うちを見るんじやない！』

俺の場合は帰宅部って言つても家で更識流の柔術やつてるし、一方通行のベクトル操作もあるからスペック的には完全に人外なんだろうが、そんなこと俺は決して認めないぞ。

「お、次走るのアイツじやねえか」

手で日差しを作りグラウンドのほうを見る相模が言つので、俺もそちらに視線を向けていると。

「……うわ、」

思わず口に出てしまつた俺は悪くない。

いやだつてさつき『俺の嫁たちから手を引け！！』的なことを堂々と言い放ちやがつた非常に残念でアブナイ性格の持ち主、織村一華なのだから。

「アイツも黙つてればイケメンなのに、口を開いたらホントに残念な奴だよなあ」

相模が苦笑ルックスしているがそんな生易しい性格してねえぞアイツは。良いのは多分容姿だけ。中身はなんだかよくわからん奴だ。難しい問題をスラスラ解いていたかと思えば基礎を全く知らなかつたり、運動もまた然り。

周りからも認められて『天才（災）』と称されている束とは違い、織村の場合は自称天才。はつきり言つて束とはレベルが違う。

以前俺と束がIS開発の設計図を一人で見ながら話をしていた時、アイツが我が物顔で話に割つて入つてきたことがあつた。俺は何かと思って話を聞いてみれば、どうやら織村も工学には強いのか設計図らしきものを見てペラペラと自慢気に束に向かつてここがどうだのこれはああだの話しだしたのだ。

あ、束はガン無視してたけどな。

それに気付いてか気付かずかは分からんが話し続けた織村は『まあ、つまる所』と一拍おいてから。

『束には俺の頭脳が必要なんだ』

……ええ～。

今の束のガン無視をどう都合のいいように解釈したらそんな事が言えるんだ。もし俺が束にガン無視されたら完全に心が折れ……た
りはないな。だって束だし。未だに俺の部屋に隠しカメラとか平
氣で仕掛ける奴だし。

でもこれが姫無や簪だつたら俺はもつ生きていけない。姫無たち
に無視されるとか、考えるだけで寒気がする。

話が逸れたが、まあつまり何が言いたいのかと言つてだ。

俺アイツの「」とはどうも好きになれん。
というか嫌いの部類に入るな。

小学校の頃まではこつまで露骨なナルシストじゃなかつたと思う
んだが（形無は中学まで織村の存在を気にも留めていないので覚え
ていなし）、こんな俺毛嫌いされてたのか？

俺何かしたか？

「はあ……」

「どうしたよ更識。じじいみたいな溜め息ついて

「午後からの一発目でアレと二人三脚しなきやいけない俺の身にも
なってくれ……」

「ああ……御愁傷様」

「……つーかこの組み合わせにしたのお前だろ相模」

「（ギクッ）……え？　いやその……待て待て待て……　何だその高々と掲げられた右拳は……」

「そういうや俺騎馬戦のときお前に死刑宣告出してなあと思つて」

「ストップストップ……　一回落ち着けりつ更識、早まるなまだ間に合つ……！」

「間に合わないから」

直後、テント内に鈍器で殴つたかのような鈍い打撃音が響いた。

さて、午前中の競技が全て終了したので現在俺たちはブルーシートの上で弁当タイムだ。

俺たち、というのは親父に母さん、姫無簪と千冬と東、それに一

夏と簾たちである。今日は土曜日だから小学校も幼稚園も休みだから、やっぱり賑やかなほうが楽しいし。

でも束、お前は今まで一体で何をしてたんだ?全く見当たらなかつたんだが。

「しつかし流石だな形無!父さんは鼻が高いわーーー。」

「俺は親父のせいでテンション低いんだが……、ゆでこわやんと親父を見張つてくれよ」

「あひあひ。じゃああとでオハナシしないといけないわね」

「すまん形無!父さんちゅうとせしゃわきたかもしれん」

「こやつよつとじゅねえし」

ゆでんお手製のおにぎりを食べながら俺は小ちく溜め息。いやおしゃつはずいじい美味しいんだけど親父の暴走が俺の中で味を占めてしまっているんだ。

「……お兄ちゃん、これ……」

「ん? ウインナーか」

隣に座っていた簾がおずおずと先端に均等に包丁を入れた赤いウインナー、俗に皿つた「やんウインナーを箸で差し出しつけた。

「あつがとな簾」

差し出されたワインナー。これは食べると書いてこるんだろうから俺は素直に受け取ることにする。なんたって愛する（家族として）妹からのお願いだからな。断るわけがないじゃないか。

「それじゃ遠慮なく」

そして俺は、簪が簪でつまんだままのタコさんワインナーを手で取つて皿の口に放り込んだ。だつて箸渡しは行儀悪いだろ？

「…………

「…………ん？」

えーと、簪？

なんでそんな『嘘でしょ？…………？』みたいな絶望した表情で俺を見てるんだ？

俺が何かマズイことしたのか…………？

因みに今の簪は右手で箸を持ってタコさんワインナーを何故か俺のほうへ近づけ、左手はそれに添えるように少し下に置かれている。これは言つなれば『あーん』スタイルみたいなんだが…………

「…………ん？」とかあ……

俺はバカか！！

どつかの鈍感主人公みたいことしてしまったが普通に考えれば分かるだろう！！

「かか簪！？ 悪かつた、だからそんな顔しないでくれ……」

既に目尻に涙を溜めていた簪を宥めるべく俺はあたふたと画策するが。

ふにっ

生暖かい何かが俺の頬に触れた。

……何故だろ？

とてもなく嫌な予感がするんだが。

恐る恐る俺がそちらに顔を向けてみれば。

「…………」

「えーと……、姫無？」

顔は笑顔だが無言で俺の頬に玉子焼きをぐいぐい押し付けてくる姫無の姿が。

「兄さん、あーん」

「ひ、姫無？ なんでそんな笑顔で背後にじどす黒いオーラを纏つてるんだ？」

「あーん、でしょ？」

敢えて言おう。
ガチで怖いと！－

六歳でこんな殺氣混じりのオーラを出せるなんて姫無、恐ろしい子。いや、そんなこと言つてる場合じゃないな。右も左も箸片手に『あーん』なるものをさせようとしてくる我が妹たちに挟まれてしまつて完全に逃げ場がない。

いや、嬉しいか嬉しいかつて聞かれたらそりや嬉しいって答えるさ。答えるけど、それはあくまで自室内の話で、尚且つ姫無箸が普通の状態だったりの話だ。

俺はこんな冷や汗まみれの両手に花状態は望んでない。

「せ、あーん」

玉子焼きをぐごごと尚も押し付けてくる姫無をまず満足せらるべきだらうか。

……いや、そうしたら完全に箸が泣く。既に皿は潤んでいてどこのチワワみたいになつてしまつてているんだから、限界はかなり近いとみてまず間違いないだらう。

ならまずは箸のタコさんワインナーに手を出すべきか？

……いやそれもダメだ。

やうすると姫無の機嫌がますます悪くなる。最悪口を聞いてくれなくなるかもしない。もし万が一そんな事態になれば俺は間違いなく寂しさで死ぬだらう。

どつちを取つてもバッドエンジしか見えてこないこんな状態を、

一体誰が予想しただらうか。

まあ確かに昔バッドエンジしか見えなくなりそだとか言つた記憶はあるが、まさかそれが体育祭の昼休みに発生するとは夢にも思

わなかつたよホント。

しかしどうするよ。

どーすんの俺。

この状況を誰も傷付けずに打破するには、一体どうしたらいいんだ。

「形無

すると、そんな状態の俺を見かねてか正面に座る千冬が声を掛けてきた。

助けてくれるのかと思い俺は心底安堵した。流石は『いつメン』、仲間がピンチのときに必ず駆けつけてくれるヒーローよひしへ、俺を窮地から救い出してくれるのかなながらホントヒーローみたいだ。

だが。

「その、まあなんだ……」のヒーローライも、なかなかだぞ……？

「こいつ火に油漬けか原油一斗缶ある」とぶち込みやがった。
すこいつ、ヒーローライを箸でつまんで俺のまつへと差し出していく
る千冬。

……「こいつ火に油漬けか原油一斗缶ある」とぶち込みやがった。

「……千冬さん。兄さんは私の玉子焼きを食べるんだから邪魔しないでください」

「ほう。言つじやないか姫無。だが形無はHビフライのほつが食べたそつだぞ?」

「……お兄ちゃんは……私のを、食べるの……」

ダメださうにカオスになつてゐる。左右正面から箸を差し出されるなんて経験、きっと俺が世界初なんぢやないだらうか。

どうにかしてこの場を収めて脱出しなくては。俺は助けてくれそうな人物を見回してみるが。

……ダメだまともな人種がいない!!

親父はなんかニヤニヤしながらじつぢつ見てるし母さんも傍観を決め込んでいるのか頬に手を当てニコニコ微笑んでゐるだけ。筈も一夏も今のこいつらを止める術は持つていねだらうじ。

畜生こいつに俺の見方はいないのかよ!!

「かーくんかーくん」

と、そこに今まで黙々と箸を進めていた束がよつやく口を開いた。彼女の弁当箱は既にからつぽになつており食材の類は残されていない。

といつことは、この『あーん』に参加されるということはないとい。

「いつ」ことになる。

「束……！」

俺は珍しく頼りになりそうな束を正直見直した。だからこそ、俺は束が次に言つた言葉が一瞬理解できなかつた。

「かーくんには食べ物なんかじゃなくて、私を食べて欲しいな～」

……ゑ？

その言葉に俺だけでなく千冬の動きまでもが完全に止まる。姫無簪は意味が分かつていないので頭上に？マークを浮かべ首を傾げているが、親父たちはニヤニヤ顔がヒートアップしている。

俺が甘かつた。

篠ノ之束は『天災』なんだ。

「こいつは何の躊躇いもなく、炎の中に核ミサイルをぶち込むような人間だった。

「……はあ」

俺は完全に脱力し大きな溜め息を吐き出す。いつでもしないことや

つていられない。周りで姫無たちが頻りに何やら騒いでいるが、俺としては早く解放されたい一心なのだ。

結局、千冬、姫無、簪のを三つ同時に食べるとこうじとで一応この騒動は終息した。

そして、午後からの一発目、一人三脚が始まろうとしている。

#15 弁当タイムのあーんはその時点でフリゲ（後書き）

一応これから展開ですが、ISが発表されたら形無たちはIS学園へ。

そこでクラリッサやナターシャたちと出合の予定です。

次回

新世紀カタナシゲリオン

織村、退場

#1-6 天災が見当たらないのはその時点でフラグ（前書き）

遅くなつて申し訳ありません。

これで体育祭は終了。次から皆さんお待ちかね（？）のIIS発表に話が進んでいきます。

#1-6 天災が見当たらないのはその時点でフラグ

前回のあいすじ

弁当食べるのにあんなに冷や汗をかくなんて思つてもみなかつた

さて、現在俺は騎馬戦のときと同じく入場ゲート裏で整列し、午後からの第一種目である『二人三脚』の開始を待つている。

もう言つまでもないのかもしねないが、うちの学校で行われる二人三脚が、そんじょそこらで行われているような二人三脚であるはずがない。

先ず、前提が間違つているのだ。

通常の二人三脚は一人の右足と左足を紐で縛り肩を組んだり背中に手を回すなり、協力して完走を目指すものだが、生憎うちはそんな生易しいものじゃない。

一人の足を縛っているのは、チタン製のロープ。つまり、人間程度の力では絶対に切れたりほどけたりすることのない紐だ。これにより、紐に関連したリタイアは皆無となる。

次にコース。通常の二人三脚であればグラウンドに描かれたトラックを一周、というのが定石だが、うちには校外を走る。交通機関も利用する。ゴールは学校から凡そ三キロ離れたテーマパーク。昔俺と親父、まだ赤ん坊だった姫無の三人が行つたところだ。

そんなわけで最早ミニマラソンのような「一人三脚」。ゴールまでの道順は特に定められてはいない。更に交通機関の利用も自由。もちろんそこは自己負担だが。去年はタクシーを使う強者までいたような気がする。

とまあ色々言つたが、つまりこの一人三脚、めちゃくちゃ時間かかるし体力的にもキツイつてことだ。去年は最後のペアがゴールした時はスタートから一時間以上かかっていた。

当然それに比例して得られる点も高いんだが、はっきり言って割り合わない。

そんな過酷な一人三脚をだ。

۷۰

「なんだよじろじろいつち見るな馬野郎」

俺はこんな残念な奴と走らにゃいかんのか。死ねる。相模に殺意を抱けるレベルだぞこれ、なんせ相模本人はのうのうとテント下で惰眠を貪つてやがるんだから。

「……はあ」

今日一日でもう何度目になるかわからない溜め息が俺の口から漏れる。
もうこいつなつたら腹をくくるしかない。

「おい馬野郎

「あん？」

馬野郎って前々から思つてたけど何処から来た渾名なんだ？

「俺の足を引っ張りやがつたら承知しねえからな。精々必死に走れよ」

.....。

いや、うん。もう織村がこういう奴だつてのは分かつてゐるんだけどさ、何でこんなにも上から目線なんだ？ 俺はそこまで気にしないけど他の奴らはそうとは限らないんだからもう少し友好的になつてもいいと思うんだが。

「いいか。俺はこの一人三脚、絶対に勝たねばならん理由があるんだ」

おいらなんか饒舌に語り始めたぞ。

どうしようこれ内容聞いた方がいいのか？なんかそんな雰囲気な

んだが。

「その理由……聞きたいか?」

聞きたくないです。

「ふん。お前」」ときに教えるわけないだり

それは良かつた。

「こつちとしても好都合だ。二人三脚前から何も疲れる」」ともないだろ。

「……だがまあ、一応お前にも関係なくはない話だからな、仕方ないから教えてやるか」

「いや俺は別」」

「お前がどうしてもひて言ひからだぞ?心して聞け」

いやまずお前が人の話を聞けよ。

……ダメだコイツ全然人の話を聞いてねえ。

「俺はな、決めてるんだ」

どうじょう話し始めちゃつたぞこれもう収集つかねえよ。

「」」の一人三脚で一位を取つたら、彼女たちに嫁に来てもらつてな

「」」は?」

彼女たち といつのまゝ間違いなく千冬と束のことじだらうな。これまでも散々アプローチしてたみたいだし。だが、それが上手く行った試しはこれまで一度もなことより思つんだ、うん。千冬には本気でイヤそうな顔をされ、束に至つては取り合おうともせずにガン無視。

なのにいつも自信満々に言い放てるロイツ、織村のこの自信は一体どこから来ているんだ。

「俺の夢を叶えるため、そして彼女たちと一緒になるため……この一人三脚で俺は一位にならなければならんのだ……！」

「……言いたいことは分かつた。いや分からんけど。でもさ、その嫁がどうとかつて千冬たちには了承は得てんのか？」

もしも、千冬たちがそれを了承しているのなら俺は別に何も口出しそるつもりはない。まあ、多分そんなもの取つていないんだろうけど。

「彼女たちは恥ずかしがりや、もと一シンデレだからな。好きな相手の前じや素直になれないのさ」

なんてめでたい思考回路の持ち主だ。織村にはマイナス思考とかネガティブ思考とかそういうものが備わつてはいないらしい。

「というわけで、足引っ張んじゃねえぞ馬野郎！――」

「はーはー……」

うんざりだ。

これから俺はこんな残念な人間とチタン製のロープで足を縛られて校外を走らなきやいけないのか。

見せしめもいいところ……。

『二人三脚に出場される選手の方々は北門に移動してください』

入場ゲート裏で待機していると体育祭の実行委員が拡声器を使って俺たちに指示して移動を促す。

うん。移動してから足縛つてくれる?

歩き辛くてしようがないんだがこれ。隣の奴は歩幅合わせようとしないし。

「ちょい、歩幅合わせてくれよ」

「あん? お前が俺に合わせればいいだろ? が馬野郎

「…………」

此処はキレてもいい場面なんだろうか。

俺滅多に怒つたりしないけど中々にフラストレーショーンが溜まつてきているような気がする。

と、そつこいしてこむつにスタート地点である学校の北門に到着。周りをザツと見渡せば一百人、百ペアくらいはいるだろうか。周囲は人でごった返しているのでこの暑さと粗まつて熱気が半端ない。

うわ俺の前に居るの相撲部だ。汗臭いからちょっと離れ……しま

つた織村の足に縛られたままだった。

『それでは、位置について』

体育祭実行委員の制度がピストルを高々と掲げて耳を塞ぎ。

『よーい、 ドンーー。』

パーン!! という小気味のいい発砲音とともに、総勢一〇〇ペアを超える生徒たちが一斉にスタートした。俺たちもその流れに乗つて走り出す、が。

「おい馬野郎出遅れてんじゃねえか!!」

「織村出す足が逆だ逆!!」

スタートダッシュは完全に失敗。最後尾のぼつぼつ一気に下がつてしまつた。

「チツ、馬野郎のせいで遅れちまつたじゃねーか!!」

「お前のせいだよ!!」

いつまで足を逆にしてんだ。普通お互いに確認し合つて進むだろうが。一人で走りだそつとしてるコイツを誰か止めてくれ。

そんな開始直後から仲間割れ寸前の俺と織村はやつとの思いで北門を出て、ゴール先であるテーマパークへと向かう。

だが今まで組んだこともないような人間同士、そんなに上手くい

くはずもなく、壊れかけのロボットのようにカクカクとゅつくり進んでいく俺たち。

「「」のままじや 一位だらかゴールできるかどうかも座じこなあ……」

…

「おこづしづしつてないでちやつちやと走れ……」

「いやもつ優勝は無理だと思つぞ? タクシーでも使えば話は別かもしけんが、それも誰かやつてんだろうしな」

「ぐぬぬ……こつなつたら逆転のためにアレを使つしかないか……」

…

なんか一人でぼやいてる織村は放つておくとして、これかじりしそうか。

実質的に一位はほぼ無理だと言つていいだろ。既に俺たちの周りには誰も居ないし、最後尾であることも間違いない。

だがこの一人三脚の配点は高い。一位は取れないまでも、なんとかして得点圏内で「ホールしたい」ところだが。

となると。

(能力……使うしかないのかなあ……)

全く気乗りはしない。

隣の織村にバレることになるし広まれば面倒なことになる。

しかし解決策がそれ以外に思いつかないのでから仕方ない。

(走るようにしてベクトルを操作すれば……こけるか?)

そんなことを考えている俺の隣で、織村がおもむろにズボンのポケットの中に手を突っ込んだ。

そこから取り出されたのは。

「携帯……?」

「ああ。これでヘリを呼ぶ」

とんでもないことを言ひ出した。

「はあ！？ それルール違反だぞ！…！」

「はん、んなもんバレなきやいいんだよバレなきや」

得意気に言い張る織村だが、コイツは一人三脚における監視の厳しさを理解していない。スタートからゴールまでの区間の至るところに監視カメラと監視員がつき、生徒たちに不正がなによつ田を光らせているのだ。

それを織村はのことなこと言ひよつに携帯を取り出し、あまつさえへりを呼ぼうとしている。

バカだろ。

「…………あ、もしもししポールか。至急ヘリを一台用意して………つて何だお前ら！－！離せ、離せよ－！」

携帯を使用した瞬間、学校の教員数人が一気に織村を取り囲み、持っていた携帯を直ぐ様取り上げた。

「携帯の使用、及び交通機関以外の移動手段の使用はルール違反だ」「ああ！？ 知るか、俺には果たさねばならない約束があるんだよ！－！」

両腕をガツチリとホールドされた状態で教員に食つて掛かる織村に対し、教員たちは数秒目配せして。

「更識・織村組。ルール違反により失格とする」

「なつ！？」

「はあ……」

俺は織村が携帯を取り出した時点での薄々こうなるんじゃないかとは考えていたためそれほどの驚きやショックはないが、織村は信じられないものを見るかのように騒然としている。

「ふざけんな！－！ 失格なんて俺は認めねえぞ！－！」

いやもう失格でいいよ。

これ以上織村と一緒に居ると頭が痛くなつてくる。

「教員に反抗。これもまたルール違反だぞ織村」

「うるせえー！俺には待ってる人がいるんだ……あいつらのためにも、俺は一位で『ゴールしなくちゃならないんだよッ！』

足をチタン製のロープで繋がれたままなので織村の叫びがダイレクトで俺の耳に届く。耳キーンとなるからやめてほしい。

「……（すう）」

すると教員は無言で織村に向けて何かを差し出した。トランプのようにも見えるそれの特徴は、真っ赤であるところだ。

レッドカードだ。

意味は言つまでもない。退場である。

バツンッ、と俺と織村を繋いでいたロープを教員の一人が切り、織村を拘束して学校へと引きずつていく。

「なつ、離せ……」

「織村、お前は一発退場だ。以後一切の競技への参加は認められんしグラウンドへの進入も禁止だからそのつもりでな。ああ、更識はクラスのテントに戻りなさい」

それだけ言って教員たちは織村と教室のほうに消えていった。

「はあ、出ぬ意味なかつたじやねえか……」

今日一番の溜め息を吐いて、俺はとぼとぼと待機場所であるテントへと戻つていった。

もう織村と関わらないようこじよつと誓いながら。

一人三脚を失格になつた俺はテントに戻つて身体を休めることにした。当然そこで惰眠を貪つていた相模に多大なるダメージを与えたからだが。本当は身体よりも精神が疲れているんだが、このうだるような暑さのせいで体力とやる気も汗とともに外へ流れてしまつているかのようだ。

結局一位でゴールしたのは我らが赤組の三年生で、時間は三十分

と少し。例年に比べれば速いタイムだ。

そんなこんなで残されている競技は残り一つ。体育祭の花形と言つても過言ではない、団別対抗リレーだ。

この競技だけは他の学校とルールは同じで、赤組と白組から選出された生徒各十一名がリレー方式でトラックを一周ずつ走るものだ。例年この競技の盛り上がりは半端ではなく、しかも今年は稀に見る混戦でこれに勝った組が優勝だといつから生徒たちの応援も最高潮に達しようとしている。

そんな中、テントから出た俺はとことん。

「形無。大丈夫か？」

「まあ、一人三脚は参加していないも同然だからな。体力的には余裕だよ」

「やうか。ならいいんだが」

現在俺はトラックの内側で千冬と会話中だ。選手に選ばれてしまつた俺たちは四〇〇メートルを走るわけだが、こんな大声援の中を走るのは正直気が引ける。

盛り上がるのはいいことなんだが。

……親父も盛り上がっているのが問題だ。

「形無い！！ 一位を取るんだ一位をーー！」

お前どつからそんなもん持つてきたんだとツツ「ミミたくなるような代物、チアリーダーとかがよく使うポンポンを上下に振る親父はリレー開始前から既に暴走モードに発展。

勘弁してくれ。

因みにこのリレーにも選出されていた織村がレッドカードで一発退場を食らってしまったため、相模が一回走ることに。御愁傷様だな、ほんと。

「む、どうやら始まるみたいだぞ」

「お、」

赤組の第一走者はサッカー部の相模だ。彼は一回走らなくてはならないためにこの走順に宛てられたんだが、スタートダッシュには持つてこいの人物だ。因みにもう一回はアンカーである。

『位置について、よーい

』

「ダンッ！――といつ言葉と同時に赤組と白組の第一走者がスタートする。

流石は抜擢されるだけのことはあり、二人とも俊足だ。

「流石はサッカー部一の俊足。はえーなあ」

白組の第一走者もバスケ部のレギュラーだが、やはり相模のほうが速くトラック半周の時点で一メートル程の差をつけている。

「頑張れよ千冬」

「ああ、なんどこりもトップで帰つてへる」

赤組の第一走者は千冬。正直相模から千冬へのバトンリレーは最強だと思つ。なんてつたつて千冬は女子で学校一の運動能力を持つてるからな。

「織斑！」

「任せろー。」

パシッ、と相模からのバトンを受け取つた千冬は直ぐ様加速。みるみるうちに白組の女子を引き離していく。

これはもう赤組（俺たち）の圧勝だろう。

やう思つていたんだが。

「……まじか」

相模と千冬が作つてくれた約半周もの差が、第十走者にバトンが渡る頃には差がなくなり、あらうことか白組に逆転を許してしまつ

た。

第十一 走者の俺は小さく溜め息。

「はあ……、これ一番プレッシャーかかる場面じゃないか？」

赤組のアンカーは相模だから滅多なことでは負けないと思つが、如何せん彼は既に一周走つている。その疲れを考慮するなら、ここは俺がもう一度逆転するのがベストだろう。

「しゃあない、頑張るか」

少しだけずるさせてもらおうか。バトンを受け取つた俺は足の裏にかかるベクトルを操作、流石に原作の一方通行アキセラレーダのように弾丸の如く突つ込むみたいことはせず、以下にも走つていますという感じでスピードだけ上げている。うん、まあ五十メートル五秒フラッシュくらいかな。

「つまーー？」

前方を走つていた白組の男子がそのあまりの速さに驚愕しているが、無理もない。こんな普通の男子中学生が出せる速度じゃないからな。

あつといつ間に俺は白組を抜き去り、再び赤組が一位に。

「流石『究極の帰宅部』だな更識ーー！」

「お前次にそれ言つたら殴るぞーー！」

アンカーとしてスタンバっていた相模と軽口を叩き合いながらバトンパス。さつきの疲れを感じさせない走りを見せる相模がそのまま逃げ切つて赤組が勝利し、総合優勝が決定した。

「お疲れさま」

「おつかれ。お疲れ」

走り終えた俺のところに千冬がやってきて労いの言葉を掛けてくれた。

「しかしまあなんだな。形無の運動能力は最早人外だな」

「お前には言われたくないんだけど」

ん?

そういえば。

「束はどうしたんだ?」

「二人三脚が始まるまでは一緒にいたんだが、また日射病で保健室にでも籠つてるんじゃないかな?」

「んっん~」

千冬の予想通り、束は保健室の一一番端のベッドの上に居た。だが具合が悪く寝込んでいるとかいうことではなく、寧ろ今の束には一種の達成感に満ちた表情を浮かべている。

束の視線の先には、空間投影式のディスプレイ。その画面の中央に表示されているのは『complete』の文字。

束は『う~ん』と軽く背筋を伸ばして。

「できたっ~」

#16 天災が見当たらないのはその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀力タナシゲリオン

終わる平穏

前回のあらすじ

体育祭は散々だった

体育祭が終わった次の日、つまり日曜日。俺と千冬は束に呼び出されて朝早くから篠ノ之道場へ足を運んでいた。昨日の疲れからかまだ睡魔が俺を誘惑してくるがなんとか振り払い、道場内へと足を踏み入れる。

「お、形無面に千冬ちゃん。おはよー」

「おはよー。柳韻ちゃん。相変わらず早いですね」

「はは。道場師範たるもの毎朝の道場掃除は日課みたいなものだからね。もう朝たり前になつてるよ」

「」の人は束、笄の父親でありこの篠ノ之道場の師範も務める篠ノ之柳韻さんだ。俺も小学校のころから稽古をつけてもらつたりと色々お世話になつていてる。

……中学で帰宅部だといふことは伝えていない。

「どうだい形無くん。また稽古しようじやないか

俺の専門は更識流の柔術で、それは柳韻さんも当然知つてゐるがどうやら俺は剣の筋がなかなかに良いらしいへ、事あるごとにこうじ

て稽古に誘われている。

誘つて貰えるのは光栄なんだが、この柳韻さん。たとえ子供であつても全くと言つて言いほど容赦がない。当時小三だつた俺は柳韻さんの竹刀に叩きのめされたのは苦い思い出だ。あの時はまだ超能力が使えなかつたし。

「いやあ、折角ですけど今日は束に呼ばれて来たので遠慮しておきます」

「ああ、そうだったね」

思い出したなり言ひた柳韻さんは一拍おいて

「……束が少しずつだが他人に心を開くべくなつてきたのは君たちのお陰だ。これからも、束のことをよろしく頼むよ」

「……はー

「分かりました」

俺と束は柳韻さんの言葉に確かに頷き、道場を後にして束の私室へと向かつ。

「束の部屋に来るなんて久しぶりだな」

「わうなのか？ 私はショッちゅう来ていろが

「あんな、千冬は女で俺は男だ。俺は気にしないけど普通この年頃の男は頻繁に女の部屋に出入りしたりはしないって

「むへ、 わつこつものか?」

「わつこつもんだ」

「なら形無は束の部屋に入るのに緊張とかしているのか?」

「いや全然。 自分ん家となんら変わらん心境だ」

「ならいこじやないか」

「俺ん家に盗聴器とか仕掛ける奴の家に進んで来ようとはしないだ
る……」

だいぶ数は少なくなつたが、未だに束は俺の部屋に盗聴器などを
仕掛けている。 一体どうやって毎回仕掛けているのか非常に気にな
るところだが問い合わせたところではぐらかされるのは田に見えてい
るので、 最近は反論の余地なく拳骨を束の頭にお見舞いしているが。

「うひ、 うひだな」

階段を上がつて一番奥の部屋。 ドアのやや上に『束』 といつーん
ジン型のネームプレートが掛けられた部屋の前に到着した俺と千冬
は、 数回のノックをしたあとドアノブを回し

「かーくーん……」

ドアを開けた瞬間に、 サッと身を畳めた。

「ぶへつ……」

「うわつ……?」

俺が身を屈めて飛び掛かつて来た束を避けたために後ろに倒た千冬と束が正面衝突。そのまま束が押し倒すよつた形で廊下にバタリと勢いそのままに倒れ込んだ。

「ひどいよかーくん…… 束さんの髪をきらんと受け止めてよ……」

「断固として断る」

千冬を下敷きにしたままの束が顔だけをこじりて向けて向やう言つてくるが、俺は押し潰されるのは「メンだ」。

「束ー わたれと降つろーー！」

『うんっーー！』

千冬の拳骨が束の頭部に振り下ろされた。

「うう、ちーちゃんの髪が痛いー」

ぶたれた箇所を両手で擦りながら涙目で嘆く束を千冬は見事にスルーして、俺と共に部屋に入つていく。

「で、今日私たちを懃々呼んだ理由はなんなんだ？」

ピンクで統一されたなんともファンシーな部屋の、これまたファンシーなもじもこべっかで腰を下ろした千冬が早速今日の本題になるであろう話題を切り出した。

これまでにも何度かこつして俺と千冬が束の部屋に呼ばれたこと

はあつたが、どれも凡人には理解できないようなびっくり発明品を見せられ自慢気に紹介されるという類のものだつた。

今回もそういうものである可能性は高いが、俺は心の何処かで言い知れぬ不安を感じていた。

もしかして、E-Sが完成してしまつたんじゃないだろうか。

その線である可能性は高い、といふかほほ間違いない気がする。

だとするなら非常にマズイことになる。

いや、前々から何れそうなるであろうことは原作知識から理解していくが、いざ田の前に迫られてみるとやはり不安が大きい。

だつて女尊男卑なんだぜ？ 僕これから社会的地位が急降下していくんだぜ？

「ふつふーん」

そんな俺の心情など全く気にかけない千冬は立ち上がりふふんと鼻を鳴らして。

「ついに完成したんだよ！ あれが！」

あれ、とは最早聞くまでもない。束が幼稚園の時から構造を練り

画面に出力し、何年もの歳月を経て製作した束の大発明。

「名付けてインフィニット・ストラトス……」

……ああ。

やつぱ予想通りだつたか。

「ばばーん！！ という文字が束の背後に見えるような気がする。束が手元のディスプレイを叩くと、空間投影式の画面が頭上に現れた。

「これは……束と形無が一人で話し合つていたものか！？」

「やつだよつーちゃん。束さんとかーくんの合作、謂わば『これは愛の結晶！』」

「いや違うからな？」

大体、合作なんて言つているが九割九部九厘は束の頭脳が造り出したものだ。俺はそれに少し口添えをしただけ。合作なんて大したことではない。

「……これは一体どういふ代物なんだ？」

ああ、そうか。

千冬は俺たちの会話に混ざつてこなつた（ハイレベルすぎて混ざつてこれなかつたというのが正しい）から、これが一体どんな物なのかをいまいち解つていないんだ。

「これはねつーちゃん。『TUE』つてものだよ！」

IS...?

「そう。正式名称はさつき言つたけど『インフィッシュ・ストラトス』。この束さんの頭脳を総動員して開発した、宇宙空間での活動を視野に入れたマルチフォーム・スーツなんだよ」

『誇りしげに言う東からは『すじい』でしょ！　誉めて誉めて…』

いや確かにスゴい。

こんな代物、中学生が作れるレベルを遥かに超えているし、実際原作ではこれを発端として世界の軍事バランスは崩壊したのだ。

「……そんなものを作つてどうしたの? だ?」

ふむ。千冬の言ひ方とも最もだ。

だけど何年も束と過ぎし、僅かではあつてもこのHSの開発に携わつた俺から言わせて貰えば、開発した理由なんて言つまでもないし、確認するまでもない。

認めて欲しかつたんだ。

周囲の人々から、認めて欲しかつたんだよ束は。

天才であるが故の孤独というものなのだろうか、俺みたいな凡人にはきっと完全に理解することは出来ないんだろうけど、それでも大事な仲間がどんな想いでコレを作っていたのかが解らないほど、俺はバカじやない。

束はその頭の良さ故に周りを突き放した。自ら。

それは同年代の子供たちがバカっぽくて一緒に居る気になれなかつたというのも理由の一つに確かにあるが、本当は怖かつたんだ。周囲から拒絶されるのが。自分の頭脳の異常さは自身もよく解っている。だからこそ、拒絶されるのを恐れた。

そして結論に至る。

拒絶されるのが怖いのなら、自分から拒絶してしまおう。

そうすれば他人のせいでの自分が傷つくことはないのだから。

そんな考えを持っていた束の前に現れたのが、当時幼稚園児だった俺だ。

俺の頭の良さはある時の束にとつては衝撃的だつたらしい。なにせ異常だと思つていた自分の理論についてこれる幼稚園児が居たんだからな。

そこで束の指針は大きく変わる。

周囲を突放すのではなく、認めさせよ。

自分の存在を無視できなくなるくらいの発明をして、世間に認められよ。

そういういた考えの結晶と言えるのがこの「う」なのであり、決して

俺と東の愛の結晶なんかではない。

「すうじいな……」「……」

主なスペックを曰にした千冬は思わずそう漏らす。

宇宙空間での活動を想定といつが、間違いなくこれは地球上で最も強の兵器になるであろうことに彼女も気付いたのだろう。基本性能、特性、装備、活動時間。どれをとっても現存するどの戦略兵器よりも上だ。それも圧倒的に。

「……で？ 完成したはいいがこれからどうするんだ？ まさか完成させて終わり、じゃないんだろ？」

「あつたりまあだよかーくん！ 直ぐに日本政府とかにこの」と言つたんだよ！」「

「それで？」

「バカバカしいって一蹴された……」

当然といえば当然の反応だな。

いきなり宇宙空間で使用できる飛行パワードースーツを女子中学生が開発しましたなんて一報を入れて信じるほうがどうかしてくる。

「まあそれが普通の反応だな

「だからね

……なんだかすうじく嫌な予感がするんだが。

「いかの日本に発見されたチャーチの歴史、この手を使って追撃されたことを考えた」

「いかの日本のチャーチを追撃した」

#17 IISの脱成はその時点でフラグ（後書き）

次回

新世纪カタナシゲリオン

決戦、太平洋上空（泣）

#1-8 勘違こなその時点での会話（通書も）

遅れてすいませんでした：
今日から1-2円ですね。

前回のあらすじ

まさかの爆弾発言に俺、絶句

束は俺と千冬の田の前で、とんでもない事を言い出した。

「私のISAがすごいことを証明するために、日本を射程圏内とする世界のミサイル基地のコンピュータを一斉にハッキングしたの」

「……え？」

なんとか硬直から立ち直った俺は冷や汗をだらだらと流しながら束のほうを見る。彼女からは『してやつたり』的な悪どい笑みが零れているが、そんな悠長なことをしている場合じゃないだろう。

というかこれってまさか『白騎士事件』か？　白騎士事件ってISAの発表から一ヶ月くらい後だったと記憶してたんだが、どうにもイレギュラー因子（俺）がいるせいで少なからず原作に影響を及ぼしているらしく。

「た、束！ 何でことをじているんだお前はつ……」

俺に遅れること数十秒、ようやく復活した千冬が発した第一声はそれだつた。無理もない。この話が本当だとしたら、世界各国の軍事基地から発射された数千発ものミサイルが日本に向かってくるといつのだから。

「今すぐ止める束……。」

「う～ん、それがもう無理なんだよちーちゃん

「なつ！？」

「だつて、もうミサイルは発射されちゃつてるんだもん」

流石とこりかなんとこりか、この天災は行動が異常に早い。これがISの価値を見せつけるためのマッチポンプだというなら、やっぱりこの後の展開は原作の通りに進んでいくんだろうか。

「 場所は？」

俺はとつあえず、ミサイルの着弾地点として設定されていいる場所を束から聞くことに。

マッチポンプならば、束が日本各地に着弾地点を分けるようなことはしない筈だ。出来るだけ派手に、かつISがどれほど優れているのかを世界に見せつけるためには、着弾地点は一ヶ所に指定されといふのはず。

「ミサイルの着弾地点に指定したのはどこのなんだ？」

「国会だよ」

サラシとなんとはなしに束は言つたが、それを聞いた千冬は血の気が引いていくかのように顔色が悪くなつていつた。俺はなんとなく予想はついていたので千冬みたいに驚きはしないが、それでも曰の前にいる少女の規格外さを改めて思い知らされる。

僅か十四歳、中学一年生の少女が全世界の軍事基地のコンピュータを手玉に取り、あるいはとか日本を中心である国会に向けてミサイルまで発射せてしまつたのだから、異常なまでのその手腕に舌を巻くばかりだ。

……おつと。

そんな悠長なことを考えている場合じやなかつた。このままじや日本を中心地が消し飛ぶことになつてしまつ。比喩でもなんでもなく、リアルに。

「ど、どつするんだ!?」このままじやミサイルが日本に………

「大丈夫だよちーちゃん。そのために、このHISがあるんだから」

言つて束は空間投影式のディスプレイを見ながらカタカタとキーを叩き、何やら新しいフォルダを呼び寄せる。

ああ、成程。

アレを呼び出すつもりなんだな。

束が数年の歳月を掛けて製作したHIS、その雛型にして第一世代

「ちーちゃん、これに乗つてミサイルを迎撃しちゃつてー。」

「なあつー?」

突然の迎撃宣言に驚愕する千冬だが、直後に現れたHSを前にして息を呑んだ。

「……これは……」

「束さんが丹精込めて造つた第一世代型HS、『白騎士』」

白騎士。

そう呼ばれたその機体は、白すぎるほどに純白の機体だった。宇宙空間での活動を想定していたためかやや無骨なナリをしていながら、これからファイットティングなどを経てよりフォルムはシャープになつていくんだろう。

「ああああちーちゃん。」の白騎士に乗つてミサイルをぶつ飛ばしかやねー。」

「そんなこと出来るわけがないだりつー!?

「うん。まあ千冬の言つことも最だな。

いきなり見たこともないような機体出されてハイ乗つてミサイルを撃墜してくださつて、これなんて無理ゲー状態だよ。俺だったらそんな自殺行為は絶対御免だ。

だけど。

「これは千冬が乗らないといけない機体だしなあ。ていうか千冬が乗らないと日本が終わる。俺は男だからHSには乗れないし、束が乗るとは思えない。」

「千冬」

「形無……？」

「「J」れは、お前にしか出来ない」となんだ」

「形無にも出来るだる「J」？」

「それは……」

「無理なんだよ。ちーちゃん」

俺の言葉を次いで、束が変わりに話し出した。

「ど「J」いつわけか、「J」のHSは女性にしか動かせないんだよね」

「女性だけ……？」

「そう。だから残念だけど、かーくんには「J」の白騎士に乗る「J」とはできないんだよ」

「……そうこ「J」とだ」

実際に男性がHSに乗れないといつ「J」が分かつたのは完成間近になつてからだ。起動実験といつ名田でまだ未完成ながらもある程度の性能は既に出来上がつていていた白騎士を起動させようと俺が機体

に触れても、何も起こらなかつた。束が触れると通常通り起動したんだが、やはり俺は何度触れても機体はうんともすんとも言つてくれなかつた。

やつぱり男である俺にはヒヒの適性は備わつていらないらしい。

とこつわけで、日本を守るために千冬がヒの『丘騎士』に乗るしかないのだ。

本当なら千冬をそんな危険地帯になんて行かせたくないし、出来ることなら俺だけでミサイルを撃墜してやりたい。

でもそれは俺の我が儘であるし、何より束のヒヒを世間に認めさせるために今はヒヒに乗れる千冬が大々的に活躍しなくてはならない。

心苦しいが、千冬に頑張つてもいいしかない。

「千冬……」

「……分かつた」

暫しの沈黙のあと、覚悟を決めたらしこ千冬が一言呟く。その表情に『惑いはない』。

「束。コレはどうやって装着するんだ」

「これはちーちやんが乗ることを想定して造つてあるからファイットイングまではすぐに出来るよ。あとちーちやんの思つ通りここに白騎士が動いてくれる」

「ふむ。よし……、」

瞳を閉じ、白騎士へと手を伸ばす。そしてその手が白騎士の機体に触れた瞬間、目映い光とともに千冬は世界で最初のエイ、『白騎士』を身に纏つた。

「どう? ちーちゃん」

「……まるで生身のようだ。こんなにも動きがスムーズなもののが」

「まだまだ改良の余地はあるけど、ミサイルを叩き落とすくらいなら造作もない筈だよ」

流石は織斑千冬といつべきか。普通の人間が初めてエイに乗ったらこんなふうにこきなり自分の手足のように動かすことなど不可能だわ。

「行けそうか?」

「やつてみなければ分からぬが、最善は死すべつもりだ

手を開いたり閉じたりして感覚を確かめながら言つ千冬からば、隠しているつもりのようだがやはり僅かな不安感を感じとれる。後の『ブリュンヒルデ』と言つても今はまだ十四歳の中学一年生。IS搭乗時間0の状態でいきなり危険な行為をしようとしているんだから無理もない。

だが、そんな危険地帯に千冬たつた一人で行かせるほど俺は腰抜けではないし、最初から覚悟は決めていた。

「俺も行く」

「「え？」」

俺のいきなりの発言に、千冬だけでなく束までもが素つ頓狂な声を上げた。

「か、かーくん？　かーくんはE.S.に乗れないんだよ？」

「わかつてゐる」

「連れていくわけがないだろう！？』

「大丈夫だ」

はあ。本当なら、千冬や束にだつてこの超能力のことは黙つておきたかった。そうすることが俺にとつても彼女たちにとつても最善だと思つていたからだ。超能力なんてオカルト紛いのものを誰が信じる、言つたところで一笑に臥されるのがオチだ。だから俺は本当に必要なとき以外このチカラを使うつもりなんてないし、二人にだつて話すつもりはない。

……そ、う、思つてたんだけどなあ。

千冬は俺と束を信じてE.S.に乗つてくれた。もしかしたら死ぬかもしれない位危険な場所へ、恐怖を押し殺してそれでも行くと言つてくれたのだ。

なら、俺だけのうのうと待つてゐるわけにはいかないだろ。本質の部分で行かないほうが良いといつのはわかつてゐる。原作通りだとしたら一千発以上のミサイルを千冬は撃墜し、無事に帰還

するだろ？。マッチポンプなのだから、束のハッキングしたカメラが俺の能力を捉えて全世界に中継してしまうかも知れない。

だからどうした。

大事な仲間が戦おうとしているんだ。高見の見物なんぞしていられない。

幸か不幸か、俺にはISにも引けを取らない超能力がある。核ミサイルをモロに受けようが身体には傷一つつかないような代物だ。普通のミサイル如きでやられることはないだろ？。

大体、あの時この一人に関わった時点で原作と無縁な生活なんて無理だと分かっていたじゃないか。なのに一人に能力を隠して生活しようなんて、何を中途半端なことをしてるんだ俺は。

決めたんだろ。

だつたら、貫き通せ。

「形無、大丈夫とは一体どういつ意味だ？」

訝しげに尋ねてくる千冬。束も流石に理解出来ていないのか首を傾げて俺の返答を待つているようだ。

そんな一人に、俺は先ほどまでとつて変わった笑みを浮かべて言った。

「俺つてちょっと特殊なんだよ」

「……それにしても未だに信じ難いな」

「何がだ？」

「形無が超能力者だつてことだ！－！」

現在地点、国会上空。

束が言うにはあと十分もすればミサイルの雨がこの国会を襲うようだ。束はこれを回線をハッキングして全世界に中継しているため全世界が知つており、また東京都近辺の人間たちは軒並み避難している。

千冬は白騎士を纏つた状態で上空に待機し、俺はというとオペラ座の怪人のような仮面をつけて真っ黒なスーツを身に纏つている。

……うん、何故にこうなった。

正体がバレると面倒だというのはわかる。だからってなんで束が取り出した変装グッズが仮面で千冬がスーツをいやに推してくれるんだ。

因みに俺は飛べないので国会の正門前に立っている。

「ほんとまじめと卑く言わないといけなかつたんだろうナビな」

「……いこや。形無も私たちを信用して話してくれたのだろ？？」

「……ああ」

「ならば私たちも形無を信じるぞ。私の背中、預けるぞ」「そう言つて微笑む千冬。嗚呼、仲間つてこうこうひとを育つのか。互いに信頼できる、命を預けることができる。

そんな人たちに巡り会えて、きっと俺は幸せだ。

だから、千冬を全力でサポートする。間違つても、ミサイルに墜墮なんてされてしまわないよ！」

「時間だ形無……ぐるぐる……」

「ああー！」

束が設定したミサイルの到着時刻数分前に達し、俺と千冬は揃つて空を見上げる。

すると現れたのは数えきれないほどのミサイルの雨。予想はしてたけど生で見るとこれ確実に東京どころか日本が消滅できるレベルだぞこれ……。

「これは束のISを世間に認めさせるのが目的だ。だから千冬、お前が頑張つてミサイルを撃墜しろ」

俺はベクトル操作によつて一気に国会の屋根まで飛び上がり、

「お前が危ないよつなら俺もサポートするから」

「了解！」

千冬は近接型ブレードを展開し、ミサイルへと突き進んでいった。

……うわ、すげ。

アレつて本当に第一世代型か？ 千冬が乗るとなんかいつも第三世代くらいの機動性がありそうな感じなんだけど。

あれつてハイパー・センサーついてんのか？ ていうかもし備つてないのにあの動きができるつてんなら俺はもう千冬を人間だとは思わないぞ。

目の前で次々とミサイルを迎撃していく千冬の能力に俺は感嘆した。IS搭乗時間が0でこれだけ乗りこなせるつて流石は原作キャラだな。圧倒的だ。

「ツ、形無！…」

なんて思つていたら一発のミサイルを撃墜し損ねたらしく真つ直ぐこつちに向かつてきている。

「これ着弾したら間違いなく首相官邸とか跡形もないサイズだな。

「任せろっ

俺は演算を開始、一方通行のベクトル操作、中でも基本的な『反射』を設定する。

更に足にかかるベクトルを操作することで上空高く飛び上がり、ミサイルのもとへと飛び込んだ。

グシャ、つと。

俺の身体に触れるか触れないかといつとこりで空き缶を踏み潰すかのようにミサイルが先端からひしゃげ、その場で爆発した。

遠目で見ていた千冬が驚いているのがこの位置からでも見て取れる。

そのまま落下した俺はタンクと国会の屋根に着地し、千冬が迎撃に間に合わなかつたミサイルをことごとく落していく。とは言つても数にして凡そ五百、残りの一千発近くのミサイルは千冬がたつた一人で撃ち落としちゃつた。幸いなことに周囲の人間が避難していたため破片などで負傷するような人間もいない。

「……ん?」

上空を眺めていた俺は新たにやつてくる飛行物体を見つけて目（と言つても仮面を付けてるので視界は良好ではないが）を細めてそれを注意深く見つめる。

「あれは……ミサイルじゃないな。てことは……」

束が全世界に中継してゐるこの映像を見て『白騎士』を捕獲、もしくは撃破しようと考へた各国が送り込んできた軍事兵器か。

戦闘機なんか送り込みやがつて此処で戦争でも始めようつてのか？まあ、こんな鮮烈な映像見せられて平常でいられる訳がないつてのは分かるけど。E.Sの存在を認めてしまつたらこれまでの軍事兵器なんて足元にすら及ばないからな。

「千冬。あれも撃墜していいぞ」

「人が乗つてるだろ？？」

「お前なら死者を出さずに機体だけを破壊することもできるだろ？」

「……ふむ。やってみるか」

「そうしてくれ。……つて、え？」

何故か白騎士だけではなく、俺にまで戦闘機やらが接近してきていふ。

……ああ、まさか俺もE.Sに載つてると思われてんのか？ いやいや確かにミサイル迎撃してたけど流石に仮面つけて黒スーツ着てる奴がE.S装着してるように見えるか？

普通は見えないだろ……。

「はあ……、」

ついつい溜息が口、もとい仮面から漏れる。

此処まできてまさか溜息が漏れることにならうとは思つていなかつたが、向かつて来てしまつていいものは仕方ない。捕獲なんてされるのはまつぱら御免なので、『こじまちよつと痛い田を見て貰つこと』にしうつ。

正当防衛だよ。せーと一ぱみつたー。

タンシ、と屋根を蹴つて俺は戦闘機正面へと飛び上がる。

「…?」

操縦者がなにせり仰天し慌てふためいているが、そんなことは結構いなしに俺は機体を力の限り殴り付けた。

それだけで戦闘機はベコベコとひしゃげ、爆発。操縦者は一早くパラシユートで脱出したようだ。

「ああー、」

上空に視認できるがへの戦闘機に田を向けて、俺は小さく口元を釣り上げる。

「わざわざ演出、ロクロー。華々しく散らせてやるから感謝しや

……やべ、なんか思考が若干一方通行化してきた。
アクセラレータ

『』の田、『』は世界中に嫌でもその存在を認めさせ、同時に『白騎士』と『黒執事』といつ名が知れ渡ることになった。

.....

『黒執事』

?

#1-8 勘違いはその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

IIS学園の中心で哀を叫んだヲトコ

#1-9 天災の失踪はその時点でフラグ（前書き）

お気に入り2000突破ありがとうございます！！

あと前回の後書きで「学園で」と書きましたがすいませんミス
です。

前回のあらすじ

白騎士と共に『黒執事』の名が知れ渡ることに……。——

あの事件 　　といつか千冬と俺が計一千五百発近くのミサイルとアメリカを始めとする各国が送り込んできた軍事兵器を片っ端から轟沈させた『白騎士事件』…………もとい『黑白事件』が起きた日、束の開発、製作したISは全世界にその名を轟かせることとなつた。

国会上空で次々にミサイルを迎撃する一人の映像は束がハッキングした衛星によって生中継され、その映像は各国に想像以上の衝撃を与えたようだ。

それもその筈、従来の軍事兵器を凌駕するその圧倒的な性能が明らかになつたからだ。

そんなISが世界の目に晒されて、おいそれと平穏がやつてくるわけもなく。

宇宙空間での活動を想定して開発されたISは宇宙進出よりも寧ろ飛行パワードスーツとしての軍事的な活用を唱えられるようにな

り、まず世界的な条約が締結されたこととなつた。

アラスカ条約。

正式名称『IS運用協定』。

IS条約とも呼ばれるこの条約は、軍事運用が可能となつたISの取引を規制すると同時に、ISの技術を独占的に保有することとなつていた日本への情報開示とその共有を定めた協定だ。

始め日本はこの条約の締結に異論を唱えようとしていたらしいが、某ヤクザ国とヨーロッパ諸国に圧迫されて結局締結することに。

そして『黑白事件』から約一年半後、このアラスカ条約に基づいて設立されたのが、『IS学園』だ。

条約に基づき日本に設立されたこのIS学園はその名の通りIS操縦者育成用の特殊国立高等学校で、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないと、この国際規約のもとで存在している。つまりこのIS学園に在籍、又は関係している以上、その個人に対する国家は手出しが出来ないというわけだ。

ただこの規約に各国は反発しているという訳ではなく、他国とのISの比較や新技術の試験に適しているため、そういう意味では重宝されていたりもする。

そんなIS学園が完成し、こぞ来年から開校となつたのは俺がま

だ中三の冬だった。世間では既に女性にしか起動させることができないIISのせいで男女のパワー・バランスが逆転し、徐々に女尊男卑の世界へと成りつつある今日この頃。

俺は平凡な受験生活を送っていた。

女生徒の間では既にIISに関する事前授業などが行われるようになり、最近発表されたIIS学園の倍率はなんと前代未聞の一万倍超え。

定員が二百人であるのに対しても志望者が二百万人を超えるほどのが超難関だ。

そしてそのIIS学園を受験するための条件はIISの適性があること。

そして、『女性』であるということ。

というわけで世界的に注目されているIISだが、我々男子からしたら特に興味を持つということもなく、肅々と受験勉強に取り組んでいる。

だつてそういう。乗れないものに興味を持つことは難しい。どれだけ想像しようが、それが決して実現されることはないんだから。

始めは憧れを抱いていた男子も居なかつたわけではないが、それもIISが発表されて一年以上経つた今ではすっかりいなくなってしまった。

勿論それは男子である俺も例外ではなく、迫る受験日に向けて目下勉強中なのだ。

「形無」

「ん? どうした千冬」

現在四時間目、科目は受験も近いことと血溜になり、各自が机をくつ付けて総力戦で苦手科目を勉強したりする者達もいれば、一人で黙々と勉強を進めるものたちもいたりと思い思いの勉強方で自習している。

そんな中、俺と机をくつ付けて化学を勉強していた千冬がふいに口を開いた。

「形無は受験先、決めたのか?」

「ああ。学費が安くて就職のいい藍越学園を受けるつもりだけだ」

「……H学園を受験しようとは思わないのか?」

「男の俺が受けられるわけないだろ?」

俺は実家からの交通も良くて学費も安い、おまけに就職先も多い藍越学園を受験しようとしている。確か原作で一夏が受けようとしてた学校だ。H学園、確かに凄く学費が安い。

俺としては姫無や簪の学費を払わなくてはいけない親父たちに余り迷惑を掛けないように、という考え方からの決断だ。

「しかし、アレだけの力があるんなら……」

「俺はあの能力を見せびらかすつもりなんてないよ」

千冬はH学園を受験する。簡易適性試験においても高い評価を

受けていた千冬なら、倍率一万倍だらうが落ちることはないだらう。
なんてつたつてあの白騎士を操縦していたんだしな。

でも俺は違'う。

『黑白事件』の時だつて超能力を使つただけでエスに乗つていたわけではない。

……世間ではスース型エスなんて尊されてるけど。

とにかく、俺がエス学園になんて行けるわけがないんだ。というかあんなフラグまみれの場所に行きたくないんだ。

「しかしだな……」

「はいはい。この話はこれで終わつ。これ以上喋つてると他の迷惑になるだろ」

「むう……」

そんな類を膨らませてこいつを見つめてきたつてダメだからな。ちょっとドキッとしたけど、それとこれとは別問題だ。

「もうこりや束つてじつしてるんだ?」

「私には喋るなと言つておいてお前は普通に喋るのか……。さあなともとアーツは自由奔放といつかなんといつか、掴み所のない奴だからなあ。二週間程前にやることがあると言つて家を飛び出したつきり帰つてきていなうそうだ」

「やうか……。まあ束なら心配するだけ無駄だらうけど」

中学三年に上がった俺たちは三人とも同じクラスになつた。といふか束が何か細工を施したらしいんだが、詳しいことを問い合わせただしてもはぐらかされるだけで明確な答えは返つてこなかつた。
……担任の女の先生がガクガクと震えていた理由が是非とも知りたかつたんだが。

だがそんな束も今や世界的な天才科学者。

ISの発表以降情報開示を求める各国の連絡は後を絶たず、篠ノ之道場にまで政府の人間が押し寄せるほどだ。

束は他人との関わりを嫌うのでほぼ柳韻さんが対応していた。

「つたく、どこいったんだか」

そんな天才が失踪してもう三週間になる。千冬が言つこなにやらることがあるらしくそのため色々と画策しているらしいが、一体何をしているのやら。

なんて思つていると。

不意に、教室に備え付けられたテレビの電源が点いた。

「なんだ……？」

訝しげに点灯した画面を見つめる俺と千冬。モニターは数秒の砂嵐の後、パッと画面が切り替わった。

「ツー？」

「なあツー？」

俺と千冬は驚愕と同時に目を見張る。

画面の先に、見知った顔が映っていたからだ。
それと同時に俄に騒がしくなる教室。

「……何してんだ、アイツは……」

画面に映っていたのは。

『やつほー。束さんだよー、かーくんにちーちゃん、見てるー?』

失踪したはずの、篠ノ之束だった。

というか何故に校内放送に束が出てるんだ。

『あ、ちなみにこの映像は全世界に同時中継されてるよー』

マジかよ。

またハツキングしやがったな。

『今日は全世界に発表しなければならない重大なニュースがあるから、それを教えてあげようと思つてね』

ニュース? 一体なんだと言つんだ。つーかよく衛生の監視を搔い潜つてハツキングしたよな束。もう束の手腕を上回る国はないんじゃないだろうか。

「なんのことか知ってるか形無?』

「いんや。全く見当がつかない」

『当たり前だよちーちゃん。だつてまだ誰にも言つてないんだもん』
そんな俺たちの会話をまるで聞いているかのように、画面越しの束は俺たちの会話に割り込んできた。他の人がみてたらきっと意味不明だろ? うな。

『ふふーん。じゃあ発表しちゃおうかな』

何やら得意げな束がピンチと人差し指を立てて。

『なんとーーーあの「黑白事件」の黒執事が誰なのか判明したんだよーーー』

。

おー。まさかな、幾らなんでも……

『彼の名前は更識形無。世界初の男性エイ操縦者ーーー』

「束ええええッーーー！」

静まり返る教室で、俺は血の涙を流して咆哮した。
いかにも『してやつたり』的な笑顔を浮かべる束。隣で啞然とする千冬。

一体何のつもりなんだ。俺の平穀をぶち壊して楽しいのかー!?
……やめろクラスの皆こいつを見んじゃないーーー！

ていうかまさかこんな事するために三週間も行方を晦ませてたつたのか。

愕然とする俺に『えられた『初の男性HS操縦者』』といつ全くもつて欲しくない称号。

しかも渾名は『黒執事』。

そして、この日俺の辞書から『平穏』といつ単語が消え失せた。

#119 天災の失踪はその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

覚えのない入学

前回のあらすじ
俺の手から平穏が逃げてこきました

「.....」

「.....（ジーツ）
「.....（ジーツ）
「.....（ジーツ）

べつじてこいつた。

俺が居る一年一組の教室。そこに屈心地悪そうにして席に着く俺を、他のクラスメイトが食い入るように見つめているのが背中越しからも伝わってくる。

「.....はあ、

最早お決まりになつたある溜め息を一つ吐き、俺は天井を見上げた。

本当、心うじてこなつた。

時は少し遡り、例の男性IIS操縦者発覚といつ全世界が驚くニュースを束が流したその日の夕方。俺と千冬は再び束の私室へと足を運んでいた。

腕を組んで無言で椅子にかけた俺の正面には、正座せられた状態の天災、篠ノ之束の姿。

「……で？ 何か言い残す」とはあるか束

「ちよつ！？ それこれから束さん殺されちゃうみたいな台詞だよ
かーくん！？」

「よく分かってるじゃないか

「待つて待つてかーくん！？ 確かに何も言わなかつたのは謝るよ。

でも、いつあるしか方法がなかつたんだよーーー。」

「……どうこうことだ？」

俺が一応話を聞くよになつたことで安心したのかしょんぼりして、いたウサ耳（いつの間にか装着していた）がピーンッと勢いよく起き上がつた。

「『黑白事件』の時、かーくんスーツ着てたでしょ？」

「ああ

「それを見てた各国があの体格は男じゃないかって疑問を持ち始めたの」

「…………、」

「でね、映像を解析された結果、『黒執事』は男性である可能性が非常に高いつて」

俺は椅子に掛けたまま、ガックリと頸垂れた。そりやそうだよな。スーツ着て仮面したくらいじゃ性別を誤魔化すなんて難しい。大体千冬が乗つてた『白騎士』と蹲されてる『黒執事』って見た目からして違にすぎるだろ？

「……はあ、つまりこうことか

俺は束のあの発表の真意に辿り着いたが故の溜め息を一つ。

全く、俺のことを心配してくれてるってのは分かるけどもつまよ

つひとつ穩便にせつ過いすとほできなかつたんだろつか。

……無理かな。

束がいわゆるしかなかつたと言つたなら他に手立てはないだらうし。

「じつこじつじだ？」

意味がよく解つていなかつたのか、今まで話を聞いていた千冬が聞いてかかる。

そんな千冬に俺は白嘲氣味に微笑んで。

「じつもいりません。束が俺を守るためにしたことなんだよ、コレは」

「？」

こまこち要領を得ない千冬。なにせ田の前のウサギさんは真意を知られたくないのかキヨロキヨロと左右に視線をさまわせていうが、千冬ならば知つてもいいだろう。

「 束は、俺を守るために『黒執事』つていうエリをでっち上げて俺を操縦者に仕立て上げたんだ」

思えば俺も軽率だつた。全世界の目に晒されるといつことが分かつていながら、あの程度の変装しかしていなかつたのだ。本来ならば顔全体を隠さなくてはならなかつただろうし、男だと判らないくらい体格の区別がつかないような服装をすべきだつた。

だといつのに、俺は口の出た仮面に黒スース。

これで性別を誤魔化せるといつほうがどうかしている。

つまるところ、俺の身元や性別がバレる一歩手前まで来ていたのだろう。もしくは既にバレていたのかもしれない。

もし俺の正体がバレて男であるといつことが解った場合、ISに乗れるのは女性だけという定義に揺らぎが生じる（実際には俺はISに乗れはしないんだが）。

そして稀な男性IS操縦者の俺は間違いなく何処ぞの研究機関のモルモットにされるだろう。人体実験されるなんて笑えない冗談だ。

そんな折、束の全世界同時中継だ。

これによつて各國政府しか知らなかつた情報は全世界の人間に知れ渡ることとなり、裏で俺を捕らえようとする政府を牽制、動きを封じた。

そんな束の手腕によつて俺は各國から追われるといつ最悪な事態は回避したわけだ。

したわけなんだが、その代償はなかなかに大きかつた。

あの発表から数日、うちの屋敷に早速日本政府からの通達があつた。内容は言うまでもない、IS学園への入学要請についてだ。因みに拒否権といつものはないらしい。

それを見た親父は俺が寮生活を強いられるために号泣していたが（姫無、簪も同様）なるべく帰つてくるといつことで了承を得た。

「まあ、確かに束には感謝するべきなんだろうが何故かな。お前のその表情^{カオ}を見てると何か裏がありそうな気がしてならない」

「うえつ！？ 何言つてるのさかーくん、束さんがそんな邪な考えを持つてるわけがないじゃない！！」

冷や汗だらだら流しながら言つても説得力ないぞ束。

「というか束、絶対俺をIS学園に入学させる気だつただろ。あの表情^{カオ}は絶対そうだ。畜生、俺まで道連れにしやがつて。

といつのも、実は束もIS学園への入学が決められているからだ。

もちろん最初束は猛反発。篠ノ之神社に足を運んでくる日本政府の役人を突っぱねていた。しかしそこは日本政府も引き下がれなかつたんだろう。譲歩に譲歩を重ね、なんとか条件付きでだが束をIS学園に入学させ一箇所に留まらせることに成功したのだ。

…… 一体どんな条件出したんだろうな束は。

「…ということはあれか。結局俺のこれまでの受験勉強は無駄だったってことか」「

「まあやつなんね」

「へー。そ、うかそ、うか」

「えへへー…………つて痛い痛いーー！」
蟋谷グリグリしないでかーくん

「やかましい。やり場のない怒りをちらつとせ發散せしてくれ」「ギヤー……！」

という事があつたために、俺は全く本意ではないが千冬たちと一緒にIS学園へ入学することとなつた。

長つたらしい入学式も終わり、クラス分けを見て自分の教室に入り（千冬、束とは同じクラス）、宛てがわれた自分の席についたと

「ひで最初の場面へと戻るわけである。

（……後ろからの視線がなあ……）

運の悪いことに俺の席は真ん中最前列。この上ないバッドポジションだ。今日ほど名前順で『さ』だったことを恨めしく思った日はない。

千冬はなんだか機嫌悪そうにしているし、束に至っては早速消えやがった。どんなだけ自由人なんだアイツは、なにやら背後から『声かけてみなよ』やら『彼女さんとかいるのかな』やら女子生徒たちの声が聞こえてくるが、そこは気にしないほうがきっと身の為だろつ。

因みにこのIIS学園。第一期生となる俺たちは年齢の幅が十五歳から十七歳までとされており、学年は一、三年生は存在しない。来年以降になれば別だらうが。チラッと周りを見た感じだと世界各国から生徒は集まっているようだがやはりまだIISが発表されてから一年ちょっととしか経過していないということもあって専用機持ちは圧倒的に少ない。大体IISの数自体がまだ少ないのでから無理もないが、その数は俺が知る限りまだ〇だ。

俺のことはカウントしていない。だってこれIISじゃないし。

「はい席に着いてくださいーー」

ガラツと教室前方のドアが開き、教員らしき女性が入ってきた。あれ？ なんか見たことあるよつたな顔してんなこの人。

「えー、今日から私がこのクラスの担任になる山田麻世です。みんなよろしくね」

……思いつきりやまやとおんなじ顔だ。こことは姉か何かかな。
こじても似すぎるだろ。やつくり過ぎて違うといひなんていんじや
……あ、あつた。

この人、やまやと違つて貧乳だ。

なにか物足りないと思つていた原因はコレか。いやあるのとない
のでこんなにも違うんだな。

「えーと更識くん?」

「はい?」

「君今なにかす?」——く私に失礼なこと考えてなかつた?」

「いや全然?」

「……そう?」

「はい」

危ねえ。なんだこの人読心術でも修得してんのか? やまやと違
つて鋭すざるだろ。

「はい。じゃあまずは自己紹介とこきまじょうか。名前順で行く

から一番端のえーと、会田さん。お願ひね

「は、はーー」

クラス名簿と会田さんを交互に確認しながら自己紹介を促す山田先生。言われた会田さんはガタツと立ち上がって。

「あ、会田仁美です！ 国籍は日本で、バスケットやつてます！ 趣味は・・・・・」

肅々と進められていく自己紹介。こんな時に思つのもなんなんだが、ISが世界に公表されて一年弱。ここに教師たちはISについてどこまで把握しているのだろうか。当然『白騎士』の正体が千冬だなんてことは知らないだらうし、ISの性能も完全には把握できていなんじやないかと思つ。

今現在、世界中に普及しているのは第一世代型だが束の中では既に第二世代型が完成しようとしている。各国がようやくISの性能を理解し始めたと思つたら束は遙か先を行つているのだ。本当に末恐ろしいよ。

「更識くん」

「はー？」

「次、君の番なんだけど」

どうやら考え方にも気を取られて自分の番が回ってきたことに気がつかなかつたみたいだ。時間を取らせるのは悪いと思ったので俺はいそいそと立ちあがり。

「えー。更識形無です。皆わん」存知の通り世界初のＩＳ操縦者です。以上」

あまり長い自己紹介をする気もなかつたので簡単に言つて席に座る。

「これですぐ後ろの席の女子へと自己紹介が移るのかと思ひきや。

「はーいじゃあ更識くんになにか質問ある人ー？」

何故か担任の山田麻世……面倒だからやまよは質問を受付始めた。なんで俺の時だけ。

シユバツ！！

……ほほ全員が挙手。

やばいこれ厄介なパターンだよ。一夏の時そつくつだよ。

「なんでＩＳに乗れるんですか！？」

「ＩＳがスーツつてどうじうこと！？」

「黒執事つてなんなんですか！？」

「もう一人とは何か関係あるんですか！？」

うわもう質問攻めだよ。

だけど、取り敢えずこの質問にだけは今すぐ答えておこう。

「もう一人とはなんの関係もないです」

もう一人、というのは俺の呼び名からも察しあは付いたろう。

『世界初の男性ＩＳ操縦者』。

決して『世界唯一の男性IS操縦者』ではない。

居るんだ。このHS学園に。

世界で一番目の男性IS操縦者が。

#20 HS学園への入学はその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

残念、再び

#21 ハラクを避ける考え方の壁とハラク（記書き）

やつと入学でもました。
これからどう進めたるといこな。

前回のあらすじ
やまやの姉は貧乳だった件について

『世界初の男性IS操縦者』。

これは俺の呼び名のよいつなものなんだが、“世界初”といいつところがこの名の肝だ。

世界で初めて、といつことは当然その後も存在する可能性があるということだ。ISが発表されて一年余り、これほどの短期間では女尊男卑も原作ほどに極端ではなく、さらに男性IS操縦者の登場が早かつたこともあつた同等とはいかないまでも間違いなく男女平等に近付きつつある。

俺の呼び名が『世界唯一の男性IS操縦者』から『世界初の男性IS操縦者』に変わつたのは、あの束の発表から一ヶ月ほど経つてからだつた。

予兆などなく、突然沸いて出たかのように一人目となる男性IS操縦者が発見されたのだ。

これには流石に俺も驚いた。原作では当然一夏しか乗ることの出来なかつたI.Sを乗ることの出来る人間が存在したというのだから。当然ながらこの第一の男性I.S操縦者は俺のように束によつて公表されたわけではない。

名乗り出たのだ。自ら。

後に『世界で一番田の男性I.S操縦者』と呼ばれることとなる男の名前は 織村一華。

そう。あの織村だ。

幼稚園の頃からの知り合い（？）であるアイツとはかつて体育祭で一人三脚をした記憶が鮮烈に残つてゐる。ほんとあのバ……織村は何がしたかつたのか今でも疑問だ。

そんな織村が本来ならば女性にしか動かせないはずのI.Sを何故

起動させられたのか、実際の所まだ俺には解らない。まだ彼がISを動かしているところを生で見ていないからだ。

だが束が我が子のように可愛がるISをアイツが使えるなんて有り得ない、と言つてはいたように俺もなんだか腑に落ちない。

いや、俺が言うのもなんだけどISを動かせる男子なんて有り得ないんだぞ？ 主人公フラグでも建つてない限り。俺は例外としてもじやあアイツは……ということになる。

一度束に本当にアイツがISを起動させられるのか調べてみれば、と進言したこともあつたが「あんなのと関わるのは生理的に無理」と一蹴していたために、此処IS学園に入学した今でも詳細は分からぬままなのである。

さて、なんだか前置きが長くなつてしまつたが、つまり俺が一体何を言いたいのかと云うとだ。

「俺は一人目とは一切合切何の関係もありません。あしからず」

じつはことだ。

確かに俺と織村がISを扱えるというニュースが全世界に流れたのは同時期でしかも同じ年だが、それだけで関係があると思われてしまつるのは相手が相手だけに流石に心外だ。

いや、それも無理のない話かな。

なんてつたつて俺と織村はこれまでの経歴だけ見れば幼稚園から中学校、そしてE.I.S学園に至るまで全く同じ道を歩いてきているんだから。

「ひつちとしては織村を知ったのは中学に上がったころだし全くと言つていい程に関わりはない。いつだつたか織村が俺に向けて『千冬束は俺の嫁』宣言してたけど俺からしたら『何故に俺?』という感じだつた。

だから俺は瞳を輝かせてアイツとの関係を聞いてくるクラスメイトたちに言つ。

「事実は事実です」

何やらびーたれるクラスメイトたちがいるが、事実は事実でしかないためごめんすることもできない。

「はい、他の質問あるかー?」

せまよせまよせまよ。もういいんじやないでしょ?うか。

ババツ!!!

ほひ。限界まで手を伸ばした方が我先にと今にも立ち上がりつつしててゐるじゃないか。

「はい、じゃあそこのえーと……リリイ＝スター＝ライ

やまよ。生徒の名前くらじ覚えておけよ。

「『黑白事件』の件についてお話をしたいのですが、」

リリイ＝スター＝ライと言つ生徒が立ち上がり、机に向つて口を開く。綺麗な金髪だな。イギリス人がフランス人だらうか。俺は外国にあまり詳しくないから解らないが間違いなく美人の部類に入ると思つ。

「貴方の専用機だという『黒執事』にも色々とお尋ねしたいのですが、先ず貴方と共に『白騎士』とは一体誰なんですか？」

「誰なんですか？」と聞かれてもなあ。おいそれと『あそこ』の席に座つてゐる織斑千冬です』なんて言えるわけねーし。心無しか千冬が冷や汗を流しているような気がする。

『いつかそれ最重要国家機密に相当する情報だぞ。機密って言つても各国はもちろん日本の日本政府でさえ白騎士の操縦者が誰なのか認知できていないんだけど。

理由は簡単、束の手腕のおかけだ。

束が情報封鎖したものを、俺の口からポロッと言えるわけがない。

だから俺は、

「それは俺にもわからない。共闘したのは確かだけど、俺は白騎士の正体は知らないんだ」

「うん」とうなづかない。

怪しまれようがなんだろうが、いつシラを切るしかないのだ。

「あれだけ息のあったコンビネーションだったのに、あれは即興のものだったと？」

「ああ

事実だ。だって千冬がエスに乗ったのはあの時が初めてだったわけだし、一千発以上のミサイルが降ってきてるつてのにコンビネーションもなにもないだろう。

……なのにどうしてお前はちょっと嬉しそうなんだ千冬。ニヤニヤしながら窓の外を眺めるのやめる。

「……そうですか。では最後に一つだけ

まだあるんですかリリィ＝スター＝ライさん。

「あなたの『黒執事』。アレは一体何なんですか？」

瞬間。

俺の背中から嫌な汗が噴き出すのを感じた。

「この少女。疑っている。

俺が本当はエスに乗れないのではないかと。

「あの映像は見なかつたのか？」

「もちろん拝見しました。だからこそです。ただの黒スーツ、執事服と言つたほうがいいのでしょうか。アレがエスだといつことが私は信じられません」

鋭い眼光が俺に穴を開けるくらいにまっすぐに見つめてくる。まあ確かに。宇宙空間での活動を想定されたマルチフォーム・スースであるI-Sが黒スースで執事服つて何の冗談だつて感じだよな。俺だつて当人じやなかつたら絶対に信じないだろうし。

だから俺はリリイといつ少女の意見には全面的に肯定するよ。だけどそれはあくまでも俺の心の内だけの話だ。

束が折角こうして俺を守るうつとしてくれた以上、俺だつて相応の対応をしなくてはならないだろ。

だから言つ。

束のためにも。

俺は平氣で嘘をつべ。

「アレは篠ノ之博士の試作品だよ。通常じゃ見えないシールドがあるスース全体を覆つてゐる。まあ他のI-Sと比べて見た目が特殊なのは認めるけど、元々は普通のI-Sだつたんだぜ？」アレ

「貴方が起動させてあの姿になつた、と？」

「そつこつこと。何と言われよつとそれが事実なんだからしじうがない

「ですが……」

「なら、あの映像で俺はどうやつてミサイルを迎撃してゐた？ ただのスースを着たサラリーマンみたいな人間に、そんな常識はずれなこと君はできると思つのか？」

「そ、それは……」

言い淀むリリイ。彼女自身もまだその理由が説明できないみたいだ。いや、逆に説明されても困るけれども。俺が使っているのは超能力であつてISを動かしているわけじゃない、なんて言われたら俺はその人を超能力者だと断定するぞ。

「リリイ＝スター＝ライ。もういいだろ？」「

このままでは埒が明かないと判断したのかやまよが俺たちの間に割つて入る。

「更識も座りなさい」

言われて座つた俺たち。リリイはまだ不服そうだったが。そんな一人を見てやまよは自己紹介の続きを始める。

「えーと次は……篠ノ之東。いきなり休み？」

本来ならば俺の後ろの席に座つているはずの東の席は見事に空席。

東はほんとに興味のない人間と関わるのを嫌うからなあ。こんな空間には居たくないんだろう。

「しようがないわね。じゃあ次の

「

続けられる自己紹介をぼんやりと聞きながら、俺は遠田に窓の外に視線を移す。

今更ながらに信じられないという思いが込み上げてくる。

(ほんとに入学しちゃつたんだな……、EVA学園)

周囲が俄にざわめき立つのを感じる。無理もない。何せこの俺、織村一華が今から自己紹介を始めようとしているんだからな。

『世界で一番田の男』操縦者

それが俺の肩書き。

一番田、といつとこひがひとつもなく不満だが、所詮肩書きなんでもので俺の全てを表現出来るわけがないんだ。そんな些細なことを気にするほど俺は器の小さい人間じゃないからな。

「次、織村くん。自己紹介お願いね」

「はい」

「言われて俺は立ち上がり、後ろに振り向く（因みに席位置は形無と同じ）。

「織村一華。みんな知ってるだろ？ナビ世界で一人しかいないEISに乗れる男だ。みんなヨロシクな」

まず手始めはこんなもんだ。掴みは大事だが行き過ぎたアピールはまだ早いだろ？しな。

「質問ある子いるかな？」

俺がそう言つと向背かの女子が手を挙げた。そのうちの一人を指名する。

「織村くんはあの篠ノ之博士とは知り合いなんですか？隣のクラスの更識くんは篠ノ之博士と仲が良くて専用機まで持つてるとみたいでけど」

更識？

……ああ、あの馬野郎のことかよ。

あの野郎、きっと束に無理言つて専用機造らせたんだ。酷いことしゃがる。

「束とは懇意にさせてもらつてゐるけど、あいつとは何の関係もないし親しくはないね」

「やうなんですか？ じゃあ織村くんもいづれ専用機を？」

「束がいつか作ってくれれば、俺も専用機を持てる日が来るかもね」

一応、いつこうとしておいつ。専用機。確かに欲しいかと聞かれば要らないとは言わないだろ？が、俺がこのH.S学園にやつてきた理由は、千冬や束と一緒に時間を過ごすためだ。

それを邪魔するような野郎（主に形無のひと）は、誰であろうと容赦しねえ。

俺の『ダークマスター未元物質』に常識は通用しねえんだからな。

「……ふう、」

自己紹介が全員終わつたところで一日休憩となつて一年一組の教室。その一角で俺は机に突つ伏して小さく息を吐いた。ついさっきまでいろんな女子から質問攻めにされ、ようやく解放されたんだ。千冬に助けを求めて全く助けてくれないし、やつきまで嬉しそうにしてたのになんだこの機嫌の豹変は。

「なあ千冬。なんで機嫌悪そうにしてるんだよ

「……悪そうじゃない。悪いんだ」

「さつあまであんな一々一々したのとか？」

「うー？ ベ、別に一々一々などしてこないー」

うん、説得力皆無だぜ千冬。
そんなワタワタしてたらこいつものクールなイメージが一瞬で崩壊
しちゃうだ。

「そうか？」

「そうだー！」

本人は断固として認めない氣らしい。

「そ、そんなことよりもだ形無」

「ん？」

「どうするんだ

「何を？」

そこまで言つて、千冬は俺の耳元まで口を近づけて小声で囁く。

「（あのコソイとかいうギリス人のことだ。彼女、間違いなく形無のことを言つているだ）」「

ああ。そうこうとか。

千冬まで心配してくれてるんだな。

「（心配してくれるのか？）」

「（む……。当然だらう。お前の正体がバレてしまえば[冗談抜きで実験動物だぞ？]」

「（それは是非とも遠慮したいな。まあ大丈夫だ。そんな自分の正体バラすようなへマはしないぞ）」

「（形無なら心配は要らないとは思つが……、気を付けるよ？ 何時ボロが出るかもわからんからな）」

「（おひつ）」

俺は千冬に対して頷いて言つ。

俺のことを信頼し、心配してくれる友達が持てるなんて、俺はほんとに恵まれてるな。

「はい皆席につくー」

なんて思つていると前のドアから担任のやまよが教室内に入ってきた。いつの間にか休憩は終わっていたみたいだ。

やまよが入ってきたのを合図にして他の女子生徒たちも一斉に席に戻る。

全員が席についたのを確認して、やまよは切り出した。

「えー、みんな入学式のパンフには田を通したと思つけど、このH

S学園には幾つかの行事があります

パンフをパラパラと捲りながら話を続けるやまよ。

「それでこの時期から一番近いのは『クラス対抗戦』^{リーグマッチ}ね。これは各クラスで代表者を一人決めて戦うものなんだけど。今からそのクラス代表を決めたいと思います。あ、クラス代表ってことはこのクラスの顔になるわけだから、自薦・他薦は問わないけれど相応の覚悟を持つてね？」

クラス対抗戦か。

確かに原作じゃ一夏と鈴が戦つたんだよな。途中で邪魔が入つて決着はつかなかつたけど。

まあこのクラスじゃ、千冬が一番適任なんじゃないか？ 皆は知らないだろ？」このクラスの中じゃ唯一ISの搭乗時間が一時間以上あるし。

「はい」

すると、一人の少女が手を挙げた。

「私、立候補します」

先程俺に突っかかってきたイギリス人、リリイ・スター・ライだ。さつきも思つたけどこの子絶対セシリータイプだよ。女尊男卑を体現しようとしてるタイプの人だよ。

「他にはいないの？」

まあ彼女でもいいんじゃないかな?

他にいなってんならやる氣のある人がやるのが一番だろ? 俺? やだよ。クラス代表なんてやつたらそれだけでフラグ余分に建てちゃいそうじやないか。

「はい」

するともう一つ手が拳がつた。そちらを向いてみれば、誰であろう千冬が手を挙げていた。

なんだ千冬もやる氣なのか。

「織斑さん。あなたも立候補ということでいいのね?」

「いいえ」

……拳手として否定しやがった。
てことは必然的に……。

「私は更識形無を推薦します」

手遅れだった。

千冬さん。アナタは一体俺をどうしたいんだ……! —

#21 フラグを避ける考えはその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀カナシゲリオン

乗れないエス、気づけば戦い

#22 フラグ回避はその時点でのフラグ（前書き）

前回、100万PVを記念してお知らせでアンケートを募集しましたが、たくさんの読者さまがアンケートに協力してくださいました。

本当にありがとうございました。
結果は以下のようになつました。

1・姫無＆簪の学校生活、私生活 36票

2・束の日常 1票

3・親父奮闘記 3票

4・一華と五反田家の日常 4票

姫無＆簪大勝利　ｗｗ

というわけで次回は番外編になります。お楽しみに。

#22 フラグ回避はその時点でフラグ

前回のあらすじ
フラグはいつの間にか建つている

「私は更識形無を推薦します」

拳手したままの姿勢を保ち、そんなことを言い出した千冬に俺は絶句。開いた口が塞がらないとは正にこのことか。

「ち、千冬さん……？」

「形無。何も私は適当に言っているわけではない。形無が適任だと思っているから推薦しているのだ」

いやいやいや。

絶対俺なんかよりも千冬のほうが適任だろ。十人が十人そつ言つつて。

「ふむ。他にはいないの？」

黒板にスラスラと俺とリリイの名前を書き、クラスメイトに確認をとる。やばいこれ原作の一夏とセシリアパターンの臭いがぷんぷんするんだけど。

「はい。じゃあ他に候補者がいないみたいだからこの一人にクラス代表をやってもらつわね」

え？

ちょっと待て一旦落ち着こう落ち着くんだ俺。
今やまよは何と言つた？

『この二人にクラス代表をやってもらつ』、だと……？

「ちょ、先生！？」 クラス代表って一人じゃないんですか…？」

「あら。私はそんなこと一言も言つていないわよ？」

いや確かにそうだけど此処は普通クラス代表は一人 二人も要らない 決闘 僕が負けてリリイが代表つて流れでしそうがアア！！
そこのフラグはへし折らなくてもよかつたでしうが…！」

「先生、クラス代表は一人も必要ないと思います」

俺が血涙を流しているとリリイがそう言つた。どうやら彼女も俺

とは違う理由だがクラス代表が一人であるところに不満があるらしい。

「お、俺も一人で充分だと思います」

俺もリリイの意見に同意する。そんな俺たちを見て、やまよは『はあ、』と溜め息を吐いたあと。

「いいですか君たち。君たちが今居る場所は一体どこですか、リリイ＝スター＝ライ」

「HIS学園です」

「はいではそのHIS学園では一体何を学ぶのでしょうか更識形無

「えーっと、HISの操縦?」

「はいではそのHISの存在と価値が認められる起因となつた『黑白事件』が起きたのはいつですか続けて更識形無」

「一年……半年くらい前かな」

「正確には四九三日前です。そしてそれから今までにアラスカ条約を始めとする様々な条約や協定が各国で締結され、それに基づいて此処日本にHIS学園が設立されたわけです」

ペラペラと語り出すやまよ。一体何が言いたいのかあまり分からぬが、きっとここで口を挟んではいけないだろ。俺の第六感がそう告げている。

「……それとクラス代表が一人だということ、一体なんの関係があるというんですか？」

リリイも同じくあまり意味が理解出来ていないのだらう。訝しげな表情をしている。

「では質問を変えましょつかリリイ＝スター＝ライ。あなたのＩＳ搭乗時間は？」

「……三十分未満です」

おそらく彼女は入試の時に用意されたＩＳを起動させ、簡単な操作が出来るか動かしてみた程度なのだろう。千冬みたいな人間でもない限り、ほぼ全員のＩＳ搭乗時間は三十分未満だ。

「更識形無。君は？」

「四十七時間です」

もちろん嘘だ。

ＩＳに乗れない俺の搭乗時間は当然0。だが本当のことを言つわけにもいかないので口から出任せを言つただけ。

「流石は『黒執事』。搭乗時間は断トツですね

「……先生、搭乗時間なんて女子はみんな似たようなものじゃないですか」

バカにされたと勘違いしたのかリリイは眉をひそめ、やまよを睨むようにして見つめていた。

「そうね」

あつせつとリリィを肯定するやまよはやひるリリィの眉間に寄せられた皺は深くなつていぐ。

「なり……」

「でもね」

リリィの言葉をやまよは遮つて。

「それは私たち、教師たちにも言える」とよ

ああ。成程。

だからクラス代表は一人ね。てことはこの一年は教師たちもつてことになるのか？

「……どういう意味ですか？」

「言葉の通りよ。私たち教師たちも今のアナタたちとおしてEVAの

搭乗時間は変わらないわ」

俺はなんとなくだがやまよが一体何を言いたいのかを理解した。

EVAが発表されてから一年以上経つ。しかし裏を返せば、“まだ

”一年程度しか経っていない”ことにもなる。東が設計開発したこのインフィニット・ストラトスなるパワードースツは彼女の天才的な頭脳あつてこそ誕生した代物。俺たちみたいな今まで普通に平凡な人生を生きてきた人間には、到底理解することのできないようなトンデモ理論の塊なのである。

つまり、教師も生徒もスタートラインはほぼ同じなのだ。

もちろんこのIS学園の教師に選ばれるような人間は相当の学者か工学分野が専門の人間たちだろうし、それなりの実績を有している者たちなのだろうが、きっとそれでも束には遠く及ばない。篠ノ之束という存在は人類の最先端の更に先を行く人間だ。そんな人間が開発したこのIS、現段階で扱いや操縦に長けた教師や生徒はまず存在しない。

だからこそ、クラス代表は一人にする必要がある。

IS搭乗時間皆無の人間がクラス代表になったところでその実力などたかが知れている。それはどこのクラスも同じだ。この学園ではISに関する様々なことを学ぶだろうから、何れは機体にも詳しくなるし扱いも慣れてくるだろう。

しかし今は違う。はっきりと言つてしまえば素人もいいところだ。そんな人間がISに乗り、もし万が一にでもその人間がトラブルに陥つてしまつた時、一人では間違いなく惨事になる。絶対防御があるのはそのISが稼働しているときだけだ。展開が解除されてしまえば身を守つてくれるものは何一つとしてない。

きつとこの事を考慮してクラス代表を一人にしたんだろう。

一人ならばどちらかがトラブルつてももう一人がカバーできる。当然始めのうちはそれすらもままならないかもしけないが、一人ではないという安心感は想像以上に大きいだろう。

しかも俺は『黒執事』として全世界にその名を知られてしまったIS操縦者だ。

やまよとしても俺がリリイをカバーすることが望ましいとでも考えているんじゃないだろうか。

「私たち教師陣もはつきり言つてISには詳しくない。持つている知識はアナタたちとさほど変わらないわ。クラス代表を一人にしてもし万が一トラブルに巻き込まれたとして、私たちに守ることができるという保障はどこにもないのよ。もちろんそれはクラス代表だけに限つた話ではないけれど。でもクラス代表はやはりISに乗る時間は他よりも大なり小なり大きくなる」

「……つまり、二人のほうがリスクが少ないということですか？」

「まあ他にも理由はあるけど、大筋としてはそういうことになるわね」

「……そういう理由があるといつなら、分かりました」

リリイはそれを聞いて納得したようだ。うん、未だに睨まれてるとこを見ると俺はまだ疑われてるみたいだけど、この際それはもういいや。それよりも大事なのはだ。

「先生？ 僕がクラス代表になることは既に決定事項なんですか？」

「？」

「そうよ？」

『今更何言つてんの？』的な返答をされて俺は返す言葉なくそのまま机に蹲つた。

ああ、結局こうことになるのか。

クラス代表が決定したことによるクラスメイトからの拍手を背中に受けながら、俺は魂まで抜け出しそうな大きな溜息をついた。

授業終了後、俺は校舎に隣接する寮へとやってきていた。原作ではいきなり男子操縦者が現れたことで部屋を確保できず幼馴染みである篠と相部屋、という半同棲生活を余儀なくされていたが。

「あ、あつたあつた。ここが俺の部屋か」

俺の場合、IIS学園が完成するギリギリ前に存在が発覚したために男子専用の寮（とは言つても一軒家に近い1DK）を別に用意してもらうことができた。大浴場などはないが一般家庭にあるようなバスルームは設けられており、ちょっとしたホテルのような感じの部屋だ。因みにこの部屋の場所は女子が住まつ寮の隣である。

高級そうなカードキーを通して、ドアを開いて室内に足を踏み入れる。

そこに広がっていたのは。

「お帰りかーくんーー」「飯にするー、お風呂に入るー、それともわ・た・し?」

田を覆いたくなるようなカオスだった。

ちよつと待て。確かにこの部屋、ロック掛かってたよな？
何で？ 何でドアの先に裸エプロンの束が正座してこいつを見てんの？

「……とりあえずだ」

「うん？」

「ちゃんとした服を着る」

「えー？ かーくん束さんのこんなえろえろな姿見てなんにも感じ
ないのー？」

「ゴンヅー！」

「いつたーいー！ かーくんの愛が痛いーー！」

「追い出すぞ」

一瞬にしていつもの服に戻っていた。どんな早着替へだ。
というかなんで束がここに居る？ ロイツ入学式や授業にも出で
なかつたのに。

「で？ 何の用？」

「かーくんに言つ忘れてた」とがつて

言い忘れた？ なにか『黒執事』に関することだらうか。だとし
たら俺の専用機の設定をしつかりさせてもらいたいんだけど。

「『黒執事』についてのことか？」

「まあそれもあるんだけど、一応かーくんにも言わなことこけない
ことがあったの忘れてたんだよね」

ナウルツ東はどうつきの笑顔で。

「東さんは今日からこの部屋に住むからよひしへ、かーくん」

.....
はい？

#22 フラグ回避はその壁紙でフラグ（後書き）

次回

新世紀ヒメザシゲリオン

まいこさんを、兄に

#番外 彼女たちの日常（前書き）

お待たせして申し訳ありません；
風邪にやられて寝込んでいました……

更識家。

一見して何処にでもあるような家系だが、その本質は暗部に対抗するための対暗部組織『更識』を有する一家だ。その大黒柱として君臨する更識家の主は十六代田当主、更識楯無。

母、更識瑞穂はおしとやかな大和撫子で家事全般をなんでもこなるパーソナルな母親（性格、天然）であり、長男の更識形無は世界でたつた一人しかいないISを操縦できる男子。

そして二人の妹。

長女の名は更識姫無。

次女の名は更識簪。

これは更識家の娘つ子二人のとある日の物語。

。

「おはよー」

「ああおはよー姫無」

襖を開いて居間に入った私は、既に食卓に並べられた朝食を見て『今日は鮭か』なんて思いながら席につく。一足先に居間にやって来ていた父さんは新聞を広げていた。

「姫無も今日から一年生か、早いもんだなあ……」

感慨深そうに父さんが新聞をたたんで呟く。そう、私、更識姫無は今日から小学校一年生になる。上級生になるのだ。

「学校は楽しいか!? 苛められてたりしないだろ? なー?」

「大丈夫だつてば」

まつたく。この父は前々から思つていたけど少々……いややすぐく過保護だと思つ。

思つ出されるのは去年の私の入学式。たまたま席が隣になつた男の子とお喋りしていたら、教室の後ろで父さんが負のオーラ全開で腰に差した真剣を抜こうとしていた。

その場は母さんが父さんの襟首を引っ付かんで廊下のほうに連れ出してくれたから事なきを得たけど、男の子とお喋りしていくらいで抜刀しようとするとかもう常識的に可笑しいんじゃないだろうか。

『どうか銃刀法違反なんじゃ……やめよ! 考えられないほうがいい気がしてきた。』

確か兄さんもそんなことを言つてたし。

「兄さん……、はあ……」

私は目の前に置かれた湯気の立つ味噌汁に視線を落として溜め息

を一つ。

「の溜め息の原因は言つまでもない、私の兄さんである更識形無がこの家に居ないからだ。

それは兄さんがあのI.S学園の寮に住むことになつたからなんだけど、兄さんがあの『黒執事』だったなんて本当に驚いた。女性にしか動かせないI.Sを兄さんが操縦できるんだから、妹の私としても鼻が高い。クラスの友達に自慢したほど。

……それはいいんだけど、問題は兄さんがI.S学園の寮に入つてしまつたつてこと。

そう。会えないのだ。

兄さんに。毎日。

…………うわああああああああ――！

ほんとにイヤだ――！

兄さんに会えないなんて私はこれから一体どうやって毎日を過ごしていくべきなの――？

今まで夜中にこつそり兄さんの部屋に忍び込んで布団に潜り込み、一緒に朝を迎える（決して卑猥な意味ではない）のが日課だったのに、今ではそれが出来なくなつてしまつた。

これは私にとつての死活問題だ。

死ねる。というか最初の一週間くらいは本気で私も工芸学園の寮に住もうと考えていたくらいだ。

兄さんの温かみのある布団だからこそ今まで気持ちよく眠れていのであって、それがなくなれば私は間違いなく不眠症になる。といふかなってしまっている。

毎晩兄さんの部屋で寝ているがやはり本人が居ないとダメ。一人で寝るのがこんなに寂しいなんて思つてもみなかつた。

「はあ……」

「どうした姫無。元気がないぞ。……おせかやつぱり苛められて！」

？

「違うから」

私の目の前で騒ぐ父さんも兄さんが家を出ると知つたときはそれはもう大変だつた。

きっと兄さんもああなることが予想できていたからギリギリまで言い出せなかつたんだろうなあ。母さんにはもう言つてあつたみたいだけど、父さんに寮暮らしを告げたのは工芸学園に入学する3日前のこと。

兄さんが『黒執事』の正体だつて報道された時も父さんはそれはもうすこぶる暴れたけど、それがまだ可愛く思えてしまつほどの光景だつた。

そして暴走。

あの時の父さんの行動を分かりやすくかつ簡潔に表すのならまさにこれがぴったり。

居間に兄さんと父さん一人きりで入つて行つてから数分後、私や簪が襖の近くで聞き耳を立てていると、いきなり大きな泣き声が聞こえてきた。

ギョッとする私や簪を尻目にその泣き声は段々と小さくなつていつて

ズバンッ！

抜刀の風圧のせいか私の目の前の襖が横に真つ二つになつた。

息子の家離れを認められない父親が起こしたのが真剣を振り回すつて……。

どれだけ我が子大好きなんだうちの父さんは。

結局、その場は父さんの部下数十人と最終的に投入された母さんによつて兄さんの寮暮らしを本当に渋々認めた父さんだったけど、それからしばらくは魂が抜けたみたいに真っ白だった。

「じたなんじや私の時も同じようなことになるこじやないかといつ
気がしてならない。

「姫無どつかしたか？ 箸が止まつてゐるや」

「あ、なんでもない」

いつの間にか止まつていた箸を再び動かしながら、私は内心でこ
つそりと決めていたことをもつて一度思ひ出す。

私も、IIS学園に入学する。

これは兄さんがIIS学園に入学すると知つた時から心に決めてい
たことだ。

IISが発表されて約一年半。“基本的に”女性にしか動かせない
IISの授業は小学校からも少しづつ取り入れられるようになり、私
も兄さんの後を追いたいと思つよつになつたから。

となると私も当然IIS学園に備え付けられた寮に住むことになる
だろうから、今のところ父さんには絶対に秘密。

とこゝか絶対に言いたくない。あんな惨事を巻き起しきるのは御免
だし。

将来IIS学園に行くということを告げたあの父さんの暴走っぷ
りが簡単に想像できてしまった私は、それを流し込むように味噌汁

をすすつた。

「おふあ ょう……」
「あいおは ようひん」
「おは ようひ」
「おは ねー」

未だに意識が覚醒しないまま居間に入った私にお母さん、お父さん、そしてお姉ちゃんが声を掛けた。

此処でようやく、私は意識が覚醒するらしい。

理由は簡単。

『おは ようひん。 相変わらず眠やつだなあ』

二つも「やつて声を掛けたお姉ちゃんが、二つともいないから。

お兄ちゃんは『うい』とかいうものに乗れる数少ない人で、その

ための学校に行くために一人暮らしをするんだって。

……せつめい言つて私はお兄ちゃん離れたくない。

だから私はお兄ちゃんに

『……私も、行く』

いつもは「んな我が儘は言わないけど、それでもお兄ちゃん離れたくなかったんだもん。

だけどお兄ちゃんは。

『ははは。俺だって簪や姫無とは離れたくない。でもこれはあの糞ウサ……友人のためでもあるから』

『私も……行くつ……』

『……簪？ なんで俺の制服の裾をしわくちゃになるまで掴んでるのかな？』

『……いいつて言つまでも……、離さない……』

『ちよ、母ちゃんああああん…？ 我が妹の瞳からハイライトが消えてるんですけどオオおおおおッ！？』

『あらあら、それは大変ねえ』

『助けようといつ氣が感じられない…！…』

結局、お兄ちゃんにこつこつとはできなかつた。うひ、今日から小学校に通うから、ランドセル背負つた姿とか見て欲しかつた

でもまあ、これから先ずっと余えないってわけでもない。夏休みとかのお休みの長い時には家に帰つてくるってお兄ちゃん言ってたし、『ソングセル姿はそのときの余樂しみひとつ』お兄ちゃん。

「『』馳走様。ほら簪、早くしないと学校遅れちゃうよ。」「あ……、待つて……！」

私よりもひと足先に朝『』飯を食べ終わつたお姉ちゃんはそれくさと居間から出てこつてしまつた。
なんて薄情な姉なんだ。妹が食べ終わるのを待つてくれてもいいじゃないか。

「簪ー？ 早く食べないと遅刻しちゃうわよー？」

お母さん『』やつ言われ、壁の時計に目をやられば。

「わ……、わわ……ッ」

遅刻、ギリギリ。『』うやらお姉ちゃんは待つていてくれてたみたいだけど間に合わないと思つて私を切り捨てたみたい。……急がないと。

私は『』飯を急いで完食し、丁寧に手を合わせた後、直ぐ様居間を飛び出した。

慌てて出てきた簪と一緒に登校した私は、なんとか遅刻する「」となく教室に入ることができた。
進級してそろそろ遅刻なんてしたらクラスの監に間に思われちゃうだし。

「姫無ちゃんおはよー」

「あ、紗季。おはよー」

「今日はなんだか遅かったねえ。寝坊でもした?」

「つうん。そういうわけじゃないんだけど」

全力ダッシュのせいで疲れきった私が机につづ伏していると、シヨートカットの女の子が私に話しかけてきた。彼女の名前は椎名紗季。^{さき}この小学校に入学してから初めて出来た友達で、今では幼いながらに親友といえる存在だ。因みに一年連続同じクラス。

「一時間目体育だよ。早く着替えなきゃ」

「あ、そうだつたわね」

紗季に言われ私は机の横に引っ掛けであつた体操着袋を机上に置き、中から体操服と体操ズボンを取り出す。男女関係なく同じ場所で着替えるのはなんだか気に食わないけど（主に男子たちの存在が）、先生にそんな文句を言つても意味がないので私たちはそそくさと着替え、教室を後にしてグラウンドへと向かった。

「今日は鉄棒をします」

ジャージに着替えた担任の先生（女性）がホイッスルを吹いて私たちをグラウンド脇に設置してある鉄棒の前に集合させてそう言った。

「姫無ちゃん。鉄棒得意？」

「うーん、まあまあかな」

「私、得意なんだあ」

私の隣で体操座りした状態の紗季がはにかみながら叫び。自信満々だなあ。紗季は運動得意だし、こいつはこいつで存在感を示してるんだろう。

私は苦手じゃないけど、紗季みたいに一番大きな鉄棒で『大車輪』なんて出来ないから普通の部類に入ると思ひ。……なんか間違ってる気もするけど、まあいいや。

「はい、じゃあみんな鉄棒に手を付けてー」

先生の合図で、各自鉄棒に手を掛ける。

でも、こいつはこのときの男子ついてこに存在感を主張する生き物みたいで。

「おいそこ俺が使つんだからどうぞよ」

必ず「こんな」とを言い出す男子が出てくるのよねえ。他にも場所は沢山空いてるのに、どうして彼はこんな女子が密集した地帯に踏み込んでくるのかしら。

「こりは私たちが使つてるもん。大輝くんは空いてるところを使えば

だいき

いいじゃない」

どけと言われた女の子は最もな正論を大輝とかいう男の子に言い放つた。このクラスになつてから日が浅いから全員の性格とか立ち位置を知つてゐるわけじゃないけど、大輝はなんていうかガキ大将みたいな男の子だ。自分の思い通りにならないと癪癩を起こすような子供。ほんと幼稚だなあ。

「なんだと！？ いいから俺の言つ」と聞けよ！…」

ああ、また癪癩。一体どんな育て方されたらこんな子供に育つのよ。うちなら絶対こんな子供には育たないと思つ。兄さんみたいな大人びた人間になるはず。

「きやあ！」

「ドンッ！…」といつ音がした後、地面になにかぶつかつた音が響いた。

大輝が女の子を突き飛ばしたんだ。

「……それはやりすぎでしようよ」

「ああ！？ なんだよお前なんか文句あんのかよ！…」

ボソッと呟いた私の声が聞こえていたみたいで、今度は私に突つかつてきた。ほんとジャイアンみたいな男の子ね。

「女の子突き飛ばすなんて男として恥ずかしくないの？」「てめ！…」

大輝は私もさつきの女の子と同じように突き飛ばそうと腕を突き

出してきた。

でも、残念。

「おわッ！？」

大輝が素つ頓狂な声を上げる。理由は簡単。いつの間にか自分が地面の上に倒れていたから。

ほんとは『いっぺんじん』相手には使つない父さんに言われてたけど、『ういう時ならいいのかな？

「な、なにしゃがつた！？」

「更識流よ」

「なんだよそれ！」

「さあねえ」

あんまり言ひちゃいけないだろ？からこれ以上は言わないでおこう。今のは相手の腕力を利用して相手を投げ飛ばす更識流の技の一つだ。小学校に上がったころから父さんに教わり初めて、二つくらいの技ならなんとか使えるようになった。父さんや兄さんと比べるとまだまだだけどね。

「なにしてるのアナタたち！？」

騒ぎを聞き付けた先生が私と大輝の前までやつてきた。先生、出来ることならもう少し早く来もらえたならよかつたんですけど。

「更識さん、これはどういふこと？」

「あー、えーっと……」

どうしよう。

女の子を突き飛ばしたのが気に食わなかつたので私が彼を突き飛ばしましたなんて言えないし。

突き飛ばされてた女の子とも仲が良いわけじゃないしなあ。
一体どうこの先生を言いくるめようかと私が画策していると、

「……俺が鉄棒から落ちたんだ」

大輝がポツリと呟いた。鉄棒から落ちた？ 一体彼は何を言つて
いるんだろうか。一部始終を見ていたクラスのみんなも首を傾げて
いる。

「俺が鉄棒から落ちたところに、ここに人が来てくれたんだよ」

私のほうを指差しながら俯き加減で言つ大輝に先程までの威勢の
良さは感じられない。なんかこいつ、しゅんとした感じになつっていた。

「やうだつたの。とりあえず、大輝君は保健室に行きましょ」

先生に言われてゆつくりと立ち上がつた大輝は先生に連れられて
保健室のほうへと歩いていく。

んん？ んんん？ なんだろう。大輝が執拗にこっちを見てくる。
チラチラとかそんなレベルではなく、穴が開くくらいジーッと私の
ほうを見てくる。

なんだろう。まだ私に突つかかつてこようとしているのだろうか。

……なんだか顔が赤いな。熱でもあるんだろうか。

「おつ星、おつ星~」
「……嬉しそう、だね」
「だつてえ、待ちに待つた給食だよお~」
「私、あんなに食べきれないから……」
「じゃあかんちゃんのプリン食べてもいい?」
「それは……ダメっ」

時間は四時間目が終わった後、つまつは給食。

此処一年一組の教室でも、クラスメイトたちが給食を前にわざわざ楽しそうにしてくる。

そんな教室内で私とお喋りしているのは袖がだぼだぼの服を着ているおつとりとした少女、布仏本音。

私の幼馴染みであると同時に、専属メイドでもある少女だ。

もともと更識家と本音ちゃんの布仏家は主従の関係にあるみたいで、小学校に上がるのと同時に私にも「つして専属メイドがついたわけなんだげ~」。

「ん~。おこしこね~」

はつあつ血ひの子がメイドとして働いてるところを見たことがない。といつか給食で焼魚や白米をぶつち無視してこきなりプリンを食べるつてびつなことだらつか。

お姉ちゃんの専属メイドは本音ちゃんのお姉ちゃんの虚をとで、あの人はとてもしつかりしているのに、この姉妹は何だか正反対だなあ。

「……かんちゃん」

「なに?」

「今なんだかすい」もく失礼な」と考えてなかつたあ?」

「……全然」

「気になる。最初の間がすいもく気になるよお」

こつものせせんとしたるのこいつのこいつは敏感つてなんなんだろ?。私は内心を悟られなこよつて飯を口に運ぶ。

「ああわつこえはあ、最近かたりとせどんな感じのおへ」

かたりん、とは私のお兄ちゃんである更識形無のひとだ。

本音ちゃんはお兄ちゃんによく遊んでいたから、こつの間にかそんなあだ名でお兄ちゃんを呼ぶよつになつてこつた。

「お兄ちゃんとせ……」の一週間くらいになつてない……

「H学園に入学つて寮住まいだからねえ」

「……寂しいけど、仕方ない」

嘘だ。

仕方ない、なんて思つてない。出来る」となら直ぐにでもお兄ち

やんのところへ行つて遊んだりしたいし、同じ屋根の下で過¹した
い。

だけそれはお兄ちゃんに迷惑をかけることになつたやうに、や
つぱり仕方ないのかな。

「かんちゃんは優しいなあ」
「え……？」

唐突にそう言つた本音ちゃんのほうへ、いつの間にか下がつてい
た顔を上げて視線を移す。

「かんちゃんはかたりんに迷惑かけないよ」
「……どうして、そつ黙りの？」

「だつてかんちゃん、今ものすゞく寂しそうな顔してたよお？」

言い返せなかつた。

ピンポイントで私の感情を当ててきた本音ちゃん。ほんと、いつ
もはあんなにやる気なさうなのに、いつこう時だけ彼女はすくくな
るつていうか。

「ああ、当たつてたあ？」
「どうして……分かつたの？」
「分かるよお」

「へへへ、と本音ちゃんは屈託のない笑顔で。

「私は本音ちゃんの専属のメイドだからあ」

私はそれを聞いて口元が緩むのを感じる。専属メイドのこつよ
りは親友つていうくくつのほつがしつくくのよつがするけど、
本音ちゃんだからな。

「本音ちゃん……」

「なあにかんかやん？」

「ありがと！」

「えへへえ、どうこたしまして」

私たちは笑い合って、給食の続きを楽し

、

あれ。

私のプリンがない。

チラツ（私が本音ちゃんを見る）

テヘッ（本音ちゃんテヘペロ発動）

本音ちゃんの机には、空になつたプリンの容器が一つ（・・）。

……絶交、しようかな。

「ただいまー」

「あらお帰り姫無。今日は早かったのね」

「うん。五時間田までしかなかつたから」

私は脱いだ靴を丁寧に並べて廊下を歩いていく。あの体育の時間以降、大輝がなにかにつけてこっちをジロジロ見てくるのが気になつて仕方がなかつた。根に持つているんだろうか。そんな男の子はモテないだろう。

私はランデセルを自分の部屋に放り込んで、とある部屋へと早足で向かう。

「ただいま、兄さん」

やつて来たのは兄、更識形無の私室。私がいつも寝ている部屋だ。最近は兄さんが居なくとも躊躇なくこの襖を開けることが出来るようになってきた。

今となつては「こ」が私の私室と言つても間違ひではないような気さえする。少しづつ私物も持ち込んできているし。

私は軽く周りを見回して、兄さんの勉強机の上に置かれた写真立てを手に取る。

写真には笑顔で写る更識家の面々に父さんの部下たち。総勢五十人にも上る大人数の中心に、私や簪、そして兄さんが居る。

「……はあ、」

会いたいなあ。

出かけるなら、今すぐにでも会いに行きたい。

電話とかならいつでも出来るじゃないか、とか思うかもしぬないけどそれも実際は難しい。なんと言つても兄さんは世界に今のところたつた一人しかいないISを操縦できる男性。しかもあの『黒執事』だ。世界各国からしてみれば喉から手が出るほど欲しい人材に違ひない。

もちろん日本政府としてもそういうたる国からの圧力に屈すると兄さんを何處ぞに取られちゃうわけだから、兄さんの周囲にはとてもなく厳重な情報規制とかがされているみたい。それは家族からの電話一つとっても例外はないらしく、たつた一回の電話のために幾つもの仲介が入つてしまつて凄く時間がかかる。

だから、滅多に電話なんて出来ないんだよね。

「あ……」

「あら簪、じんなとこにビビついたの?」

不意に開いた襖の先に立つていたのは我が妹である簪。向こうもここに私が居るとは思つていなかつたのか少しばかり驚いているみたいだ。

「……お姉ちゃんこそ、ここでなにしてるの……?」

「何つて、特になにも」

「じゃあ、その手に持つてゐる写真はなに……」

「あの時撮つた写真よ、ほり」

なにやら不機嫌になつつある簪へ私は持つていていた写真立ての写真を見せる。

ははあん。どうやら簪も兄さん成分をこじこじ撮取しにきたみたい。写真を見た途端に頬が緩んでいくのがわかる。

「お兄ちゃん……早く帰つてこないかな……」

「夏休みには帰つてくるつて言つてたじやない」

「そんなに、待てない……」

同感。夏休みまでまだ三ヶ月以上もあるわけだし、それまで兄さんに会えないのは苦行以外のなにものでもない。簪も耐えられないのか、若干涙目になつているようにも見えた。

「簪」

「……なに」

「そんな顔じやあ兄さん」笑われかねつわよ~」

「!?

「泣いた顔見たつて兄さんは喜んじやくれないと想ひがだ」

「……な、泣いてなんか、いないもん……」

ぐしごしと田元を擦りながら言われても説得力ないなあ。全く、可愛いやつめ。

「ほり」

「え……」

「もうすぐ母さんが夕飯の準備始めるわ。手伝いに行きましょ」

兄さんに会えないのはもうひん寂しいけど、なにも一生会えないわけじゃないし。取り敢えず今はこの泣き虫な妹を一人前にすることが私の仕事かな。更識流もこの子はまだまだ会得できそうな感じじゃないし。

「簪。お姉ちゃん頑張るよ」

「……なにを……？」

「色々つー。」

そう言つて私は簪の手を取り、母さんがあのひびき声へと駆け出した。

#番外 彼女たちの日常（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

知らぬうちにたつもの

旗フラグ 噺トランク 寝癖スヌーズル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2621y/>

双六で人生を変えられた男

2011年12月19日14時37分発行